

我々の傲慢が生める人もなげの振舞に、御衣を剝がれ給うたのは、我々の慾心の冷酷さに、主の痛苦、悲哀は我々の快樂の法外なのに、正しく相應して居るのであります。

さて我身を顧みて見ますと、一番罪深いのは心であります。心から總ての罪は生れるのであります。悪い思も、耻しい言も、汚らはしい行も、その他の醜い、厭な、恐ろしい罪惡は、悉く心の産物なのであります。随つて主は、肉體や、五官や、魂やを傷けられ給ふ前に、先づ心を破られ給はねばならないのであります。

人に愛されたい、燃ゆるが如く愛されたい、極端に愛されたい、熱狂的に、意識的に、感情的に、無我無中に愛されたいと欲する所から、人はよく身を誤り、無罪の清さを失ひ、腐り果て、了ふものであります。

この道ならぬ罪を償ふがため、主は御受難の際に、使徒等からは極めて冷淡にあしらはれなさいました。その冷淡は、やがて無關心となり、裏切りなり、見棄て、否んで、毫も顧みない迄に至りました。敵からは恐ろしい憎惡を浴せられ、血汐に塗れて斃れ給ふのを見ない中は、さうしても甘心されない、と云ふほどの憎惡を浴せられ給うたのであります。

(2) ゲツセマニーの園に於て、主の聖心は常ならぬ憂ひ悲みに沈み、ありとあらゆる氣遣ひ、恐怖、嫌厭に壓倒され、哀しい、腸もちぎれさうな嘆きの聲を絞つて祈られました。しかもその間に、ペト

ロミヤコボとヨハネは、正體もなく眠り込んで居ました。彼等の主にたいする愛は、目を醒して共に祈るだけの熱さへも有たなかつたのでした……間もなく主は衆議所の遣した捕吏の前に立たされ、新たな打撃に聖心を破られなさいました。無論それは豫期せし打撃、前以て告げ置かれし打撃ではありましたが、夫れにしても、やはり残酷な、忌々しい、陋劣極まる裏切り、偽善を装へる接吻の打撃であつたのであります。

主は終に敵の手に捕へられなさいました。弟子等はそのまま、主を見棄て一散に逃げ失せて了ひました。ゲツセマニーから大司祭館まで、主に附添つて行くものとは一人もなく、主の憐れな聖心、拜むべきその聖心は全く孤獨でありました。僅にペトロミヨハネが、遠方から怖々と後を尾けて行つたのみであります。

(3) 然し大司祭館には、更に新たな悲みが俟伏せをして居ました。あのペトロ、熱烈にして献身的な魂の持主たるペトロ、主の爲には二つミなき生命でも喜んで投出すと、火の如き熱誠を以て誓言したあのペトロが、三たびも「知らない、知らない」と主を否み、主は何等の關係もない旨を公にして憚らなかつたのであります。

弟子等に裏切られ、棄てられ、否まれ給うた主は、誓つてその肉を啖はんご、猛り狂ふ惡魔の如き敵に直面しなければなりません。カイアアを始め、衆議所の面々は、主にたいして暨へやう

もない憎悪の念に燃えて居ます。その憎悪の念に云つたら、實に底も知られぬ深い悪感情で、どんなに不憫極まる主の御姿を見ても有らず、どんなに痛ましい御有様を打眺めても、感動する所なく、何時になつても鈍ることなく、衰へることもない、極刑に處して、御生命を奪つた後までも、なほ消え失せないと云ふ程の恐ろしい悪感情でありました。

(4) 加へて、民衆までが生に背を向けました。ガリレアの豫言者と、敬慕、崇拜せし愛情の一片すら今は残つて居ません。神殿の門で、橄欖山上で、荒野や、ゼネザレト湖畔で感嘆し、驚喜し、讚美、稱譽せし輩も、前のことはケロリと忘れて了ひました。自分等の過失を赦し、不幸を慰め、貧者を憐み、幼児を撫でさすり、パンを殖し、病者を癒し、死者を復活させ給うた大恩さへも思出しません。主の御側に附添ひ、その護衛に任じ、之を國王と選み、名譽の王冠を加へようとした當時とは打つて變つて來ました。あ、我々は夢を見て居ただ、欺されたのだ、山師にかつたのだ、と思ひ込んで、いよく主に愚弄、嘲笑の唾を吐きかけるのでありました……彼等の心はすっかり翻へりました、「可愛さ餘つて憎さ百倍」と云ふ鹽梅に、彼等の主にたいする心持は全く一變し、狂暴、残忍な敵愾心となつて來たのであります。

あゝ其時、其日、主の御胸は、怒り狂へる民衆や教師等に取圍まれ、呪ひの標となり、すべての人にアナテマ(破門)を投げつけられ、悪言、暴語を浴せられて居ると見給うた時、如何にちぎられ、

劈かれる思ひがし給うたでいませうか。

(5) 一感違ひでもなさらねば、幻迷に陥り給ふこともないだけに、御苦みは一層猛烈でありました、主は人の胸中も、その胸中に蟠れる考も、望も、企ても、ありのまま、に讀破り給うたのであります。御自分の人となりや、その勝れた人格を、救世の大事業を、メツシアの資格を、人の子や神の子の肩書を否認し、攻撃し、罵倒せる人々の反抗を、一つも見落し給はぬのであります。人々が御身に加へる憎悪の妄動、その進歩し、發展し、擴大して行く有様を、一々眼前に打眺めなさいました。その荒々しい憎悪が、潮の寄せるが如く、海嘯の襲ひ來るが如く、恐ろしい勢を以て眼前に迫つて來る、刻一刻と脹れ上り、山なす大波となり、どうどうと唸を擧げて打寄せて來るのを一々御覽になりました。

この聖心を苦める憎悪には、何やら際しないものがあり、聖心の嘗めさせ給ふ悲みにも、また何やら限らないものがありました。人は常にこの悲みの廣大さを譬へて「茫茫たる大海原の如し」と言つて居ますが、然しその譬は餘りにも貧弱であります。主の聖心に絡みついた悲みを測るには、之が原因たりし憎悪、ユデア人の胸中を昂奮させ、憤激させ、咬みなさいなめて止まなかつたその憎悪を、測つて見る必要があります……それと共に我々の不潔な愛情、汚はしい望こそ、彼等の憎悪を湧かす泉ではなかつたかと思ひ、痛悔の胸を打つて主の御足下に平伏さねばなりません。

(6) 一人はたゞ愛されたい許りでなく、また自分に對するその愛を言明して貰ひたいと思ふものであります。偽りなき誓言を幾度も繰りかへし、長々と熱情を吐露し、ありとあらゆる調子を以て讚辭を浴せられ、而も其爲に熱烈火の如き言葉を、色々と抑揚緩急に富める辭句を、絶對的誓言を用ひられたいご望むものであります。この種の誓言は、何時まで聴いても飽くことを知らない。それこそ實に終を知らぬ稱讚である、自分の爲に引きりなしに歌はれる讚美歌である。忠誠を誓へる言葉を、型に入つた様な同じ言葉を、何時までも繰りかへさせないと承知が出来ない、殊に不潔な戀愛に狂へる男女間には、この種の誓言が最も盛にくりかへされ、それによつて彼等は眞の幸福を味へるものと信じ込んで居るかの如く思はれるのであります。

是等の不潔な愛情の罪滅しにきて、主は御受難の際に、愛の一語も耳にし給はぬのでした。主を愛して渝らない人々までが、深く沈黙を守つて、一言も發しません。聖母も沈黙なさいました、ヨハネも沈黙しました。マリヤ、アデレナ、その他の婦人等も沈黙しました。何處に於ても、ゲツセマニでも、衆議所でも、總督府でも、ヘロデの前でも、カルワリオでも、この沈黙は破れませんでした。主に向つて、「御身は聖者です、義人です、我等は御身を禮拜します、祝します、愛します」と云ふ聲が、たゞの一聲でも地から上ることもなければ、天から下ることもありませんでした。やつと最後に及んで、一人の強盜が悔い悔め、感情にふるふる聲を出して、主を救主と認めただばかりで、いよく

最後の息を引取り給うた時、百夫長が驚いて、「實際この人は神の御子であつたよ」と叫んだばかりであります。

(7) 愛は沈黙しましたが、裏切は決して沈黙しません。ユダは主を捕へさすが爲めの合圖として、「師よ、安かれ」と云つて、主に接吻しました。この挨拶、この接吻こそ、憎んでも足りない虚偽の挨拶であり、偽善の接吻でありまして、是ほど主の御心を傷けたものはありませんでした。愛は沈黙しましたが、臆病は沈黙しません。ペトロは大司祭館の庭に、その否みを、主を知らない存じないと云ふ誓言を大に響かせました。「私はこの人を知らない、この人の仲間ではない、誓つて知らない。知つてゐながら知らぬと云ふのなら、どんな罰を受けても宜しい」と繰返しく断言いたしました。固く誓つて断言したのであります。

愛は沈黙しても憎悪は沈黙しません。カイファの館に於て、大聲を擧げ、異口同音に殺意を公にして、「其罪は死に當る」と叫びました。ピラトの法庭に於ては、最初、曖昧な聲を響かせるに過ぎなかつたが、やがて大膽になり、銅鑼聲を擧げて、耳も破れよとばかりに叫んで、民衆を釣り込みました。民衆は教へられたまふ、死物狂ひに叫びました。お極り文句を繰返しました。それは亦どんなお極り文句でありましたでせうか。「誰を赦さう？ イエズスカバラバか」と問はれた時、彼等は聲を揃へて「是でない、バラバを赦せ」と叫びました。「然らばキリストと云はれるイエズスは、どうしたら可い

のだ？」と問はれて、彼等は又聲を揃へて、號令的に「十字架にかけよ、十字架にかけよ」と答へるのであります。

(8) 皆さんが耳を喜ばせ、心を慰め、之を昂らせる様な折返しを聞きたい時は、この聲の猥りがまじさを償ふが爲め、主が御心を劈く憎しみの折返しを聞かされたことを思ひ出して下さい。皆さんは色々な調子を、自分の變り易い、我儘な心の状態に応じて、或は柔い撫でるが如き音を、或は強い底力の籠つた聲を耳にして、それ／＼に言ふべからざる樂みを味ひたいと思ひなさいませう。斯る場合には、主が何んなに豪い目を見て、この享樂氣分を償つて下さつたかと思つて見なければなりません。衆議所で、ピラトの法庭で、カルワリオで、憎悪はありとあらゆる言葉を語つて、主の聖心を深く傷けました、官吏や判事の言葉を語つて、「冒瀆の言を出したのだ。我等は何ぞ尙証人を要しよう」と叫びました。卑しい下郎の言語を語りて、「キリスト様とやら、汝を打つた者の誰なるかを我等に豫言して下さい」と叫びました。民衆の言葉を語つて、「その血は我等と我等の子供の上に被れかし……取つて除けい、取つて除けい、十字架に釘けよ」と叫び、ローマ兵士の言葉を語つて「ユデアの王、安かれ」と叫びました。怒號の言葉を語つて「貴官がもし此人を免されたら、セザルの忠友ではありませんぞ。凡て己を王とする者はセザルに叛くのです……セザルの外、我等に王はない」と叫びました。不敬神、あてこすり、冒瀆、殘酷の言葉を發して「あ、お前は神殿を毀つ

て、三日の中に之を建直すと云ふ者、自らを救へ……もし神の子ならば十字架より下りよ……彼は他人を救つたのに、自らを救ひ得ない。もしイスラエルの王ならば、今十字架より下るが可い。然らば我々も彼を信じよう。彼は神を頼んだのだ。神がもし彼を好し給うたら、今救ひ給ふであらうよ、自分こそ神の子だと誇つて居たのだもの……」

斯くて司祭長、律法學士、ファリサイ人、長老、盜賊等のありとあらゆる聲々が彼方からも此方からも連發して、一つに絡み合ひ、強い、大きな、恐ろしい怒鳴となり、惡罵となり、咆哮となり、野卑陋劣な銅鑼聲となり、以てその侮辱に、その挑戰に、その殘忍酷薄に一層の力を添へるのであります。

我々が耳に快い、胸をわく／＼させ、心を躍り立たせる様な嬌かしい聲を、良からぬ譽言を、汚ら

しい愛の誓言を樂んだが爲に、主はかゝる悲惨事を見給はねばならなかつたのであります！噫……(9) 我々はたゞ愛情を披瀝する言葉のみに満足することは出来ません。その愛情が何かのしるしに、何かの証據品に、何かの運動や、行爲の上に顯されんことを要求するものであります。我々を愛したい、我々の氣に入りたい、我々の心を喜ばせなければ、さうしても夫だけのことを爲ない譯にはまりません。我々が幸福に酔つて居る時は、共に躍り喜び、悄然と悲みに沈んで居る時は、共に貫ひ泣きをし、凱歌を奏して居る時は、無我無中となつて、それを祝賀しなければならぬ。彼等の眼付に、

彼等の口元に、彼等の態度や、歩き方や、物の言ひ振りやに、我々を愛して居る、慕つて居ると云ふ証據を見出さないならば承知が出来ない。時としてはその迷はし、溺れ込まして居る其人に向つて、如何なる愛の証據を要求して居ますでせうか……ゲツセマニーの園からカルワリオまで、主の味方は皆嚴重な控目の中に立籠つて、動かないのでありました。彼等の中に、手をさし伸すもの、主の御體を支へようとする者、敵の手より救ひ取つて上げようとする者は、一人として居ませんでした。怖々と遠方から後を尾けて、自分は決して無關心で居るのではない、とふしらしを見せる位が關の山でした。無論、天使が顯れて慰めました。通りすがりのシメオンが強ひられて十字架を擔ぎました。御母は兩腕をさし延しなさいました。ウエロニカは汗と血に塗れ給へる御顔を拭つて上げました。カルワリオへお登りになる途中、同情の涙に咽んだ婦人も二三ありました。主が十字架上に死の苦みに憐れませ給ふ時、御母やヨハネと共に、涙ながらにその十字架の下に停んで居る婦人等もないではありませんでした。盜賊の一人は敬意を表して、主の無罪を辯じ、見物人の一人は海綿を酢に浸して、火の如く焼けた御唇にさし上げましたが、然し是だけを外にして、主は何等同情のしらしをお受けになりません、聖心は全く孤獨であらせられたのであります。

然し反對に御體を苦め、御心を勞いて餘あるほどの示威運動は、數ふるに違ない程でした。主は御身に加へられる凌辱をば、一つでも避けようとはなさいませんで、むしろ進んで之を堪忍び、以て我々の罪を贖ひ下さつたのであります。我々の心が火の如き愛の表象を得て、無暗に樂まうとするその快感をば、償つて下さつたのであります。

(10) — 今イエズス様が犠牲となり給うたその經過を一々辿つて御覽なさい。我々の心の渴望せる快感に相應じて、その經過が如何なる苦みの種であつたかは、それこそ一目瞭然でありませう。ゲツセマニーで、主は言ふべからざる不安、懊惱に御心を勞かれ給ふその間に、弟子等は正體もなく眼り込んで居ました。暫くすると、ユダは捕手の先導に立つて、園中へ進み入り、無禮極まる抱擁を與へ、憎々しい接吻を献げました。衆議所の下郎等は、御顔に唾きし、拳固を見舞ひ、平手で打叩きました。ヘロデの宮殿では、白衣を着せて之を廻り、總督府では御衣を剥ぎ取り、ローマ兵の朱い外套をなげかけ、茨の冠を作つて頭に載せ、右の手には葦を持たせ、容赦もなく打叩いた揚句、御前に跳き、「ユデアの王安かれ」と嘲笑ひました。我々は人に崇拜されたい、心臓に早鐘を打たせ、盛に鼓動らせる程の崇拜をしきりに欲しがものであります。この崇拜の代りに、主の御心は、かゝる嘲りの崇拜を受け、その快い阿諛の代りに、これほごまで無慘に廻られ、愚弄され、打叩かれなかつたのであります。

カルワリオへ登つて見ると、此處にも民衆や、司祭長等の惡罵冷嘲が手に取る如く聞える。ローマ兵までが死に垂々とせる主に近き、わざと同情に堪へない風を見せ、酢をさ、げて之を嘲りました。

ユデア人等は主の御前に往つたり來たりして、頭を揺り、さも横柄らしく主を見上げて、之を挑み、千萬無量の苦みに沈ませ給へる主の面前に、得意の肩を反し、不敬きはまる喜びを、忌々しきせ、ら笑ひを見せて居るではありませんか。

(11) 我々の心は人に取巻かれ、チャホヤとお世辭をふり撒かれたるものであります。その代りに如何なる連中が主を取り巻き、如何なるお世辭を振り撒いて居るかを御覽なさい。我々は忠實な友の共鳴の中に吾心を投じ、有頂天になつて喜びたいと望むものであります。その代りにユデア人等は、如何なる凌辱の中に、悲惨きはまる苦みの中に主の聖心を投げ入れ奉つたでありますか。我々は取巻き連の眼元に、自分の起させたいと思ふ感情の浮み出る事を欲します。その代りに主は民衆の眼元に、如何なる憤怒、如何なる侮蔑の情を読み給ふのであります。御體に加へられる百千の虐待は、悉く御心に反響を與へ、爲に御胸は全く裂け破れ切れぐに劈かれ給うたのであります。主の御心は、その琴線が非常に緊張せられ、極めて鋭敏でありました丈けに、苦みを感じ給ふことも、亦幾倍と甚しかつたのは、言ふ迄もない所であります。

人が信頼をかける時、一目仰視ばかりでも、少しの愛を表はしても、忽ちそれに感動し給ふのであります。マダレナが御足に香油を注ぎ、之を涙に濕し、頭髮で拭き參らせた時、彼女を高く讃め擧げなさいました。御側に近く罪人を甚く可愛がつて、醫師に要のあるのは僅なものではなく、

病める者である」ミ曰うたでせう。カナアンの婦の熱心な祈振りを見て「あ、婦よ、大なる哉、汝の信仰、望めるまゝに汝になれかし」(マテ二八)とお叫びになりましたでせう。聖ペトロが主の神性を告白して、「汝は活ける神の御子キリストなり」と云つた時、如何なる祝福を彼の上にお浴せになりましたか。チベリアド湖畔で、「主よ、我が汝を愛するは汝の知り給ふ所なり」と彼がくりかへした時、如何なる特權を彼にお授けになりましたか。斯の如く崇敬、愛慕の情に感動し易かりし主の御心は、また同じく侮辱にも敏感であらせられました。刻々と迫り來る災難を思ひ、恐れて慄み上り、「吾魂は死ぬばかりに憂ふ」と嘆聲をお洩しになり、「父よ、能ふべくはこの杯我より去れかし」ミお祈りになりました。その醉さるべき苦い杯を面りに打眺めて、心は死ぬ様な憂苦に惱まされ、胸はむか／＼となるのを禁じ得給はぬのでした。敵の手に捕へられてから、最後の息を引取り給ふまでも、一口の苦情すらお洩しにならなかつたが、然し敵や味方の御自分に對する不都合千萬な態度に傷は煮え返り、胸は張り裂ける思のすることを仄見せなさいました。眠つて居た三人の弟子には「斯くも汝等一時間を我と共に醒め居る能はざりしか」ミ仰有いました。ユダの心にもない挨拶振り、その苦々しい裏切りの接吻をお受けになつた時は「友よ、何の爲に來れるぞ。ユダ、接吻を以て人の子を付すか」とお口説きになりました。ペトロが背き去つた時は、一言もお咎めにならなかつたが、然し彼の上に悲しい御眼を注がれました。その悲しい御眼は、消え難い印象をペトロの胸に深く刻み付け、

終生涙を禁め得ざらしめたのであります。

(12) 一衆議會からカルワリオまで、主は一言半句も御心の悲みを訴へ給ふ様なことはありませんでした。然しその御苦み、御惱みの程は豫言者が我々に漏してくれました。「吾民よ、我何を汝になし、ぞ、何に於て汝を悲ませしぞ、我に向ひて証せよ」(六六三)とミケアは主に代りて、エルザレムの民にかき口説いて居る。最後の息を引取り給ふ少し前に、主はすべての人に棄てられ、責められ、誣はれ、あらゆる苦悶の中に沈められて、堪へ難さの餘り、世の人が嘗て耳にしたこともない程の、極めて悲痛な、腸も九廻せん許りの叫びを發して、「我神よ、我神よ、何すれぞ我を棄て給ふや」とお嘆きになりました。あたしこれこそ無上の苦悶を訴へる叫び、苦みに酔ひつぶれた心から迸り出る叫びでありました。あ、至善の聖心、至潔の聖心、至聖の聖心は、我々の腐つた心、その心の不都合千萬な喜びを償ふが爲に、斯くまで劈かれ給はねばならなかつたのでせうか。

(13) 一之を要するに、我々の心はその望みにせよ、愛情にせよ、肉慾に傾きたがる性癖を持つて居ます。一たび正しい道を踏み外したのなら、そんな没條理にでも流れ、そんな罪惡にでも溺れ込んで行くのであります。だから罪の泉を堰き止めたいと思はゞ、その慾望を抑へ、之を正しく導く様、務めなければなりません。固より我々の力だけでは完全に之を制御して行くことは出来ませんから、主の拜むべき聖心にすがり、貞潔にして節制を守る力を求めませう。この超自然的力を身に纏ひ、よつ

て以て罪の鎖を切り棄て、神の非とし給ふ快樂や感情に暇を出し、肉と血の係累を断ち、精神によつて生きる様、務めませう。我々を卑下せしめ、陋劣ならしめるものとは、一切手を切つて、我々の上に主權を握り、我々の爲に永遠の幸福を備へ給ふべき大なる愛、萬事に超えて愛し奉るべき神の大なる愛に心を残らず献げ奉りませう。斯くしてこそ、主の御心が、この世では我々を清淨無垢となし、後世では永遠に幸福ならしめるやうにと、堪へ忍び下さつた御苦を立派に利用し奉る譯になるのであります。

(二) 殉教者の王

(1) 一吾主が天に昇り御父の右に坐し給うた時、御父はその御額に、殉教者の光輪を加へ給うたのでせうか……「キリストには光輪が與へらるべきであるが、神學界の明星たる聖トマスは斯う自問して、「光輪を有するのはキリストに當らない」を自答して居ます。然らばキリスト様は殉教者ではないかと云ふに、決してさうではありません。キリスト様は童貞であり、博士であると共に、亦實に殉教者なのであります。

すると天主様は他の聖人等に與へ給うた褒賞をば、キリスト様にだけ拒絶し給うたのでせうか。否、そんなことは無いはずであります。たゞ天主様が、キリスト様にだけ光輪を加へ給はなかつたのは、

如何なる光輪も、キリスト様の爲には十分輝かしくないのであります。キリスト様が、その汚なき清淨を以て肉に勝ち、その惱しき御受難を以て浮世に勝ち、その尊き御教を以て悪魔に勝ち給ひし天晴な勝利は、それこそ實に絶對的勝利であり、全般的勝利でありました。すべての童貞、すべての殉教者、すべての博士等は、それによつてこそ自分等の勝利を勝ち得るに過ぎないのであります。

キリスト様の戦勝と、キリスト様に則つた聖人等の戦勝とは、天地雲泥の差どころではないのですから、双方に與へられる光榮も、また夫々に異らねばなりません。キリスト様の戦勝は、完全な戦勝、自分自身の戦勝でしたから、随つて完全なる光榮を受け給ふのが理の當然であります。却つて他の童貞者、殉教者、博士等の戦勝は、從屬的戦勝、キリスト様の戦勝より岐れ出たものでありますから、その光榮もまた從屬的で、キリスト様の夫れから岐れ出たものであらねばなりません。殉教者だけに就て申しますと、彼等の勇氣は、キリスト様の勇氣の雫であつたが如く、彼等の光榮も、亦キリスト様の夫の反映であるのであります。

斯う考へると、キリスト様は單に殉教者でなく、實に殉教者の王にて在るのであります。殉教者の王！その堪へ忍び給うた御苦み、その御苦みを以て證明し給うた所を思つて見ますと、是こそ主の御身にしつくり嵌つた肩書たることが首肯れるであります。今恭しく十字架の御前に跪いて、相共にこの一大眞理を觀察して見ることに致しませう。

(2) 苦刑の殘酷さ——キリスト様は、御身に加へられ給うた刑罰の比なき殘酷さから云つても、その之を堪へ忍び給うた唯一無二の勇猛心から考へても、確に殉教者の王にて在るのであります。

殉教者となるには、血を流さなければならぬ。死の抱擁を受けなければならぬ。それは申す迄もない所であります。すべての殉教者に共通なその死も、百人が百人、決して同一の性質を帯びて居る譯ではありません。その死が殘酷であり、刑罰が堪へ難く覺えられるほど、夫ほど、より勝れた殉教者であります。だから殉教者の王と呼ばれるが爲には、如何なる苦しい、殘酷な死と雖も、到底比較にならない位の死を堪へ忍ばねばならぬことが分りませう。

然るにキリスト様の御死去は、十分それだけの性質を帯びたものであります。成るほどその命の緒を絶つた最後の苦罰だけに就て言ふならば、キリスト様と同等、否、夫れ以上の殘忍酷烈な責苦に遭つた殉教者等も少くはありますまい。實際我國に於けるが如く、火に炙られる、竹鋸で引かれる、雲仙嶽の熱湯を注がれる、穴の中に逆吊にされる様な目に遭つた殉教者は、十字架刑に優るとも劣ることなき極刑に處せられた譯であります。

然し主の御受難をば、もつと廣く、そのすべての場合までも、一つに合せて觀察したならば、その御苦みは、全く類を絶ち、如何なる殉教者にも比較にならないことが首肯れるのであります。

キリスト様御自らも豫言者の口を以て、「お、すべて路行く人々よ、我が憂苦に等しき憂苦のまた世

にあるべきかを考へて見よ。」(一三三)と叫び給うた位であります。キリスト様は御受難の際に内心上の御苦みと、肉體上の御苦みと、二様の御苦みを浴せられ給うたのですが、兩者何れもその極度に達したものであります。

ゲッセマニーの園に於て、譬へ様もない御心痛に悩まされなさいました。誰だつて、その不思議な猛烈さを覺り得る者はありますまい。主は御父に向つて「父よ、若し能ふべくは、この杯、我より去れかし」とお叫びになりました。御胸も張り裂けんばかりの御苦みをば洩し給うたのですが、然し夫だけでは、まだ御死去のあらゆる御悩み、御苦みが、言ひ盡された譯ではありません。

悲劇がいよく展開するに隨ひ、主の御魂は、四方八面から恐ろしい苦み悲みに包圍されなさいました。ユダの接吻、使徒等の逃亡、ベトロの否み等は、その御心の最も鋭敏な琴線に加へられた痛撃でありました。ゲッセマニーの園から衆議會の裁判へ、衆議會の裁判から總督府へ、總督府からカルワリオへ、カルワリオから御死去へと、舞臺が廻つて行くに隨つて、主の御目に映する忍び難い慘狀、御耳に響く恐ろしい銅鑼聲はますます激しくなつて來るのであります。

然り、フアリザイ黨も、サドカイ派も、すべての黨派は一つになり、すべての階級は、主人も、召使も、王公、人民、司祭、レウイ人、官吏、軍人の分ちなく、舉つて一致し、すべての年齢は、青年も老人も、男も女も残らず共同して、一つの口となり、一つの心となつて、主に反對しました。不俱

戴天の仇となり、相競つて狂ひ蒐りました。寄せては返す大波の如く、一寄せ毎に、その激烈さを加へ、その横暴さを増すのであります。怨恨、憤怒、悪罵、凌辱の波は、いよく胸脹し、ますます逆捲き崩れて主の御魂を堪へ難い味氣なさの中に打沈めるのであります。聖トマスと言へば、何時も用語を慎み、決して誇張に亘らない様、深く注意する御方ですが、夫にしても猶「最大の悲み、量に於て絶對的な悲みを取り給うた」と曰つて居られます。

(3) 肉體上の苦み—キリスト様が肉體に受け給うた御苦みも、我々の苦みとは、到底日を同うして語るべからざる程でした。その兩手は綱に縛られ、その御面は唾に汚され、御頬には掌を喰され、御額には茨を冠られ、御體は鞭たれ、釘付けられ給ふ時、如何に激烈な痛みを覺えさせ給うたていませうか。膚は劈け、肉は碎け、鮮血は滴り、全身が一の大きな傷となり、何處として痛み給はぬ所なしと云ふ鹽梅でありました。

主の御肉體は、その組織が極めて敏感に、如何なる人の子にも與へられないほどの敏感に出來て居た筈で、いいますから、亦如何なる人も感じ得ない迄に、その鋭い、尖つた、刺すが如き苦みをば覺えさせ給うたのであります。

猶聖トマスの説によると、主の御苦みが痛烈比びなかつたのは、その御肉體が絶對清淨で、少しの汚もないだけに、亦その感じの鈍つた所も絶えてなかつたからであります。感覺の各機能はその加へ

られるすべての苦みを靈魂に通じ、靈魂はその通じて来た苦みをば、一つも残らず受け堪へ給ふのでありました。

一方上級の能力たる智意とは、少しの和げも、慰藉も、救援も與へないのでありました。苦みは全權でも委ねられたかの如く、主に對して有ゆる狂暴を逞うしました。その狂暴に對して何等の抵抗をも試むべからず、と禁止してありましたので、思ふ存分之を苦め、之を虐ることが出来ました。謂は、苦みが王位に即き、その權力を自由自在に振り廻し得たのは、唯この日一日きりでありました。此日ばかりは、主の御肉體にも、御靈魂にも、この世で加へられるだけの苦みを、痛ましさを思ひのまゝに浴せかけました。主の各官能は、苦みの胡弓に觸れて激しく振動し、至き、この上もなき苦みの音を發しました。非常に巧みな音楽家の手にせるヴァイオリンの如く、高い／＼この上には昇れないと云ふほど高い音を響かしたのであります。實際この世では、主の御苦みと肩を並ぶべき苦みは一つとしてあり得ないのであります。「おゝすべて路行く人々よ、我憂苦に等しき憂苦のまた世に在るべきかを考へて見よ。」この點から見ても殉教者の王にて在したのであります。

(4) 苦みを堪忍び給ふ力の上から見ても殉教者の王である一萬物は共謀になつて反抗の浪を擧げ、主に向つて激しく打突つたが、主はその猛り狂ふ荒浪の上をば、彼のゼネザレト湖の波の上をお歩きになつた如く、靜にお渡りになりました。主は決してストイク哲學主義の外套をお纏ひになりません。平

然を裝ひ、無感覺の態度を示さうともなさいませんでした。苦痛、悲哀が御體を押付け、へし付け、壓倒するのはお許しになりました、その動悸が止り、血液がそのまゝ、汗となつて流れるのはお許しになりましたが、然し意志の動搖だけは固くお禁めになりました。之を縛らうと、悪言を浴せようと、死刑を宣告しようと、輕侮り凌辱めても、十字架に磔けても、毅然として動き給はぬのであります。如何に堪へ難い苦痛の中に突込まれても、容赦を願つたり、不平を洩したり、憤懣、怒號を浴せたり、神經を尖らしたりし給ふ様なことはありません。ゲツセマニーの園や、カルワリオに於ける御嘆きをば、お弱りになつた徴だと思つてはなりません。我身は肉と血をもつた人間である、苦みを感じ、痛みを覚えるのは、誰にでも劣る所がないと云ふことをお證しになつたのみでありました。苦みの餘りに神經がピリ／＼と振ひ出すのをお許しになりました如く、肉や感覺が叫び出すのをお禁めにならなかつたと云ふ迄に過ぎないのであります。御受難中、常に口を嚙み、沈黙して居られました。その沈黙の中にも如何なる神々しさ、如何なる晴々しさ、如何に打克ち難い、而も優しい勇氣が溢れて居るのでありますでせうか。ピラトすらも流石に驚きました。彼は主が何うして全く己を忘れて少しも氣にし給はぬか、異議も申立てず、立腹もせず、嘆願もし給はぬか、その理由を悟り得ませんでした。彼は驚嘆の餘りに「汝我に言はざるか、汝を十字架に釘くるの權も、また免すの權も我に在ることを知らざるか」(ヨハネ二〇)と言つた位であります。

然し一たび口をお開きになりますと、如何なる危険が御身にさしか、れる時でも、その御言葉は、従容として迫らず、躊躇の姿も、無念の情も見えない、ユダに向ひ、捕吏に向ひ、カイファに、ピラトに、御父に、善き盜賊に向つて、物を仰しやる時にせよ、衆議會で、總督府で、十字架上で御口をお開きになる時にせよ、少しも冷静を失ひ給はぬのでした。最後の息を引取り給ふまでも、主はこの御態度を維持し給ひ、同じ根氣強さを、同じ柔和を保ち給ふのでありました。

御受難の際に、苦みは主の御力を弱らせる前に、自分の方が却つてへたばりました。主の御力には腕押が出来ませんでした。主の御力ばかりは、實に絆々として餘裕があり、主は御自分の爲に之を使ひ潰し給はなかつたのみならず、亦御自分と共に苦み、御自分と共に戦へるすべての人に、その御力を分配し給ふのでありますが、それでも消耗したり、減少したりする憂すら無いのであります。

その御力を忝うしてペトロは、己が臆病に打勝ち、勇氣を回復しました。シレネのシモンは、主に代つて勇しくその十字架を擔ぎました。エルザレムの婦人等は、「石女なる者、未だ産まざる腹、未だ哺せざる乳房は幅なり」(三二九)と言はれる一日が、來るべきことを思つても、恐怖や悲哀に倒れませんでした。この御力に感じて、マリヤ、マゲダレナ、その他二三の婦人等、聖ヨハネは言ふに言はれぬ悲哀に胸を破られながらも、猶毅然として十字架の下に突立つことが出来ました。善き盜賊は勇氣と希望とを以て死ぬことが出来ました。二千年以來、すべての殉教者は、殘忍極まる責苦の前に進み

出で、世の終までのキリスト教的英雄、公奉者等は、何の躊躇する所もなく、神と福音とに血汐の證明を與へて居るのであります。主は殉教者に對して、國王がその臣民に對する務をば、立派にお果しになりました。國王はその位が臣民に優つて居るだけ、または臣民の模範であり、支援であらねばならぬですが、主も殉教者に對して、ちやうど然うなされたのであります。

(5) 最高事件を證明する爲であつたと云ふ點から考へましても、主は立派に殉教者の王にて在す——主の證明し給うたのは、世にありふれた事件ではなく、實に聖なる一大事件でありました。

何かの學説を主張し、その學派に信用を博させるが爲に死に給うたのではない、主はヒルレリヤシヤンマイヤ、ガマリエルの弟子ではありませんでした。是等の有名な先生等の教説に光を添へたい、その名聲を轟かしたいと云ふ希望は、その殉教の動機の中に一つも入つて居ません。何かの黨派や、政體や、王朝の爲に死し給うたのでもない。主は民衆を卑め、異邦人と親交を結べる貴族黨のサドカイ派にも屬し給はねば、外人に對して狂信的憎惡心を抱ける愛國黨アライザイ派の人でもありません。死海の西エンガツチー(Engaddi)の水が流れ込む邊に、嚴格な規律の下に生活し、「永久の民」と自稱せるエツセニア派の人でもありませんでした。

主が御生命を犠牲に供し給うたのは、ユデアに於けるローマの統治權を固める爲でもなければ、イストラエル人を煽動してローマに反抗を試みさせる爲でもありません。主は地方官と中央政府との間に

起れる紛争の渦中に、身を投じる様なことは決してなさいませぬ。さらばとて自らダウイド家を再興しようと思ひ給うたのでもありません。イスラエル王國の復興をお説きになります時でも、その御言は、自國の現世的隆盛しか考へて居なかつた國民の要望に副ふのではありませんでした。主はたゞ神の御國を準備なさいました。その御國こそ眞個なイスラエル王國だつたのであります。衆議會は主が人民を煽動し、國内を騒がして、ガリレアからエルザレムに及び、セザルに貢を納めるのを禁じ、セザルの敵であると言つて訴へました。彼等は主を以て、普通ありふれた煽動家、社會の秩序を擾し、公安を害する、通り一遍の匪徒でもあるかの如く誣ひ訴へたのであります。然し主は衆議會に立つて、「我は何時も凡のユデア人の相集る會堂及び神殿にて教へ、何事をも密に語りしことなし。汝何ぞ我に問ふや、我が語りし所を聽聞したる人々に問へ」(ヨハ、九)とお答へになつた。それには流石の司祭長も二の句が續げませんでした。なるほびピラトの法廷、ヘロデの前に於ては、同じ讒訴がくりかへされました。然し主は法廷に於て、「我國はこの世のものにあらず、もし我國がこの世のものならば、我をユデア人に付させじきて、我臣僕は必ず戦ふならん」(ヨハ、三六)と仰せられました。ヘロデの前では一言の答すらなし給はぬ。その無罪は明々白々でありました。ピラトにせよ、ヘロデにせよ、カイファ等の訴を以て、彼等の嫉妬に出るものもなし、露ほどの注意をも拂はない、彼等は主の御言にも、御行にも、何の罪すべき點をも見受けな、之を所罰する手掛をば、捉へ得なかつたのであります。

(6) — されば主の死し給うたのは「聖なる事件」の爲で、それには現世的要素と云ふは一つも混じて居ませぬ。實に主は御父の中に見給うた眞理を證明するが爲にこそ、世に生れ出で給うたのでした。「我は眞理に證明を與へんが爲に生れて、この世に來れり」(ヨハ、三七)とピラトに仰しやつたのを以ても知らねるでムいませう。

兎に角、イエズス、キリスト様は神聖事件の爲に御死去なさいました。殉教に際して、唯一、絶對、強力な證明を之が爲になし給うた。實際キリスト教に於て、證明者はたゞキリスト様のみでありませぬ。キリスト様は自ら親しく御覽になつた所を斷言し、證明し給うたのであります。キリスト様お獨りは、永遠から御父の懷に在して、そこに行はれる所を親しく目撃なさいまして、その目撃なさいましたま、をお語りになりました。他の殉教者は自ら見たのではありません。たゞキリスト様によつて見た迄に過ぎないのであります。彼等の證明はキリスト様の證明の反響であると云ふ點にのみその價値を見出されるのであります。……隨つてキリスト様はすべての殉教者の王であらせられます。

御受難のその日に當つて、主は平生の證明に最後の捺印を致しなさいました。御血を以て之を署名捺印して、戰勝的勢力を之にお與へになりました。自分の言つたことを取消すよりか、寧ろ甘じて死ぬ云ふ時は、その證明は千鈞の力を持つに至るが如く、主もその御言の一言一句を修正するよりか、

むしろ身の毛も森立たん許りの惨刑、ゲツセマニーに始つてゴルゴタに終れる惨刑を堪へ忍びなさいました。随つてその証明は非常な力を發揮しました。死に給ふと共に、その証明の威力は發揮され、その事件は大々的勝利を博したのであります。

先づその御傷の唇は、肉の唇よりも強い聲を發し、その御血の叫びは全世界を震撼せしめました。その極めて説服力に富んだ御言以上に、人の心を歸服せしめました。まだ最後の息を引取り給はぬ前から、善き盜賊は既に信仰を起して、「主よ、御國へ到らせ給うた時、私を覚え給へ。」と祈りました。御心臓の鼓動が、やつと止つたかと思ふ間もあらせず、聖殿は震動し、至聖所の幕は眞二つに裂け、地は震ひ、岩は破れました。百夫長は忽ち福音を信じて、「この人は誠に神の御子であつたよ」と叫びました。同じく死者は甦つて墓を出しました。十字架より流れ下る御血の聲に呼び起されて、その永い眠より目醒めたのであります。五十日を経てペトロが起つて説教をなすや、忽ち三千の大衆は眞理に歸依しました。夫からエフェゾ、テッサロニカ、アテネ、コリント、ローマ、亞細亞もエウロツパも、全世界が御血の證明に感動して、之に歸服し、愛に漲れる信仰を以て、禮拜の讚美歌を奉るに至りました。

(7) 斯の如く御受難の際に於けるキリスト様の御證明は、最も優れた證明、王的證明でありました。キリスト様は何處から見ても、眞實に「殉教者の王」にて在すのであります。

(8) 結論—イエズス、キリスト様は十二分の力、竭きる憂なき力を表し給ひ、殉教者の王として、彼等が惨刑に處せられる際に、その勇氣を鼓舞し、彼等にその神的エネルギーを分け與へて、かよわき處女、怯懦な小童をも無敵の英雄となし給ふのである。されば誘惑に弱い我々、疲勞にも、疾病にも弱い我々、世間に反抗せねばならぬ、輿論を向ふに廻はして戦はねばならぬ時、裏切られる、侮辱される、憂苦悲哀に沈み、試練に揉まれる時、殊に暗い恐ろしい死の影が射して來た時、極めて弱い我々は、伏して主に祈りませう。我々の靈を、我々の心を強め給へ、我々の意志を、性格を、氣質を鍛ひ上げて、堅きこと鐵の如くならしめ給へ、殉教者の王に嘆願ませう。この氣力は盛に秘蹟の中を流れて居ます。特に悔悛の秘蹟、精神的に死亡せるものを蘇生させ、弱り込んだものを活々とす悔悛の秘蹟に之を求めませう。別けても、聖體の秘蹟を拜領します時、氣力の泉に口をつけて思のまゝに之を飲むことが出来るのであります。

その他、色々の善業、布施、傳道事業の中にも籠つてゐる。終にカルワリオの上に、十字架の前に跪いて祈るとか、救主の勇壯にして、猷身的大度の描かれある御受難史を奉讀するとか、殊に聖會が「殉教者の力なるイエズス、我等を憐み給へ」と叫んで居るそのイエズス様を熱く愛し、平伏して拜むさかして、この氣力を請求することに致しませう。

聖木曜日

(一) 主の遺言書

聖木曜日は、イエズス様が我々の爲に遺言書をお作り下さいました記念すべき日であります。その遺言書によつて

(1)「イエズス様は何を我々にお遺し下さいましたか」人の子は枕する處なし(マテオ)と自ら宣うた程であれば、お遺しになるべき何物がありましたでせう。なるほどイエズス様は大なる貧者でした。然し一方から云ふと、また天主様ですから、そのお與へ下さるのは、人間として、なく、實に天主様としてでした。天主様としては全能、全智に在るのですから、如何に大きなもの、美しいもの、輝かしいものでも之を造り、之を整へ、之を與へるを得給ふのであります。然らば何をお與へ下さいましたか、お聞きなさい、「汝等取りて食せよ、是れ我體なり……汝等皆之より飲め……是れ新約の我血なり(マテオ)我々にお與へ下さつたのは、實に神の御體であります、神の御血であります、たゞ御體、御血のみならず、またその御靈魂、その御心、その限りなき功德、地上の歡喜、天上の榮福、それまでも残らずお與へ下さつたのであります……」

(2)「誰にお遺し下さいましたか」たゞ御母マリア様、たゞ十二使徒、たゞその忠實なる弟子にばかりでなく、また全人類にお遺し下さいました、「すべて我に來れ」(マテオ)と云つて、誰一人取り除きなさらなかつたのであります。

無關心な人、世間的な人、不敬神な人、罪に汚れ果てた人、そんな人の前に立つと、その忘恩の罪を眺めると、誰しも貳の足を踏み、後退せずに居られないものですが、イエズス様は決してさうなさいません……あゝ實にイエズス様の愛は、限りも涯しも知らないものであります。

その愛を侮り辱める靈魂は随分多いに相違ないが、また聖體によつて潔められ、聖とされ、神化される魂の少からざるべきことを思ひ、喜んでこの秘蹟を定め、記念として之を我々にお遺し下さつたのであります。

(3)「何時まで之をお遺し下さいましたか」「極まで愛し給へり」(ヨハネ)、「極まで」即ち愛の極みまで、愛されるだけは愛し給うたのですから、亦時間に於ても極まで、世の終までも愛し給うたのであります。實にイエズス様は、聖體を定めると共に、亦司祭職をもお定めになりました……その司祭は地球上到處にイエズス様の爲し給うた所をくりかへし、パンと葡萄酒をその御體と御血に変化させ、斯くて聖體の存在を世の終までに至らしめて居るのであります。

ローマに「最後のミサ」と題する一幅の名畫があるさうであります。その上欄には、最高判事たるキ

リスト様が裁判席につき、今にも世の人を殘らず御前に召出して、その怖るべき審判を始めようとして居られる所を描き、下欄には司祭が祭壇に立つて最後のミサを行ひ、汚なき神の羔を御父に献げて、罪人の爲に御憐みを祈つて居る、その傍に天使が早や喇叭を口に當て、聖祭が終ると、直に世界の終末を告げる合圖を吹き鳴さうと俟ち構へて居る場面を寫してあります。是こそ聖體の功德の廣大無邊なるを如實に見せたものではありませんか……。

唯今では醫術が非常に進歩しまして、多量の出血ゆゑに生命が危くなつた云ふ時、誰かの血液をその脈管内に輸入してやると、以て一命を取留めること出来るのであります。

イエズス様の尊い御血は千九百年以來、人類の脈管に注ぎ込まれてある。この輸血によりて、我々の靈的生命は取留められ、培養され、淨化されるのであります。その返禮としてイエズス様は我々に何を求めになりますませう……愛を！我々の偽りなき愛を……たゞ是のみをお求めになるのであります……。

(二) 聖體の御制定に顯れたる主の限りなき愛

(1) 賜物の廣大さを思ひなさい—イエズス様は我々を愛するの餘り、この世に下つて、人となり、奴隸の貌を取つて、我々を罪の奴隸より救ひ上げようとして下さいました……そしていよくその救靈事

業を全うし終つて、御父の許へ歸らねばならぬ時となるや、その聖心に燃え狂へる愛を證明せんが爲め、聖體の秘蹟を定め、永く世の終りまでも、我々と共に留りたい。我々に御身を殘らす與へ、我々一人づゝに合體したいものと、思召になつたのであります……。

御托身の玄義によりて、この憫れな世界に下り、我々を等しい人性を纏ひ、罪を除くの外はすべて我々と同じ人間になり給うたのですが、聖體の秘蹟を以ては、我々を御自分にまで取上げ、我々を神聖化せんと欲し給うた。それこそ我々を「極まで」、愛の極みまで愛し給うたので無くて何でせう。

(2) 今この聖體をお定めになつた時の場合を思ひなさい—「付され給へる夜に當りて」(コリント三)と聖パウロは曰つて居ます。實際人々が御身を亡きものにしようとして居るその夜、ユダが接吻を以て敵の手に付さうとして居るその夜、ユデア人等が御身に綱をかけ、高手小手に縛り上げ、その御頬を撲り、その御顔に唾し、御體を鞭ち、御額に茨を冠らせ、御肩に十字架を擔がせ、侮りもし、辱めもし、玩弄物にもしようとして居るその夜に、忝くもこの秘蹟を定め、我々と共に住み、我々の爲に犠牲となり、食物となり、旅路の糧となり、聖寵の盡きせぬ泉となり、永遠の生命の保證とまでならうと思召し下さつたのであります。

(3) 終にこの賜物の與へ方を思ひなさい—イエズス様がこの聖體を我々に賜うたのは、たゞ一回に限り、たゞ一ヶ處に止つたかと云ふに、決して然うではありません。世界の存する間、何時までも、また何

聖體の御制定に顯れたる主の限りなき愛

處に於ても、之をお與へ下さるのであります。その爲に使徒等と、又彼等によつて總ての司祭に、聖體を作る權を授け、「汝等我記念として之を行へ」(三一九)と仰有つて下さいました。實際司祭が聖別の言を唱へる毎に、主は響の聲に應ずるが如く、直に祭壇の上に降り、彼等の爲すがまゝに從ひ給ふのであります。御身を犠牲として御父に獻げ、絶えず聖堂内に止り、信者からも望みのまゝに拜領されたいと云ふ思召から、然うして下さるのであります。

固よりイエズス様はこの聖體の中に於て、如何なる輕侮、凌辱を浴せられ、人に棄てられ、泥足に踏みにじられ、罪に汚れた心、悪魔を宿せるその胸にすら這入つて行かねばならぬことを飽まで承知して居られた、承知して居られながらも、なほこの秘蹟をお定めになりましたのは、たゞ我々を深く愛し給うたから、極まで愛し給うたからであります。

皆さん、今日ばかりは我々もこの驚くべき愛を、この極までに及べる深いく愛を悟りたいものではありませんか。悟つて、聊かなりともこの愛に報いるに愛を以てしたい、心からなる愛を以てしたい、我々の今まで加へ奉つた冷淡、無關心の罪、世の人々の浴せかけ奉つて居る様々の輕侮、凌辱の償ひとして、今日は特に熱心こめて聖體を拜領し、また出来るだけ屢、聖體を訪問し、心を傾けて禮拜、感謝、贖罪の情を獻げたいものではありませんか。

聖金曜日

(一) 最も大なる犠牲

今日はイエズス様が十字架の上に於て、我々の爲に最も大なる犠牲を獻げ給うた記念日であります。

(1) 御受難は夫れ自體に就て考へても、それこそ最も大なる犠牲でした。神性の上から見ても、靈魂上、又は肉體上から云つても、これは實に大きな犠牲でした。

(イ) 先づイエズス様はその神性に於て獻げ給うた犠牲を思ひなさい。イエズス様は全能の天主、天主として萬物を統御し給ふのですから、況して人類の大王にて在す。然るにこの大王にたいして、人々は如何なる侮辱を加へましたでせうか。

玉の冠の代りに茨の冠を戴かせ、王笏の代りに葦を持たせ、玉衣の代りに狂者のしるしとして白い服や赤い袍を着せ、宮殿の代りに牢獄をあてがひ、儀仗兵の代りに、粗暴殘虐な兵士を附け、萬歳を唱へる代りに、「十字架に釘けよ」と連呼し、最敬禮をなす代りに、冒瀆的に跳き、「ユデアの王よ安かれ」と皮肉を浴せかけました。

(ロ) 靈魂上に就て見なさい、イエズス様は固より自ら進んで、否、喜んで、我々を愛するの餘り

最も大なる犠牲

に、犠牲にお成り下さつたのでした。然しグツセマニーの園に於て、全人類の罪を我身に引受け、之を償はねばならぬ時、我々の忘恩、憎悪、叛逆、侮辱、冒瀆等を一々お眺めになります時、自ら戦ひ慄きを禁じ得なさいませんでした。張合が抜け、落膽して「父よ、能ふべくば、この杯我より去れかし」(マテオ九)とお叫びになつた程でした。よくよくの事でなければ、斯くお叫びになるはずもないので、その悲み、その苦み、その味氣なさが如何に甚しかつたかは推して察せられるでういませう。もし神の全能力に支へられ給はなかつたら、この靈魂上の悲み、たゞ是ばかりでも、死するに餘りあつた、と聖人等は言つて居られます。

(ハ)―肉體の上に就て見なさい。キリスト様は御降誕のその當時から随分苦まれました。ペトレヘムの馬屋、エジプトへの避難、ナザレトの労働、公生活中の御奔走等を思ひなさい……然し是等は聖金曜日(マテオ九)に於ける御苦みの堪へ難さに比べると、全く物の數でもないものであります。

試みに主が十字架を擔いで、カルワリオへお進みになる途中の光景を思ひ浮べて御覽なさい、御頭は茨を深く打込まれて血糊に塗れ、御肩は十字架の重さに爛れ破れ、御背は笞刑の爲に一面の傷となり、御膝はわななくと打顛ひ、御足は石に衝き當りて血汐に染り、御頬は着腫に腫れ上り、埃や唾に汚れ果て、いらつしやるのが見えませんか。そればかりか、やつミカルワリオへ辿りつき給ふや、惡黨等は早速御衣を剝ぎ取り、十字架上に打倒し、御手足を釘づけにし、やがてその十字架を推立て、

氣味善げに之を打眺めて、散々に嘲り、罵り、冒瀆のありだけを投掛けるのであります。

(二)―御受難は種々の場合から見ても、最大の犠牲でありました―一人が不義な判決を受け、處罰される時は、せめては友人なり、官吏なり、民衆や神の裁判なりに呼びかけ、上告するだけの慰藉は失はないものである、然るにイエズス様はこの慰藉すら得給はず、すべての人に、神様にすら見棄てられ給うたのであります。

(イ)―官吏に見棄てられなさいました―ヘロデやピラトの前に曳かれ、彼等に罪人と見做されなさいました。ヘロデは狂者と嘲りました。ピラトはその無罪を認め、何とかして放免したいとは思ひながら、民衆を怖れて、彼等の言ふがままに、死刑の宣告を下しました。

(ハ)―民衆に見棄てられなさいました―二三日前には「ダウイドの子にホザナ、主の名によつて來れるものは祝せられ給へ」と盛に歓迎した民衆も、今は掌でも返すが如く、「十字架につけよ」と叫び立て、強盗で人までも殺したバラバ、そのバラバを赦せ、イエズスを殺せ、と異口同音に叫ぶに至りました。

(ハ)―友人に見棄てられなさいました―この場合に弟子等は如何になりましたか……病を癒された人々は如何になりましたか……ラザルは何處に居ますか……「死すとも離れぬ」と誓つた使徒等は何處に居ますか……ユダは敵に賣りました、ペトロは三たびも否みました、他の使徒は命からかく逃げ失せま

した。たゞヨハネ一人が怖々と隨いて行つたのみであります。

(二)―神にも見棄れられなさいました―もし御子を救はうと思召しになりましたら、たゞ言一つ、たゞ身振り一つ、否、望一つで澤山でした。然るに神は然う思召しにならないのみか、却つて御顔を背けなさいました、御子が人々の罪を我身に引受け、爲に醜く汚れ果て、在すのを見て、之を厭ひ、之を嫌ひ、少の慰すら與へ給はぬのでした。爲に主は「我神よ、我神よ、何ぞ我を棄て給ひしや」(マテ、四六)と悲しい聲を絞つて叫ぶの止むなきに至られました。

(三)―結論―イエズス様は斯うして終に御死去なさいなした。皆さん、さうぞ十字架の下に馳せ寄りなさい。皆さんの爲された業、罪の業をつくく、と打眺めなさい……この時、自然界は皆大に動揺し、地は震ひ、岩は破れ、基は開け、死者は甦つたと、福音書には記してあります……皆さんばかり何の感ずる所なく、動く所なくして居られますか……我々は皆罪人であります……今日ばかりは是非とも罪を悲みませう、厭ひ嫌ひませう、主の御傷に接吻し、その御血に浸つて我々の罪を洗ひませう……そして今よりは斷然新な生活に入り、清く聖く行ひ澄して、以て他日主と共に慶い復活の光榮を忝うすべく務めませう。

(二) 十字架

キリスト様の御一生は苦の御一生でした。キリスト様の爲に生きるのは苦むので、苦むのは生き

るのであります。ペトレムでも苦まれた、エジプトにお逃げになつた時は猶更ら苦まれました。ナザレトでも随分苦んで働かれました。三ヶ年の間、聖教を宣傳へるにも、ナカ／＼苦勞なさいましたが、然し御受難の節に當つて、人類救贖の爲に嘗められた御苦み、御悲みに至つては、到底想像も何も及ぶ所ではなかつたのであります。謂はゞ三十三年の長い間、十字架を擔ぎ通しに擔いで居られたと云ひたい位でございましたが、終にはその十字架を祭壇として、之が上に己を犠牲に供へ、之を講壇として、我々に有難い御教を垂れ、之を玉座として、我々の上に王たり給ふのであります。

一、祭壇としての十字架

(1)―祭壇とは讀んで字の如く、祭を献げる壇でありまして、この十字架の祭壇には、神にして人にして神なるキリスト様が、自ら司祭となつて、御身を犠牲に献げ給うたのであります。實にキリスト様を十字架に磔けたのは、有られもせぬ罪を吹き掛けて、訴へ出たユデアの教師等でもなければ、「十字架に釘けよ、十字架に釘けよ」と叫んだ群衆でもない。之に死刑を宣告したピラトでもなければ、之を十字架に釘けた兵士でもない。彼等はキリスト様に對して何等の力も有たないのでした。キリスト様が捕へられまいと思召しになつたら、何うしたつて捕へること出来ない、殺されまいと思召しになつたら、幾ら騒いだつて、殺すことは出来なかつたのであります。ユデア人は、たゞキリストを

屠つて献げる道具になつた迄で、それは固より恐るべき神殺しの大罪には相違なかつたが、然し「彼は自ら望みて屠られたり」(五六ノ五)とイザヤ豫言者も曰つた如く、キリスト様の御身を犠牲に献げたのは、キリスト様御自身で「いりました。随つてこの十字架の祭壇上には、舊約時代に於けるが如く、罪に汚れた司祭が、牛だの、羊だの、鳩だの、拙ない血を献げるのではなく、實に限りもなく聖なる司祭が、その限りもなく清く潔き御身を屠つて、神の尊前に献げ、以て我々の爲に、罪を贖ひ、赦を求め、救贖の道を切り開いて下さつたのであります。

大凡そ罪の輕重は、背かれた相手方の品位の如何によつて異り、償の價値は、之を献げるもの、身分の貴きと賤きとによりて定まるのであります。今人は罪を犯して、限りなき御稜威の天主様に背いたのですから、その罪の重さは限りなしで、之を償ふには、是非とも價限りなき謝罪を以てしなければならぬ。然し限りある人間に、限りなき謝罪の出来よう筈はない。キリスト様も甚くそれを不憚に思召されました、全能の神の貴きを以て、わざわざ「淺ましい人間と生れ、我々の罪惡を悉く御身に引取つて、甚い／＼苦を耐へ忍び、果ては十字架上に死んで、我々の爲に御父の義怒を宥め、罪の赦を求め、御憐みの雨露を豊に請受けて下さつたのであります。

(2) 抑も人が罪を犯した時は、天主様の最上の御稜威を輕じ、肩をそらして之に張り向うたのでありますから、キリスト様はこの憎むべき傲慢の罪を償はんとて、御身を無きものとするまでに謙遜し

給うたのであります。イザヤは夙に御受難當時の御状態を豫言して「彼は我等が見るべき姿なく、美しき容なく、我等が慕ふべき見榮なし……」彼は面をおほひて避くるこゝをせらる者の如く侮られたり」(五三ノ三)と曰つて居るが、實際はそれ以上でした。弟子の一人からは敵の手に賣られ、一人からは三たびも「識らぬ、存ぜぬ」を否まれ、盜賊の如く綱を打たれて、町中を引廻され、大の惡徒見たやうに輕侮られ、唾せられ、打叩かれなさいました。カイファは之を罵つて「神を演じた大罪人よ」と叫び、ヘロデは之に白い衣服を着せて愚弄り、ピラトは國賊として之に死刑を宣告しました。無智の群衆までが、之を玩弄物にして、散々に罵るのであります。嘗て自ら「豫言者なり」と曰うたのを思ひ出してか、其目を隠し、掌で打撲りながら「キリストよ、汝を批てるもの、誰なるかを我等に豫言せよ」と嘲る。嘗て自ら「王なり」と曰うたのを思ひ出してか、御頭には茨の冠を押被せ、御手には葦を握らせ、その前に跪いて「ユデアの王、安かれ」を囁し立てる。嘗て自ら「人の子」と曰うたこゝが有りました、然らば云ふもので、御體は一面に打つて打つて見る影もなきまでに打ち爛らした上で、之を大勢の前に引出して「視よ、人を」と調戲しました。嘗て自ら「神の子」と曰うたこゝが有りましたので、今にも最後の氣息を引取り給ふかと云ふ痛ましい場合に「彼は神を頼り、神もし好せば今救ひ給ふべし、其は「我は神の子なり」と曰ひたればなり」なき、嘲笑ふのであります。斯の如く味方には捨てられ、敵には嘲弄はれ、身は赤の裸体にされ、有りし有ゆる侮辱を浴せかけ

られ、當時人々がもつことも大きな耻とせる十字架の上に、而かも二人の盜賊の眞直中に、悪人中の悪人として磔けられました。キリスト様は斯くまで深く謙つて、人々が神の御稜威に加へ奉つた輕侮、凌辱をば償ひ下さつたのであります。

(3) 罪と罰とは相離るべからざるもので、罪を犯した以上は、是非とも一度はその罰を受けなければならぬ。然し限りある人間の身を以ては、限りなき神の御稜威に對して犯した罪、その罪の限りなさに當る丈けの罰を受けることは、到底出来よう筈がない。よつて神の御子は、自ら姿を棄してこの涙の谷に降り、身にも心にも言ふべからざる痛苦を堪へ忍んで、管に我々の罪を贖ひ下さつたのみならず、亦我々の受くべき罰をも償ひ下さつたのであります。

ユダの謀叛、ベトロの怯懦、弟子等の逃亡によつて、主は一方ならず御胸を痛め給うたのみならず、教師等には嘲弄はれ、群衆には輕ぜられ、盜賤のバラバとさへ引比べられ、鞭たれ、茨を冠せられ、重い十字架を擔がせられ、よろめく足を踏みしめ踏みしめ、苦しきカルワリオの坂路を辿り、辛つこ頂に着き給へば、体一面に粘り着いて居る御衣を、無理やりに撈り取られ、十字架の上に推し付けられ、大きな鐵釘もて御手足を打貫かれ、三時間の久しき間、その十字架の上に吊り下げられ、御父にさへ見限られて、苦みのありだけを嘗め盡した上で、「父よ、我靈を御手に托し奉る」と大聲に叫び、御頭をうな垂れて、御死去なされたのであります。

要するにキリスト様は、我々の蒙るべき罰を悉く御身に引受けて、痛ましいとも痛ましい御死去を遂げさせ給うたのですから、御父もその献げられた犠牲をば、馨しき芳香として之を享け、御怒を和げて、快く我々に赦を與へ、我々を引取つて、己が愛子となし、天國の福樂をも相續し得べき有難いとも有難い身の上になして下さつたのであります。

(4) 斯の如くキリスト様は十字架を祭壇として、こゝに御身を犠牲として献げ、以て我々が罪を犯して御父に加へ奉つた侮辱を贖ひ、我々の蒙るべき罰を償ひ、我々に代つて御父の御恵を感謝し、必要な聖寵をも請求めて下さいました。我々が忝くも洗禮を受けて信者となること出来ましたのも、幾度もなく罪を赦され、地獄の門より救ひ上げられ、天國にも登れる身の上となつたのも、畢竟キリスト様が祭壇の上で犠牲となつて下さつた御蔭に外ならぬのであります。然し救靈を得るにはキリスト様の十字架ばかりでは足りない、我々の方でも十字架を祭壇として、こゝに我々の邪慾を屠つて献げなければなりません。でういますから、今よりは如何なる艱難、苦勞に出遭しましても、キリスト様と共に、十字架に磔けられた考へで、咳かず、抗はず、天を怨まず、人を咎めず、寧ろ喜び勇んで、之を耐へ忍ぶと云ふ覺悟にならなければなりません。

二、講壇としての十字架

十字架は主の爲にたゞ祭壇であるのみならず、亦實にその有難い御教訓を説き給ふ講壇で、主はこ

の講壇の上に立つて、

(5) 先づ神の稜威の限りなくして、罪の極めて憎むべき次第を述べ給ふのであります。無数の天使が底知れぬ地獄へ突落され、人祖が樂園より逐ひ出され、婦女、童兒を別にして、六十萬と云ふ大勢のイスラエル人が、アラビアの砂漠に屍を晒すに至つた、さ云ふ様な神の正義の恐るべき懲戒を想ひ見たならば、罪の憎むべき譯も、臆げながら察せられぬでは無いませぬ。然し罪一つなき神の御子が、我々の罪故に傷けられ、たゞ我々の過失故に碎かれ給うたことを思ひ、また一方よりは慈愛限りなき御父が、最愛の御獨子に對して、たゞ人間の罪を御身に引受け給うたと云ふばかりで、少しの容赦もなく、見る目も痛はしき御死去を之れに遂げしめ給うたことを考へたら、罪の如何に憎むべく、その天主様に加へ奉る侮辱の如何に恐るべく、天主様もまた如何に罪をお嫌ひになるかと云ふことが、手に取る如く、はつきり見え透いて來るで無いませう。

(6) 次にキリスト様は、三年の間ユデアの村邑を駆け廻つて、傳へ給うた聖訓を、再び十字架の上より繰返し給ふのであります。實に御衣を剥ぎ取られ、赤の裸体にされて、十字架上に生趾を晒され給ふのを仰視ては、「福なる哉、心の貧しき人」云ふ聖言も、「成る程」と首肯されるで無いませう。我身は幾ら撲たれようと、叩かれようと、殺されようと、溫和しい羔の如く一口も吐き給はず、爲れるまゝになり給ふのを見ては「福なる哉、柔和なる人」と云ふ聖教の意味がはつきりと解つて來る。

キリスト様が罪一つなくして、悪人輩に迫害され、無理非道に苦められ給うたのを見ては、「福なる哉、義の爲に迫害を忍ぶ人」と云ふ聖教が今更の様に尊く、有難く感ぜられませんか。其他にもキリスト様は十字架の上より色々美しい善徳の鑑を示して居られます。その謙遜の感すべき御手本を仰視なさい。身は御威光限りなき天主にて在しながら、有りと有ゆる輕侮、凌辱を浴せられ、十字架にまで磔けられて「我は蟲にして人にあらず、世に誹しられ、民に賤めらる」と(二二七)と曰ふまでに謙遜されました。その従順の驚くべきを思ひなさい。身は全能全知の天主にて在しながら、御父の思召に従ひ、痛ましい、辱かしい刑罰にかけられて死することすら辭み給はぬのであります。その愛の深いこと、云つたら、罪人の爲に、喜んでその二つとなき御命を抛ち、我身を十字架に磔ける刑吏の爲にまで、御父の御憐みを祈り給うた位、最後の瀬戸際に臨んでも、猶御母に對する孝養の道を忘れ給はず、その行末を見計らひ、之を聖ヨハネにお托けになつたのであります。

(7) 取分け我々が、耳を澄まして聽かねばならぬのは、その驚くべき忍耐の御説教で、それを深く心に留め置きさへしたらば、如何なる艱難苦勞の中にも、一方ならぬ慰藉を覺えることが出来るのであります。幾ら憂に悶へ、悲みに泣いて居る時でも、涙を揮つて一度カルワリオの頂を仰ぎ、至聖至善なる天主様が、苦しいとも苦しい辱め、辱かしいとも辱かしい苦みの中に沈ませ給へる御姿をつくづくと打眺めましたならば、何んな憂悲でも、ぢつと堪へられぬはずがありますでせうか。人に無理を

爲れた、覺えない罪を言ひ掛けられた、と呟きたい時でも、先づ仰いで十字架を眺め、キリスト様が全能全智の天主にて在しながら、如何なる無理を仕向けられ、如何に恐ろしい罪を吹きかけられなさつたかを思ひなさい。親戚に賣られ、朋友に捨てられ、敵に辱められ、忘恩者に苦められて、悔しくて堪らなく覺える時は、我身をキリスト様と見比べて見なさい。貧乏が苦しいの、病が辛い、饑くて堪らないの、悶へる時も、十字架の上なるキリスト様を思ひなさい、主は荒木の十字架を寢床として、前夜食べたま、一口も食べず、飲まず、焼くが如き渴きに悩まされ給うても、一滴の冷水すら唇にするこゝ叶ひ給はなかつたじやありませんか。而もキリスト様は天地の君、萬物の王に在して、我々は賤しい人間であります。キリスト様は罪一つなき神様、我々は百千の大罪小罪を重ねて、神の御稜威を漬し奉つた大悪人ではありませんか。

(8) 終に救霊を得て、天國へ登るには、身を犠牲に供する覺悟であらねばならぬが、キリスト様は十字架の上より、最もよくこの覺悟を説いて居られます。謙遜の人となり、快く従ふには、傲慢を犠牲にして殺さなければならぬ。身を清淨潔白に保つには、不潔な快樂を犠牲にして居らなければならぬ。浮世の財實に溺められて居ては、心より天主様に奉仕へること出来ないから、その財實を輕ぜねばならぬ。肉慾を抑へて、憐れい名譽を退けて、惡魔の誘惑に打克つには、随分我身に暴力を加へ、不正な慾望を犠牲として献げなければならぬが、然しキリスト様は御父の御光榮の爲、人類の救靈の爲に、十字架上に犠牲となつて下さいました、キリスト様は我々に向つて、「身を懲せ、慾を抑へよ、行を勵め」を教へ得るものはないのであります。

三、玉座としての十字架

(9) 「主は木の上より王たり給ひき」と聖會が歌つて居る如く、キリスト様は十字架を玉座として、その上より我々に王たり給ふのであります。

實に十字架はキリスト様が御力を顯はし給ふ玉座で、主が一たびこの磔柱に上り給ふや、森羅萬象は擧つて主を全能の君と認めるやうになりました。日は暗み、地は震ひ、巖は破れ、墓は開けて死人は甦りました。盜賊の一人は「主よ御國に至り給はん時、我を記憶し給へ」祈り、十字架を見守つて居た百夫長は「實に神の子なりき」と告白し、多くのユデア人すらも、痛悔の胸を打つて山を下りました。なほキリスト様は十字架によつて惡魔に勝ち、今まで暴威を逞うして居た惡魔の國を打滅ぼしなさいました。即ち十字架の上に、死するまでも謙遜して、惡魔の傲慢を打挫ぎ、慘酷なる御苦を堪へ忍んでは、惡魔の勢力を叩き潰し、その貴い御血を流しては、人類を惡魔の手より救ひ上げ給うたのであります。

(10) 斯の如く十字架の上より、敵を見事に打破り給うたキリスト様は、また十字架の上より、人々

の心を御自分に引寄せなさいました。「我地より上げられん時は、萬民を我に引寄せん」(ヨハネ三)と曰うたが、實際キリスト様は十字架の上より、その驚くべき愛を示して、人々の心を感動させ、全世界を擧げて、その御足の下に馳せ寄せ給うたのであります。使徒等が一命を抛つて、世界の四方を駆け廻り、聖教を説き弘めるに至つたのは、十字架に磔られ給ひしキリスト様の愛熱に燃え立ちなされたからではありませんまいか。殉教者等が如何に恐ろしい責苦に遭はされても、喜んで之を耐へ忍び、火の海だらうと、劍の山だらうと、少しも恐れずに、笑つて飛び込んだのと云ふものは、十字架の力に其心を強められた爲ではありませんでしたか。浮世を捨て、身の慾を控へ、厳しい苦行を務めて、天様に奉仕へられた聖人、聖女等は、何によつて、それほどの力を得られたのでせうか。彼等の苦行を甘からしめ、その嚴肅な生活の中に言ふべからざる愉快を感じしめたのは、果して何であつたのでせうか。思ふに彼等は始終十字架を打眺め、キリスト様が、忝くも天地萬物の御君にて在しながら、自分等の爲に御一命を抛出して、かゝる苦痛、凌辱までも堪へ忍び給うたかと思つては、自分等も何うにかして、主の愛に報い奉りたいもの、聊かなりとも、主の爲に苦みたいもの云ふ氣にならずに居られなかつたからではありませんでせうか。

(11) 結び—アシメオの聖フランシスコは修道士等の集會の真中に十字架を樹て、之を一同に示して「私は諸子に與ふべき書籍として別に有ちません、聽かすべき説教も知りません、たゞこの十字架を眺

めなさい、諸子が一頁も餘さずに學ばねばならぬ書は是です。一言も漏らさずに聽かねばならぬ説教は是ですよ」と仰せられたさうであります。我々も今より屢主の十字架を打眺め、心靜かに主の御受難、御死去を默想し、十字架は祭壇である、講壇である、玉座である、と云ふことを忘れずに、その祭壇上に献げられ給ふ犠牲を思ひ、その講壇上より説かれる御教に注意深い耳を傾け、この玉座に坐し給ふ主をば我心の王と仰ぎ、何時でも、何處に於ても、その支配の下に喜んで服従すべく務める様に致しませう。

(三) 十字架に敬愛を表すべし

キリスト様がカルワリオの頂に於て、眞晝中、十字架に磔られ給うたのは、何の爲でした？ 十字架は神の御憐みと、其正義とを世に示す爲に用ひられた道具でありますから、之を公然と人々の眼前に掲げ置いて、尊ばせもし、愛させましょうと云ふ思召があつたからではないでせうか。

(1) 信者は十字架を尊ばなければならぬ—十字架はキリスト様が之に磔られなされる迄と云ふものは、實に厭らしいもの、恐ろしいもの、有ゆる刑罰中に最も耻しいものとせられたものでした。聖書にも「磔にせられたるものは詛はれたる哉」と録されてあります。ユデア人がキリスト様を殺さうと思つて、ピラトに向ひ、連りに「十字架に釘けよ、十字架に釘けよ」と迫つたのは、實に理由がありま

十字架に敬愛を表すべし

した。彼等の目には、十字架ほど恐ろしい、耻かしいものはなかつたのですから、もしキリスト様を十字架に掛けて殺したならば、其教は滅びずには居ない、幾ら何でも、十字架に磔けられたもの、教を奉ずるなんて、そんな馬鹿げた人間は、恐らく一人もあるまい、と思つたからであります。然るに天主様の御計ひは、彼等が淺はかな智慧で考へた所を全然裏切りました。キリスト様は十字架に磔けられなかつても、其教は決して滅びません。却つて弟子等はこの耻しい十字架を眞甲に振り翳して、世界を駆け廻り、澤山の人を十字架の下に招き寄せました。世人は夫を見て仰天しました。悪魔は狼狽へました。ローマ皇帝を咬かして、帝國の威光を以て之を根絶させようと働きました。火の海、劍の山、虎、豹、獅子等の恐ろしい毒牙を用ひて、幾百萬のキリスト信者を無理無慘に責め殺させました。然れども信者等は能くキリスト様に倣ひ、温和しい羊の如く、争はず抗はず、たゞ胸に十字架を印し、口にキリストの御名を唱へて、靜に斃れるのであります。

この悪魔と十字架、ローマ皇帝とキリスト信者との争は、實に三百年の久しきに及んだのであるが、それが何うなつたか云へば、紀元三百十三年、皇帝自らが十字架の前に首を脱ぎ、十字架の旗の御威光に縋るやうになつて來ました。此時より十字架は耻づべき死刑の道具とは見做されずして、寧ろ名譽あるキリストの旗印として、世界到る處に尊崇されるやうになつたのであります。

斯の如くして初めユデアの片隅に樹てられた十字架は、やがて歐洲の方へ移つて、人民を悉く其

旗下にかり集めたのですが、夫れよりアメリカに傳はり、今日では其威光がアジアの隅々、アフリカの深い内地にまでも、輝き亘ると云ふやうになつて參りました。

然し一方からは、この十字架に反對するもの、之を大に厭ひ嫌ひ、取つて仕さう、取つて仕さうと働き、有ゆる手段を弄して止まないものも世に少くはありません。殊に我日本に於て、この十字架の有難味を覺つて、之を尊敬するものは至つて少い。責めて我々は始終この十字架の下を離れず、この十字架に磔けられ給うたキリスト様の弟子たることを耻としないのみならず、寧ろ之を大なる名譽として、益々信心堅固な信者となつて、この十字架の有難味を世の人に知らせて、之を尊敬させるやうに努めなければなりません。

(2) 信者は十字架を愛せねばならぬ—十字架は神の御憐みの證據、我々の救贖の道具で、キリスト様は一生涯之を愛し、之を望みなさいました。ピラトより死刑の宣告を受け給ふや、取る手も遅しと引寄せて之を擔ひ、之に釘けられ、之をその尊き御血に染ませ、終に之が上に御生命を果させ給ふたのであります。そこで我々は十字架を仰視する毎に、主の愛の限りなきを覺りて、何時も感謝の涙を零さなければなりません。また夫れと共に、主の御憐みの涯なきを思つて、大に之に頼り頼らねばなりません。たとへ如何ほど大罪小罪を數重ねた大悪人にしても、キリスト様は私の爲に十字架に磔けられ給うた、私を救はんが爲に、私に罪の赦を得させませんが爲に、かほどの苦痛を堪へ忍ばれたのである、と思ひま

十字架に敬愛を表すべし

したら、何うして失望すること出来るでありませんか。(モイゼの作った銅の蛇の話をも思へ)

猶又キリスト様は十字架を以て我々に其の驚くべき愛を證し給うた以上は、我々もやはり十字架によりて、キリスト様を愛するの眞意を表さねばなりません。身の苦み、心の痛み、憂苦、悲哀、病氣、貧乏、皆これ我々の肩にかけられる十字架であります。而かもキリスト様の十字架の如く、悪黨の手より打掛けられるのではなく、天主様の慈愛深き御手より與へられる十字架ですから、我々はキリスト様の御手本に倣ひ、勇ましく之を擔いで、キリスト様を愛する、キリスト様の爲に喜んでこの十字架を擔ぐ、ミ云ふ心を表さねばなりません。

終に十字架を仰視て、罪の惡むべき次第を覺らねばなりません。十字架は罪によりて樹てられた、キリスト様は罪の爲にこの十字架に釘けられ、この十字架の上に御死去なさいました。その御手足を貫いた恐ろしい釘と金槌、その御脇を刺し透した槍、その死ぬ迄に浴せられ給うた惡口、雜言、是みな惡むべき罪の所爲に外ならぬのであります。我々は之を思ふ毎に、深く罪を怖れ、之を悔い悲むと共に、今後は如何様のことがあつても、決して一つの罪でも犯して、キリスト様を十字架に磔け奉るやうなことがあつてはならぬと、固く決心せねばなりません。

吾主の御復活

(一) 御復活の喜び

(1) 「主は眞に甦り給ひたればなり、アレルヤ」、長くの間キリスト様の御受難、御死去を悲みましたから、今日は亦心の底より躍り喜んで、その御復活を祝し、併せて自分も如何したらばキリスト様の如く復活すること出来るか、ミ云ふことを考へて見たいものであります。

御承知の通り、キリスト様は金曜日の午後三時に御死去なさいましたが、彼れ此れして居る中に、もう日暮にもない頃となりました。ユデアでは日暮から日暮までを一日とするので、日が暮れると、安息日となり、何の仕事も許されないので、そこへに御葬式を済ませて置くより外はないのであります。よつてマリヤ、マグダレナを始め、其他の熱心な婦人等は、もつと丁寧に葬りたい、もつと十分に香料を使つて、御死骸の腐敗を防ぎたいものと思ひ、安息日が過ぎると、早速薬品を買ひ求め、三日目の朝まだき、それを携へて、御墓へと出掛けました。御墓には巨な石を蓋して、番兵までも付けてあつたのですが、俄に大きな地震が起り、それと共に、顔は電の様に輝き、身には雪の如き衣を着けた天使が顯れて、墓の蓋を取除けました。番兵等は夫れに喫驚仰天して、死んだやうになりま

したが、正氣づくや一散に逃げ歸つて了みました。かゝる事があつたらうとは夢にも知らぬ婦人等は、「御墓には巨きな石を蓋してあるが、誰か取り除けてくれるでせうね」と話し合ひながら行つて見ると、蓋石は轉んで、墓の口は開いて居る。中に這入つて見ると、御死骸は見付からない、たゞ白服を着けた天使が坐つて居るばかり。皆大に驚いて、魂も身に添はないと云ふ墳墓、其時天使が「怖れなさらな、貴女等は十字架に釘けられ給うたイエズス様をお尋ねになるのでせう、もう復活して此處には在さぬ、そのいらつしやつた處を御覽なさい、たゞ往つて弟子等ミベトロに告げなさい」と申しました。是は朝のことでありますが、それから間もなくキリスト様はマグダレナを始め、聖ベトロ、其他の婦人等にもお顯れになり、夕方には弟子等が閉ぢ籠つて居る室内に、戸は閉めたま、お顯れになりました。聖母マリアにもお顯れになつたか否か、福音書には何とも書いてありませんが、必ず最先にお顯れになつたでういませう。最愛のお母様、御受難、御死去に立合つて、死なんばかりの悲みに沈まれたお母様だもの、必ず最先に顯れて、其心を慰め、之を言ひ知れぬ歡喜に躍らしめ給うたであらうことは、察するに難からぬのであります。

二三日前には彼れほごまで卑められ、辱められ、茨を冠せられ、唾を吐きかけられ、全身隙間もなく打爛らされ、十字架にさへ磔けられて御死去なさいましたその憫な御有様に引換へて、今日の光り輝いた御体を仰視られた御母のお歡喜は果して如何ばかりでういりましたでせうか。我々も心の底より

主の御復活を喜び、聲を合せて「アレルヤ」を歌ひませう。

(2) 今キリスト様は何の爲め御復活なさいましたでせう。それは御受難に當つて、言語に絶えたる輕侮、凌辱、苦痛を浴せられなさいましたから、その代りに無上の光榮、比なき歡喜に醉され給ふのが當然すぎた當然だからであります。「キリストは此等の苦みを受けて、而して己が光榮に入るべき者ならざりしか」(コリント六)自らも宣うて居られませう。

實に三日前の御體は、數知れぬ深手淺手に裂け破れ、頭の頂より足の爪先まで至き所とはなく、その輝かしい美しさはすっかり消え失せて、たゞ血汐に黒ずんだ、見る影もない、憫れな、淺ましい死骸でういました。然るに御復活の曉になりますと、全然新しき生命を得、苦みを知らず、痛みを知らず、死ぬ氣遣もない、瞬く間に千萬里の遠きにも達し、金鍔すら自在に出入される、謂はゞ靈化したかの如き慶い御體となられたのであります。

キリスト様の御復活は、世の終に於ける我々の復活の保證であり、前表であります。我々も今キリスト様に倣ひ、その御光榮の爲に、勞を厭はず、苦を恐れず、進んでこの肉體を犠牲に供しますならば、また必ず同様の光榮を見ることが出来る、「もし共に苦まば、光榮をもまた共に受くべきなり」(ローマ七)と聖パウロも曰はれて居ます。

(3) キリスト様は御受難の際に、その名譽を犠牲とし、ありごあらゆる輕侮、凌辱を浴せられ、

けらも同様に踏みじられなさいました。然るに今や是等の輕侮、凌辱は跡もなく消え失せて、大なる名譽、終知らぬ光榮が之に代りました。たつた今まで散々に愚弄した兵士等は、最先にその復活の證人となりました。之に死刑を宣告した判事等は、大耻をかきました。見棄て、逃げ失せた弟子等は、四方を飛び廻つて、その御復活の光榮を歌ひました。

我々も世の風評や人の名譽を輕じ、一切を主の御手にお任せ致しませう。思召とあらば、喜んで之を犠牲に供しませう。主の爲に名譽を抛つのは、大なる犠牲であります。主は必ず之を貴く見積り、後日百倍にしてお報い下さるに相違ありません。

(4) 終にキリスト様の御靈魂は、御受難の際に一切の慰めを失ひ、堪へ難い悲みに沈み入れ、死なんばかりに憂ひ、悩み、悶へさせ給ふのでありました。十字架の上に於て「我神よ、我神よ、何ぞ我を棄て給ひしや」(マテオ)と叫び給つたのを以ても知られませう。然るに今やその悲みの時は過ぎ去り、御靈魂は譬へやうもなき喜びに漲り、言ひ知れぬ慰めに躍り立ち、窮りなき福に飽かされ給ふに至りました。

我々の爲にも悲みの時は過ぎ去ります。誘惑や、讒言や、誹謗や、憂、悶が潮の如く押寄せて來た時、ちつと踏みこたへたならば、其等は間もなく過ぎ去つて了ひます。永遠の光榮、窮りなき福の世界に於て、主と共に譬へやうもなき歡喜、言ひ知れぬ慰安、窮りなき福を樂むことが出来る様に

なるのであります。

(5) 御復活日の午後、二人の弟子がエムマウスミ云ふ町に往きました。その途中キリスト様は旅人の妻をしてお顯れになり、彼等の途伴となつて、親しくお物語をなさいましたが、町に着くや、そのまゝ行き過ぎようと致されます。二人はキリスト様とは知らないながらも、町寧に「日がもう傾いて、暮れようとして居ます。私等と共にお留りなさいませ」と云つて強ひて引止めました。キリスト様は彼等と共に宿に入り、パンを祝し、劈いて彼等にお與へになりました。すると彼等の目が開いて「あ、御主様」と認めるや、忽ちパツミ消え失せなさいました。

皆さん、我々の爲にも日暮になりかけては居ませんか。生命は短い、當にされたものではない、何時最後の夜がやつて來ないにも限らない、是非キリスト様を取失はない様にしなければならぬ。祈りませう、心を合せて祈りませう。殊に聖體を拜領した後、御主様に向つて一心に祈りませう、「御主様、何うぞ私と共にお留り下さい、信仰の光は薄らいで、愛の熱も冷えて参りましたから、私の心に留つて、私の信仰を照らし、私の愛を煖めて下さい……私の家族にも留つて下さいませ、親は其務を怠らないやう、子供は救靈の道を踏み外さないやうお導き下さい、私の町に、私の教會に、我日本帝國にも留つて、之を照らし、之を教へ、之を諭し、戒めて下さい。私等が皆揃つて主を信じ、主に従ひ、主を愛し、後で審判の曉には、皆揃つて復活の光榮を忝うするに至る様、其爲に今日聖寵を賜ひ、

主と共に靈魂上の復活をさして下さい、斯う祈りましたならば、彼の弟子等の願を聞き容れて、お留り下さつたキリスト様は、また必ず我々と共に留り、我々を助けて、靈魂上の復活をさして下さるに相違ありません。

(二) 三つの復活

我々は今日、御主の御復活、我々の靈魂の復活、我々の肉身の復活、この三つを祝賀したいのですが、何れの復活にも、御主は先づ自ら犠牲となり、然る後、勝利を得、凱歌を挙げ給ふのであります。

(1) 吾主の御復活は、我々の信仰の基礎である——實に吾主の御復活、その御復活の事實は我々の奉ずる宗教中の最も重大な要點であります。

奇蹟は神の御業である、その奇蹟の中でも最大の奇蹟は死者の復活である、その復活の中に最も大きな奇蹟とすべきは、死者が自ら復活することである。今天主様は御子の神性を證せんが爲め、復活と、自ら復活すること、この二つの奇蹟を行ひなさいました。

先づ復活は主の神性を高らかに叫ぶ最も有力な證明ですから、天主様はダウイドや、イザヤの如き豫言者を以て、千年も七百年も前から之を豫言させ、イエズス様御自身もまた「この神殿を毀せ、三日の後に之を建て直して見せる」とか、「ヨナが三晝夜魚の腹に在つた如く、人の子も然うあるであ

らう」とか、「殺されて三日目に復活する」とか、幾度となく明かに豫言して置かれました。

そして今やその豫言に違はず、死して三日目に御復活なさいました。その御復活の證人には使徒等が居ります。彼の臆病な使徒等が俄に大膽極まる證人となり、主の御復活を證明する爲に、己が生命を抛つのも惜まないまでになつたのと云ふものは、確に復活し給ひし御主を見たからでありませんか。御墓の番兵、司祭長等もその御復活を疑ふこと能はず、たゞ何とあして、この事實を打消すこと出来まいか、連りに工夫したものであります。エルザレムなるユデア人の改宗、數知れぬ殉教者の不撓不屈の勇氣、是等は皆主の御復活の動かすべからざる證據でなくて何でいませう。

もし復活が神の御業であるとするならば、自ら復活し給うた基督様が神にて在すことは、鮮に證明された譯でいませう。もしキリスト様が、我身の神たることを證明するが爲に、前以て己が復活を豫言し、その豫言通りに果して復活し給うたとするならば、その神にて在すことは、いよく確に證明された譯でいませう。もしキリスト様が果して神にて在すならば、その教義、その道徳、その教會、その秘蹟は皆神聖であらねばならぬ。その教へ給うた如く、天國もあり、地獄もあり、永遠の生命もあることは、些も疑を容れない所であります。

我々の信仰は斯う云ふ堅固な基礎の上に立てられてある。何んなことがあつても微動だにするはずがない。だから堅く信じませう。だから信仰上には勇壯無敵になりませう。だから堅忍不拔、動かさ

ること山の如くなりませう。

(2) 吾主の御復活は我々の靈魂を復活さすべき好機會である—信する上は行はねばならぬ、随つて我々は此機を失はず、聖會の命のまゝに御復活の務を果し、靈魂上の復活を謀らなければならぬ。この復活！この靈魂上の復活によつて、罪が赦される、心には言ひ知れぬ平和が漲る、歡喜が溢れる、胸は幸福に醉はされるのであります。

皆さん、是非くこの御復活を利用しませう、之を利用して靈魂を復活させませう。靈的死より聖寵の生命に、冷淡より熱心に、熱心より完徳の生活に復活させ、今迄とは打つて變つた新しい人となりませう。キリスト様の御生命を以て、我々の生命となし、キリスト様の如く思ひ、キリスト様の如く言ひ、キリスト様の如く立振舞ふ様に務めませう。夫れも一日や二日、一週間や二週間だけに止らず、身を終るまで、その新しい、復活した生命を續ける様に努めませう。

(3) さうして行きましたならば、必ず臆い肉身の魅りを見ることが出来る—望徳はこの世を渡るのに極めて大切な徳でありまして、この望徳なしに、人は到底生きて行かれません。死の思は頗る陰氣な、物悲しい、さうかすると實に堪へ難い程のものでございますが、然し心を高く擧げて、墓の向ふを眺め、肉身の魅を思つて御覽なさい……我々も一度は復活するのです。もし今の中にキリスト様の教を信じ、キリスト様の御跡を履んで進みましたならば、もし今の中に誠意か

ら靈的復活をなしましたならば、また一度は我々の肉體も復活する、キリスト様のその如く、光り輝いて復活する、眩しい光榮を帯びて復活することが出来るのであります。我々は復活する……是こそ悪人に取つては苦しい、堪へ難い思でありませうが、善人の爲には、今キリスト様と共に靈的復活をなす良信者の爲には、實に何云ふ慰に満ちた教理で亙いませうか……。

(4) 言ひ知れぬ苦みのドン底に沈めるヨブも、復活の思ひに慰められ、大に氣を引立てられたものでした—すべての殉教者、すべての義人、すべての良信者も同じくこの希望に慰められ、この希望に力づけられ、この希望に激勵されるのであります。我々もこの希望を心に深く刻みつけて置きませう……如何なる戦でも、如何なる十字架でも、以て氣強く切抜け、以て勇しく擔ぎ通すことが出来るで亙いませう。

(三) 吾主の御復活 (靈魂上の復活)

(1) 長らくキリスト様の御受難、御死去を悲みましたが、いよく喜び躍つてその御復活の光榮を祝ふ今日になりました。聖會はこの機を失はず、我々信者をして、罪に死し、キリスト様と共に新しき生命に復活させたいと望み、「せめて毎年一度、御復活日の頃、聖體を拜領べし」と命じて居ます。然らば御主の御復活は、我々信者が罪の死より聖寵の生命に、不熱心より熱心に立歸るべき時である。

心を悔め行を立て直すべき時である。聖パウロも仰しやつて居ます、「キリストが御父の光榮を以て、死者の中より復活し給ひし如く、我等も亦新しき生命に歩まん爲なり」と。即ちキリスト様が肉身の御復活をなさつた如く、我々も靈魂上の復活をして、新しき人に生れ變らねばならぬ云ふのである。抑もキリスト様の御復活は、眞實でありました、公でありました。永続的でありました。我々の復活も同じく眞實であらねばならぬ、公に現はれねばならぬ、永続的であらねばなりません。

(2)キリスト様の復活は眞實でした、決して見せ掛けばかりではありません。三日前に、それこそ確に岩屋の墓に葬られなかつた御死骸は、三日目の朝には、もう墓には見付かりませんでした。天使は降りて、その御復活を告げ、キリスト様御自分も幾度となく弟子等に顯はれ、一緒に食べ、一緒に物語り、御體に觸れさせ、御傷に指を入れて探らせ等して、その復活の眞實偽りなきことを御證明になりました。

我々が靈魂上の復活をするにも、やはり表面だけでは足りない、是非ともキリスト様の如く、眞實に復活しなければならぬ。其爲には罪を心より悔み悲み、之を深く恐れると共に、以後は決して再びこの罪を犯さない、斷然この罪の機會にも還かる、云ふ固い決心にならなければならぬ。それだけの決心になり得ないならば、眞實の改心ではない、天主様の聖寵を回復することも出来ない。靈魂が新しい生命に復活したとは申されません。

皆さんは、この際告白をなし、御復活の勳を果して居られますでせうが、果して罪の墓より抜け出て、聖寵の生命に復活なさいましたか。告白をなさつたのは果して眞實に罪を悔み悲み、行を悔める決心からでしたか。親兄弟からうるさく勧められるから、信者の中に居つて、御復活の勳も果さないやうでは肩身が狭いから、或は別にそんな理由があるでもないが、毎年／＼さう行つて來て居るから、と云ふだけに止り、眞實に心を悔めらる、行を立て直す、と云ふ考へは少もない云やうなことはありませんか。それでは何うしてもキリスト様と共に復活なさつたとは申されずまい。

キリスト様は御復活なさつた證據に、三日目の朝には、もう御墓には在さなかつた。御死骸を包んだ擔布はそのまま、残して御墓を出て了はれました。

皆さんは果して如何でせう、やはり罪の機會に包まれては居られませんか、やはり惡しき友に繋がれては居られませんか、やはり身装から物の言ひ様、立振舞に至るまで、少しも前と變つた所が無い、謂は、やはり前々通り墓に葬られて居る、云ふ鹽梅ではありませんか。

御復活の朝、御墓へ行きました婦人等が、御死骸の見付からないのに驚き怪んで居ると、天使は彼等を咎めて、「汝等は何ぞ生者を死者の中に尋ぬるや、彼は此に在さず、復活し給へり」と申しました。皆さんも眞實に心を改めなさいましたならば、左こそあらねばならぬ。惡い友が尋ねて參りました時、惡魔が誘ひを仕向けました時、「もう此處には居ないよ。彼は復活したのだ、すつかり心を

改めて了つたのだ」守護の天使がお答へになつて下さる位にならなければなりません。

(3) キリスト様の御復活は公でした。四十日の間、屢々弟子等に顯はれ、その御復活を御證明になりました。もうカルワリオに於ける如く、深手淺手に破れ、見る影もなく棄れ果てたる御體ではなくして、實に清い、美しい、照り輝ける御體でありました。傷跡こそ残つて居ましたが、然しその傷跡は眩きまでに照り輝いて居ました……罪を痛悔し、心を改めて靈魂上の復活をなさつた皆さんも、やはり左こそあらねばならぬ。新しい生命に復活したと云ふ印に、浮世の快樂に遠からねばならぬ。身装を慎まねばならぬ、熱心に祈り、熱心に度々聖體を拜領し、熱心に宗教を研究し、善業を勵んで、人に良き鑑を示さねばならぬ。前に傷であつた所、不足であつた點は、殊更ら立派に輝かさねばならぬ。聖パウロは仰しやつた、「もしキリストと共に復活したるならば、上のことを求めよ、地上のことならで、上のことを慮れ」(コリント)。即ち現世の事ばかりに心を奪はれないで、天の事、靈魂上のことを想ふやうにせねばならぬと云ふのであります。

そこで眞實の復活はキリスト様の夫れの如く、必ず外部に表はれなければならぬ。一つは天主様から罪を赦して戴きました、死んで居たのを復活さして戴きました特別の御恵を感謝するが爲め、又一つは是まで人の惡例となつた所を取消し、反對に善い手本になつて、人を善に導き入れるが爲めに、是非とも自分の改心した證據を公に表さねばならぬ。そんなにして自分は立派に心を改め、行を立て直したと云ふことを世の人の前に公表してからは、中途にして止めるのが困難になりますから、結局は永續する爲にも、随分助けとなるものであります。

(1) キリスト様の御復活は永續的でした。聖パウロは申された、「キリストは死者の中より復活して、最早死し給ふことなく、死は更に之を司ることなかるべし……斯の如く汝等も己を罪には死したるものなれども神の爲には活けるものと思へ」(コリント)。實にキリスト様の如く復活した上は、亦キリスト様の如く再び死ぬことがないやう、永く、終迄も續いて罪を避け、善を勵んで行くやうに致さなければならぬのであります。

多くの人は御復活日の頃、聖籠に感じ、心より罪を悔い悲み、行を立て直しますが、悲しいかな、その復活がキリスト様の御復活とは違つて、永續性を持たない、聖體を拜領しました當座の二三日間、又は一二週間は熱心であります、その熱心は次第に冷却して来る、世俗に遠かり、よく祈り、言を慎み、行を戒めて行くのを窮痛に覺えて来る、やがては前々通りに、天主様を忘れる、祈を怠る、惡友に近く、世の中に浮れ廻はる、爲に一旦は立派に復活したものが再び死んで了ふ、腐つて了ふ、時としては其儘、罪の墓より地獄の中へ落ち込んで了ふ者さへないものでもありません。

さうなりましては、一旦復活したのも、何の役に立つていませうか。聖籠の生命を得るが爲に骨折つたのも、全く水の泡ではありませんか。折角天主様の聖籠を蒙り、罪を赦して戴いて居ながら、

間もなくその聖寵を打棄て、その決心を忘れ、罪の道に逆戻りをして、天主様に身を背けるならば、罪は前より重くなるばかり、随つて天主様にも見棄てられ、厳しい罰を蒙ることにならんとも限りま
すまい。土屢その上に降来る雨を吸入れて、耕す人を益すべき草を生ずれば、神より祝福を受くと
雖も、荆棘と蒺藜を生ずれば、棄てられて詛はるゝに近く、其終は焼かるべきのみ」(マテオ)と聖バ
ウロも仰しやつて居る。恐るべきことではありません。

(5) 結論—皆さん、この慶たい、喜ばしい御復活日の朝から、餘りにも重苦しいお話をして済ませ
せんが、折角靈魂上の復活をなさつた上は、是非とも、皆さんの復活がキリスト様のその如く、眞
實であり、公であり、永続的であり、キリスト様の生命を以て生命とする様にお務めにならんことを
希望するの餘り、斯様なことを申上げる次第であります。悪しからず御諒察あらんことをお願い申し
て置きます。

(四) 復活體の四大特質

(1) キリスト様の御復活は、世の終に於ける我々の復活の前表で、復活し給ひし主の御
體が、不死となり、迅速となり、靈化せられ、光榮に輝き給うた如く、我々の肉體も同じ四つの特質
を帯びて復活するのであります。然しさう云ふ幸福を忝うするには、今の中に心靈上の復活をし

すつかり心を改めなければなりません。

(1) キリスト様の御體は不死となりました—三日前には頭の頂から足の爪先まで全き所としては
なく、たゞ裂創と打創と腫物のみで、見る影もなかつたその御體は、一旦復活の光榮を帯び給ふや、
苦みを知らず、痛みを知らず、死する憂すらなき慶い御體となられました。キリストは死者の中より
復活して、最早や死し給ふことなく、死が更に之を司ることなかるべし(コリント)と聖パウロは曰つて
居ますでせう。

我々も一度はそんな慶い肉體に復活しなければならぬが、其爲には今の中に靈的復活をして、小罪
の痛を知らず、大罪の死を知らず、世の譽や肉の快樂にも傷けられない様、努めなければならぬ。し
たがつて「腐敗に於て蔭かれ、不朽を以て復活せん」(ローマ)と聖パウロも曰つて居られます如く、
制慾を行ひ、苦行を努め、「腐敗に於て蔭かれ」、麥粒が地に蔭かれて、腐敗したかの如くなる必要が
あるのであります。

(3) キリスト様の御體は迅速になりました—三日前には高手小手に縛められ、カルワリオへ曳き登
され、十字架に釘けられ、身動きすら出来なくなられた御體も、一日復活の光榮を帯び給ふや、輕妙、
自在、千萬里の遠きも瞬く間に往來し得る慶い御體となられたのであります。

我々の肉體も、復活の曉には、やはり然うなるのであります。其爲には今の中に靈的復活をし

て、天主様のお招きになる所、長上の命ずる所には、何時でも、如何なる場合にでも飛んで行く、響の聲に應ずるが如く飛んで行く、主の鞭を以て甘とし、その荷を以て軽とし、勇ましく之を背負ふ、神の御光榮の爲め、人の救靈の爲め、教會の發展の爲め、大に奮發すると云ふ様にせねばなりません。然しそれこそ、聖パウロの所謂「虚弱に於て時かれ、力を以て復活する」(上全)ので、己を棄て、己が主張を枉げ、「虚弱」なるもの、如くなつた結果に外ならぬのであります。

(4) キリスト様の御體は靈の如くなられました—三日前までは、膚劈け、肉爛れ、色は蒼白めて、それはそれは見るに見られぬ御體でしたが、一旦復活の光榮を帯び給ふや、全く靈化したかの如く、金鐵の中でも自在に出入される、墓の蓋石はそのまゝにしてお出で行きになり、弟子等がユデア人を恐れ、室内深く閉ぢ籠つて居る時も、戸は開かないで、中へお入りになつた程の慶い御體となられました。我々も斯う云ふ慶い肉體に復活し得るが爲め、今靈的に復活して、天主様に仕へ、各自の義務を果すに當つて、何物が前途に横つて居ませうと、屈せず撓まず、之を突破し、勇往邁進しなければなりません。それこそ聖パウロの所謂「動物的身體に時かれ、靈的身體に復活する」(上全)のであります。その爲には平生我等の慾望を制へ、利己、自愛の念を斷つて棄てる、その「動物的身體」を葬つて了ふ必要があるのであります。

(5) 終にキリスト様の御體は燦然として、眩しきまでに輝き渡りました—三日前に鞭たれ、茨を冠せられ、重い十字架の下に壓倒され、見るも哀れな姿を呈せしその御體とは、夢にも思はれない位でありました。

我々の身體も是非然うなつて復活せねばならぬ。その爲には今の中に靈的復活をし、徳を磨き、行を勵み、人の好き模範となり、神の御國がいよく擴められ、その御名がますます讃美せられ、譽め稱へられ給ふ様、力の限り活動する必要があります。然しそれは「卑賤を以て時かれ、光榮を以て復活せん」(上全)とあります如く、謙遜、従順、忍耐等の徳を實行し、自ら卑賤しくなつた結果に出ることを忘れてなりません。

皆さん、我々は御復活の間、毎日三度「天の元后、喜び給へ、アレルヤ」を誦へます。御子が御復活になつたからお喜び下さい、と聖母に申上げるのであります。然し聖母の御子はたゞキリスト様のみでない、我々も或る意味に於て聖母の子供でいますから、たとへキリスト様は御復活になりました、我々が共に復活しないでは、聖母も何だか物足りなく思ひ給ふでいます。でありますからこの際、我々は是非とも靈魂上の復活を全うして、聖母の御心を十分に喜ばせ奉る様、努めなければなりません。

聖ヨゼフの擁護の祝日

(一) 聖ヨゼフの擁護に緹れ

(1) 聖ヨゼフはイエズス様の擁護者ご選まれなされた御方で、聖會は特に之を讃めて「ナザレトの聖家族の最忠實なる守護者」と呼んで居るのであります。實際イエズス様が御降誕後、間もなくエジプトへ逃げなければならぬごころになりました時、聖ヨゼフは之を保護して、見も知りもせぬ外國にまで落ちて行かれました。

ナザレトにお歸りになりましたからも、聖ヨゼフは、聖母マリアとイエズス様とを養ふが爲に、夜、晝、寒さ、暑さの別なく、汗水たらしてセツセと立働、貧し、とは云ひながらも、太した不自由も見せない様にして行かれました。

斯の如く親切にイエズス様を保護し給うた聖ヨゼフであれば、今日でも必ず我々信者を保護して下さるに相違ないので、聖會は聖ヨゼフを己が擁護者と定め、信者を勧めて、その御蔭の下に頼り緹らせることにしたのであります。

(2) 凡そ人のお世話を焼く、人を保護するには、先づそれ相當の権力を持たなければなりません。

権力がないならば、眞逆の場合に、心ばかりはいくら彌猛に逸りましても、何うすることも出来るものではない。然し幾ら権力ばかりあつた所で、情を持たない、人の難儀を見ながら、少しの同情を寄せ、道も知らない様では、その権力も格別有難いものではありません。所で聖ヨゼフは、権力にせよ、情にせよ、何方から云つても申分はないのであります。

(3) 第一権力があります。聖ヨゼフはイエズス様の養父でせう。御存命中、イエズス様は、聖ヨゼフを父として尊び、心を傾けて之に従はれました。ナザレトに明し暮し給うた三十年の間と云ふものは、イエズス様の務はたゞ聖ヨゼフに従ふに在りました。何處に行くにも、何をするにも、寝るにも起きるにも、食べるにも着るにも、たゞ聖ヨゼフの指揮の下に動いて行かれました。聖ヨゼフから「是を致しなさい、彼處へ行きなさい、彼を持つて来て下さい」と云はれると、イエズス様は早速飛び立つて従はれました。臺所の用事から、水汲、拭掃除、使ひ走り、大工の仕事に至るまで、聖ヨゼフの命のまゝに喜んで遣つて除けられたのであります。

昔ヨズエは敵と戦ひ、思ふ存分敵軍を叩き潰さない中に日が暮れか、つたと見るや、命じて日の脚を止めました。實に驚くべき力であります。然し善く、考へて見ますと、聖ヨゼフはたゞ日に命じた位ではありません。其日を造り給うた神様に命じました。して其命令に神様が喜んで従はれたのであります。何ぞ云ふ驚くべき権力で、いませうか。

御存命中にさへ是れほどの権力を持ち給うた聖ヨゼフであれば、況して今日、その報酬を得て居られる天國に於て、其権力を失ひ給ふ譯がありませんでせうか。増しこそすれ、決して減りはしない筈ではありませんか。して見ると、もし聖ヨゼフが我々の爲にお傳達になりましたら、イエズス様は必ずお聞き容れ下さる。ゼルソンと云ふ學者は申しました、「父が其子に、夫が其婦に願ふ時は、命令も同様である」と。然らば聖ヨゼフがイエズス様なり、マリア様なりに向つて「之をお願ひ申します、之を彼の人にお與へ下さい、彼の罪人にお救し下さい、彼の人の病を癒して下さい、彼の人を慰めて下さい」とお願ひになります時、拒絶され給ふ様なことは萬に一つもありませんでせうか。

(4) 然し幾ら権力ばかりありまして、情がないならば駄目な話でありますが、聖ヨゼフは亦非常に情篤く在す。實に聖ヨゼフはイエズス様を生命の危きより救ふが爲に、如何なる父も及ばぬほどの慈愛を以て奔走されました。其當時の心は、今日でも決して失つては居られません。其上、三十年の間も限りなき御情のイエズス様と共に棲み共に暮して、充分その御愛情の火に温つて居られますから、イエズス様が我々罪人を憐んで下さる通り、御自分もまた憐んで下さるのであります。

なほ聖ヨゼフは我々一人宛を以て、イエズス様の貴い御血に贖はれたもの、謂はゞ小さなイエズスを見て居られますので、恰度イエズス様をへロデの手より救はんが爲め御奔走になりました如く、我々をも悪魔の手より遁すが爲め、十二分に周旋して下さいます。イエズス様を養ひ育てるが爲に汗水

滴してお働きになつた如く、我々の靈魂を養ひ育てるにも、必ず出来るだけの力を盡して下さることは疑を容れざる所であります。

斯の如く聖ヨゼフの御権力は優れ、その御情も大きいのですから、我々は何時、如何なる場合にも、深く聖ヨゼフを尊び、心より之に信頼まねばなりません。然し信頼むだけでは足りない、亦夫れと共に聖ヨゼフを鑑として、之に則るべく努める必要があるであります。

(5) 第一子の親たるものは、皆我子を保護して天國へ導き入れるが爲め、特に天主様から選ばれたのでありますから、聖ヨゼフがイエズス様に對してなされた通りのことを、我子に對して致さなければなりません。

我子がへロデのやうな悪魔だとか、その悪魔の手先となつて働く所の悪友だとか、或は罪の危い機會だとか、そんなものに咬かされて、其靈魂を危くする様な目に遭ふことが幾回あるか知れませんが、そんな場合に、聖ヨゼフの如く我子をその罪の機會より、その悪友の中より、その悪魔の手の中より引出して、説諭もし、意見も加へ、時としては鞭を振つても、その靈魂を保護するが親の務であります。

たゞ我子の靈魂を危い中から救ひ出すばかりでは足りません。なほ之を養ひ育てなければならぬ、之に祈禱を誦へさせ、之に教を習はせ、之を聖堂に参詣させ、之に告白や聖體の秘蹟を授けて、そ

の靈魂を餓死させぬやう心配するのも親の務である。夫れに就て親等は果して疚しい所がありませんでせうか。鏡に向へば顔の美醜が分る。聖ヨゼフがイエズス様に對して盡された所を鏡として、それに自分の遣つて居る所を照して見たらば如何でせう。充分でせうか。不足な點はありませんか。顔を赤めずには眺め得ないやうな所がないでせうか。

(6) 子の親ばかりにも限りません。誰しも聖ヨゼフを鑑とすることが出来ます。我々が洗禮を授かつた時、取分け聖體を拜領した時、イエズス様は我々の心にお牛れ下さいます。だが夫と共に、悪魔や悪友や彼のヘロデ見たやうに、唯つた今生れ給うたばかりのイエズス様を取殺さう取殺さうとするものであります。我々はそんな危い中を立去り、そんな悪友の中を避け、そんな恐ろしい罪の機會を遠かつて、イエズス様を生命の危きより救つて上げねばなりません。

夫ればかりでない、聖ヨゼフの如く、大に働いてイエズス様を養ひ育て、その御成長を助けなければなりません。何うしてイエズス様を養ひ申しませう。祈禱を以て、ミサ聖祭に屢興りまして、熱心に説教を聴き、告白や聖體を屢授かり、是等を食物となして、イエズス様を養ひ奉るのです。其他すべて罪を避け、善を行ひ、我意を捨て、長上に従ひ、ますます謙遜、忍耐、清淨になりますと、それだけイエズス様を成長させ奉る譯になります。

かういふ話があります、或る修道士が獨り室内に居ります時、イエズス様が美しい幼児となつて、

突然お顯はれ下さいました。喜んで打眺めて居ります、偶々祈禱の鐘が鳴りましたので、件の修道士はイエズス様を遺棄にして、早速祈禱に行きました。歸つて見ると、イエズス様は成長して、十八九の青年になつて居られ、「汝の從順が私をこんなに成長させたのです」と仰有つたさうであります。我身を抛てば抛つほぎ、身の自由を捨て、人に従ひ、善を行ひ、徳を積むやうに務めれば、務めるだけイエズス様を我身の内に成長させ奉るのだと云ふことは、是を以ても知られませう。

斯の如く各自の心にイエズス様を保護して行くのみならず、善徳の食物を饌めて之を養ひ、之を成長させ奉るならば、聖ヨゼフに與へられた御褒美は必ず我々にも與へられます。聖ヨゼフはイエズス様の養父、且つ保護者として御褒美を戴かれて居るのですが、我々も或意味に於ては、イエズス様の養父であり、保護者でありまして、やはり聖ヨゼフと同様の御褒美を忝うすることが出来るに相違ありません。然らば我々は今日より深く聖ヨゼフの權力ある御保護に縋るに共に、亦聖ヨゼフを鑑として、之に則るべく努め、その爲に必要な聖寵を祈りませう。

(二) 基督敎生活の典型なる聖ヨゼフ

聖ヨゼフは基督敎生活の完全なる典型であります。

(1) 聖ヨゼフは全くイエズス様の爲に生きて行かれた—福音書を繕いて見ますと、聖ヨゼフは神の

御子の養育を擔當されたその利那より、そのすべての思、そのすべての熱誠、そのすべての活動を残らずイエズス様の爲に傾け盡し給ふのであつたことが知られます。ペトレヘムでも然うでした。エジプトでも然うでした。ナザレトでも同じく然うでした。是こそ聖ヨゼフの生活を双びなきまでに偉大ならしめた所以のものではなかつたでせうか。

凡そ我々の行爲の價値を決定するのは、その結果の如何に在らずして、我々がその行爲に持たする目的に在るのであります。自分の爲す所が、大小輕重の別なく、すべて天國の報に値するよき見る時、胸は如何なる歡喜に躍り立つて來るでせうか……その爲に何を要しますか……たゞすべてをイエズス様のために爲る、たゞ聖ヨゼフの如く、イエズス様を愛する心で一切を果す様にすれば、それで澤山なのであります……。

(一) 聖ヨゼフはイエズス様の御眼の前に生きて行かれた―右申しました様な生活様式、そのプログラムを實現するが爲め、天主様は我々に必要な御援助をお與へ下さいました。その御援助は、始終天主様の御眼の前を思ふこゝし、言ひ換へれば、絶えず天主様の御眼の前に生きて行くことであります。聖ヨゼフを御覽なさい、己が意のままにしたいと思ふ様なことが萬に一つも出て來たにせよ、一目神なる御子を仰視るこゝし、忽ち己が天職を思ひ出し、一切不純な念は跡もなく消え失せるのであります。自分の愛し敬へる御方の眼前に居るこゝし、自ら勇み立ち、腕打さすり、力足ふみ鳴すに至るものであ

ります。然しイエズス様の御眼の前ほど力あるものが世にありますでせうか。自分は主の御眼の前に居るのだと思ふ時、勇氣の全身に漲るのを覺えない人が一人でもありませんか。

(3) 聖ヨゼフはイエズス様の御助の下に生きて行かれた―イエズス様の幼年時代を思ひなさい、聖ヨゼフに何かの手傳ひを爲し得る様になるや、喜んで之を助け、之に手傳ひ、少しでも養父の勞を軽くし、その體を休ませ、その心を慰めたい義務給ふのじやありませんでしたらうか。

内的生活の働きを爲すに當つて、イエズス様が我々をお助け下さると思ふのは、決して一個の幻影ではありません。イエズス様は聖寵の生命、神秘的ではあるが、然しまた實際的なその聖寵の生命を以て、我々の心に活きたい活きたい欲し、隨つて誘惑に打勝つが爲め、徳を修めるが爲め、義務を果すが爲め、事業を全うし得るが爲め、我々に光と力とを與へんものこゝし、常に身構へして居られるのであります……。

要するにイエズス様の爲に活きる、イエズス様の御眼の前に、イエズス様の御助の下に活きるこゝし、ふこゝほご偉大なるものもなければ、美なるものもない。この理想を捉へんには、何を爲すべきでせうか。飽までそれを望み、何んなことがあつても力を落さず、屢々聖ヨゼフの御鑑を思ひ、その御助を求めて止まなかつたら、それで澤山です、必ず目的を達成するこゝしが出来ます。

(三) 聖ヨゼフの御教訓

思想國難の叫ばれる今日、労働、權威、家庭生活ニ云ふ三方面に就き、聖ヨゼフの我々に遺されし御教訓を默想して見ることに致しませう。

(1) 聖ヨゼフは労働を神聖ならしめ給うた—人祖の墮落以來、労働は一個の辛い課業となりました。然うです、信仰を持たない人の爲に、労働は如何に苦しい重荷でせうか。しかも信仰がないのですから、何等獎勵される所、勇氣づけられる所とはないのであります。

然るにナザレトへ行き、その細な工場を覗いて御覽なさい。天主様は我等に労働を愛せしめんが爲め、その親しい友、その最愛の僕をば苦しし労働に服せしめ給うた。聖ヨゼフは労働者でした。労働を尊重し、毎日汗水滴して働き、一家の爲にパンを求められた。あ、ナザレトの工場—労働の神聖なるを悟らしめ、労働者の境遇を尊重する氣にならしめるのに、世の人の千言萬語よりも、この工場を一見せしめるのが幾倍も有効でせうか……

(2) 聖ヨゼフは權威を確立せられた—現代社會の最も大きな缺陷は權威を無視し、侮蔑することであります。

多くの人は神の權威を認めないで、それだけ神を蔑視して居る。

名あつて實なき信者、てんで聖會の掟に従ふを欲しない信者の爲に、聖會の權威は臺なしにされて居る。

家庭に在つては、子供が倒に主人公となり、父母の權威に反抗して居る。

この面白からぬ世相に直面せる我々は、何うしてもナザレトへ行き、權威の何たるかを確と突き留め、我々の意を權威者の意に服せしめることを學ばなければならぬ。ナザレトの聖家族に於て、徳の上から云ふと、第一がイエズス様、第二が聖母マリアで、聖ヨゼフは最下位に在つたのであります。然しイエズス様も、聖母マリアでも、聖ヨゼフを家長として、その前に頭を下げ、何事にも快く服従せられました。父の權威が十分に行はれ、妻子は完全にその權威に服従すると云ふのが、ナザレトなる聖家族の我々に示せる美鑑ではありませんか。

(3) 聖ヨゼフは家庭を復興せられた—家庭！これこそ社會の細胞、國家の起原であります。基督御降生前の家庭、殊に西洋に於けるその家庭の狀態は悲惨極まつたものでした。父は專制君主で、母は奴隸、子供の生命は毫も問題にされない、生かすも殺すも全く父の意の儘でありました。

今日と雖も、基督教精神の消滅し去ると共に、家庭は次第に瓦解を來し、昔の憐むべき狀態に逆戻りせんとして、あるのであります。強固な家族制度の上に立脚して居るニ云はれる我國、家族の前には、個人の自由も、名譽も猶且つ犠牲にして顧みないニ云ふ位にして居る我國に在つてすら、家庭の

土崩瓦解は日にまし甚しきを加へつゝあるのを見ませんか。

此時に當つて、聖會は理想的家長とも、萬世の鑑とも仰ぐべき聖ヨゼフの上に眼を注げと、我々に勧めてくれるのであります。

自分の擔當せる妻子の上より危険を豫防し、その危険が差迫つたと見るや、驟然起つて之を遠け、進んで彼等の必要を見計ふに云ふのが、聖ヨゼフの天職であつたのであります。

父母たるものは、どうぞ聖ヨゼフを仰ぎなさい……如何したらば家庭を立派に治めて行くこと出来るか、聖ヨゼフは必ずその方法をお諭し下さいませ。家庭に勞働、服従、愛が行はれるに、其處には必ず平和の風がそよ吹いて来る。延いては國家社會までが、その餘恵を蒙るに至るものであります。何うぞ皆さん、聖ヨゼフを鑑とし、併せてその御助を祈り、是非とも我々の家庭を、その美しい理想に近からしむべく努めようではありませんか。

天長節

(1) 今日是我々日本國民が慈父ミ慕ひ、大君ミ仰ぐ、天皇陛下の御誕辰、慶い、天長節であります。國民たるものは、宜しく心を合せ、聲を揃へて之を慶び、之を祝賀し、寶壽の萬歳を祈るに共に、また皇威のいよ／＼四海に洽からんことを冀はざるを得ないのであります。然し我々は日本國民た

ると共に亦カトリック信者である、カトリック信者たると共に亦日本國民である。この兩方面から、今日のこの御祝典を大に意義あらしむべく務めなければなりません。

(2) 日本國民として如何に之を祝賀すべきでせうか——禍殃でも幸福でも、對照物がなくては其眞相を判然ならしめること出来ない、雪の側に炭をならべてこそ雪の白きがいよ／＼鮮になるでございませう。それと同じく我々日本帝國の幸福を眞に理解するには、何うしても之の隣國の狀態と引比べて見なければなりません。隣りの海には荒ぶる大波が立ち騒ぎ、破れる船、覆へる船、沈む船が數知れずあり、爲に泣く聲、叫ぶ聲、助を呼ぶ聲に耳も破れんばかりであるのに、此方の海は油でも流したかの如く、細波一つ立たず、其上を微かな風が快く吹き渡り、風を含んだ眞帆片帆は滑るが如く往來し、鷗は浮み、魚は躍ると云ふ塩梅である、と致して見なさい。此方の海を往來する船人の幸福は、それこそ羨望に堪へない次第ではないでせうか。

我國と諸外國とを比べると、正しくそんなもので、なるほぎ學術の點から云ひ、富の方から見、軍艦大砲の數、商工業の發達、生活の程度の上から察しましたら、或は我國より幾倍も優つた國があるかも知れません。然し一たび眼を皇室の上に注いで御覽なさい。我々の戴いて居る皇室は、二千五百有年間、連綿として一度でも中絶したことのない、謂ゆる萬世一系の皇室であるのに、諸外國では幾度となく其皇室を變換へて居る。隣國支那の如きは、今日まで盜賊の親分であつたものが、明日は

南面して帝と稱すると云ふことも決して珍らしくはないのでありますが、終にはその皇室さへも打倒して、共和政體の國となして居るのであります。

(3) — なほ諸外國には、種々雑多な人種が混淆あつて居るので、それだけ言語も異り、風俗習慣も同じからず、全國民が一致して唯だ一人の心になると云ふことは容易に出来ないであります。然るに我日本國民は、最近帝國の一部を爲すに至つた樺太、朝鮮、臺灣等の住民を除けば、全く一種族を爲して居る。なるほど原は幾多の種族が混淆あつて居たのでせうけれども、二千五百有餘年の長い年月を経る間に全く融合つて一つになつて居ますので、北日本の人と、南日本の人と、北海道の人と、沖繩のひと、言語が通ぜぬ、腹が合はない、考へが喰ひ違ふと云ふやうなことが斷じてないのであります。諸外國では國家あつての皇室で、皇室はたゞ國家の爲に存すると云ふやうなものであります。我國では國家即ち皇室、皇室即ち國家云ふやうになつて居ます。謂はば皇室を中心として、全國民が悉く同じ流れに棹し、同じ方向を指して進んで居ると云ふやうなもので、色々の種族が互に反目をするなんて、そんなことは夢にもありません。是ればかりは何物にも代へ難い、我々日本國民の大幸福ではありませんか。

我々はこの慶い天長節に當りまして、此等の幸福をつくづく思ひ廻し、斯る有難い國に、又有難い御代に生れ出たことを厚く天主様に感謝すると共に、陛下を始め、皇室全体の上によく豊なる祝福を賜ひ、何時までも平けく安けくお守り下さいますやう、一心こめて祈らなければなりません。

(4) — 次にカトリック信者として、如何にこの天長節を祝賀せねばなりませんか—我々は日本人たると共に亦カトリック信者である。カトリック信者として、天主様の御教を信じ、その御掟を守つて居る。天主様は「汝父母を敬ふべし」の命じ給うた。この「父母」と云ふ語は、たゞ我々の生みの父母を指すのみではない、亦我々八千萬の國民を愛撫し、養育し、救護して下さいます。天皇陛下も、第一に我々が尊敬、愛慕し、奉るべき父母であられるのであります。陛下は實に民の父母、我々臣民を深く愛撫して、我々が衣食に差支へないやう、文字の讀めないものが國內に一人でも残らないやう、他國の輕侮を蒙らず、安々と枕を高くして居られるやう、何處へ行つても「我こそ日本人だ」の大威張りで歩けるやうに、始終御配慮遊ばさせ給ふのであります。

其上君たるものは天主様の御名代である「人各上に立てる諸權に従ふべし。蓋し權にして神より出ざるはなく、現に在る所の權は神より定められたるなり」(ローマ二以下)と聖パウロは曰はれて居ます。然らば、天皇陛下を敬ひ、愛し、之に従ひ奉るのは、取りも直さず、天主様を敬ひ、愛し、之に従ひ奉る所以ではありませんか。

(5) — 世の口さがなき連中は、我カトリック教を以て外國の宗教となし、それだけカトリック信者は愛國心に乏しいのだ等々善く出たらぬを陳べるのであります。それは固より言ふ人の思ひ違ひで、太

陽に内國の太陽と外國の太陽との區別なきが如く、神様にも日本の神様、西洋の神様と區別のあらう筈がなく、随つてカトリック教を奉じたからきて、愛國の熱を冷される様な憂は斷じて無い。況んや我々は、世間多くの人々の如く、理由も何も知らないながら、陛下を敬愛し奉つて居るのではなく、平生から右様な理山を十分に辨へた上で、敬愛の實を盡して居るのですから、その敬愛は猶更ら深く厚く、眞劍であらねばならぬのであります。殊に今日の如き慶い祝典に當りましては、衷心からの偽りなき喜びを表して、陛下の萬歳をお祝ひ申上げべきは云ふ迄もない所でありませぬ。

(6) 然しながら、たゞ「慶い、慶い」と祝ひ喜ぶだけでは聊か物足りない心持が致します。抑も我國は最近半世紀ばかりの間に、政治上にも、軍事上にも、教育上、商工業上にも驚くべき進歩發展を遂げて居ます。若し五十年前に死んだ人を墓の中から呼び起して、今の日本を見せましたならば、是が果して日本國でせうかと、目を圓くして怪むに相違ありません。明治の初までは「日本」云ふ國が極東の地に存すると云ふことを知つたものは極めて少數でございました。偶に知つて居る人でも、支那の屬國た位に考へて居たものでした。然るに天主様の御恵と、明治天皇陛下の御盛徳とによりまして、その小さな日本が、一戦して支那を破り、再戦してロシアに打勝ち、樺太を取り、朝鮮を併せ、押も押されぬ世界五強國の仲間入りをするやうになりました。

然れども是は物質的進歩でございまして、惜しい哉、一方の精神的方面は夫れに併行して進んで居ま

せん。餘りにも物質的文化と云ふ一面に力を用ひ過ぎて、精神的方面は多少お留守になつた氣味がありました爲か、物質的には今の如く長足の進歩を遂げた我國も、精神的にはむしろ退歩して参りました、徒らに身の奢や、肉の快樂や、そんなものにばかり耽り、健全な思想、勇壯な氣質、堅固な道徳は次第に影を薄くして参りました。今日の所謂思想國難と云ふものは、なるほど世界的不況、經濟界の動搖に基づくものではありませんが、然しまた一面には、宗教や道徳の腐敗、退歩、無氣力と云ふことも大に原因して居ると思はなければなりません。さすれば今日急務中の一大急務は、精神界の進歩を計り、日本帝國の基礎を固くして、陛下の大御意を安じ奉るに在りと謂はなければなりません。

昔しサロモンは富や壽や譽やを願はずして、智慧を願ひましたから、大に天主様の御意に適ひ、富も壽も譽も添へて興へられました。智慧！身を修め、徳を磨き、人の人たる道、基督信者、神の愛兒として履み行ふべき道、その道を悟り、之を實踐躬行するのは實に賢い智慧の業ではありませんか。我々もこの智慧を祈り、この智慧の業を勵みましたならば、また夫れによつて、一身、一家は勿論、國家の上に、皇室の上にも、神の豊なる祝福を呼び降す所以であります。我々はこの慶い天長節に當つて、それだけの決心をなしたいものである。また是非ともなさなければなりません。

聖母月

(一) 聖母月の心得

(1) 聖母月がまわりました。楽しいく、聖母月がまわりました。孝子はその母の祝祭日を喜び、何か特別の趣向を凝して母をアツミ言はせ、之を歡喜に躍り立たせようとするものであります。さればこの五月に當つて、我等の尊ぶべく愛すべく、力と云ひ、情と云ひ、殆ど限り知られぬ御母のめでたい祝祭たるこの五月に當つて、我々は如何なる工夫を凝して、聖母を驚かし、その御心を喜ばせ奉るべきでありますか。

(2) 先づ五月中は平生に優つて聖母を愛すべく務めませう—聖母は愛すべき御母であります。絶えず情の御目を開いて我々の身の上を打眺め、我々の入用を見計らひ、未だ願ひ出もしない先から、彼や此やと周旋して下さいます。年によつて聖母の愛が増したり減つたりするのでもなければ、月によつて聖母の情が冷えたり温まつたりする譯でもありません。一年三百六十五日、夜でも晝でも、同じ愛を以て、同じ情を以て、同じ親切を以て、我々を可愛がつて下さいます。聖母の御心には五月だから、六月だから云つて、別に異なる所はありません。でも子たる我々には果して何の異なる所もありません。

せんでせうか。

試みに思ひなさい。春の花でも秋の紅葉でも、照り輝く晝の太陽でも、冴え渡る夜の月でも、若し一生に、一度か二度かしか見られないものとするならば、人はどんなに驚きもし、感心もし、何時まで見ても見飽かぬ心地がするでございませうか。然し花にせよ、紅葉にせよ、日でも月でも、年々歳々之を眺めて、眺め慣れて了つた結果、格別珍らしいとも思はないのであります。聖母の御親切も夫と同じで、我々は始終その御恵の露に潤つて居ます。御情の雨に浸つて居ます。爲にだん／＼感じが鈍つて来て、今では早や何でもないもの、如く、否、寧ろ夫が當然すぎた當然だ位に考へる様になつて来て居ませんか。だから時には變つた事が起り、我々の眠つた眼を醒まし、冷えか、つた心を温めてもらふ必要があります。五月を以て聖母月と定め、之を全く聖母に献げて、その御光榮を歌ひ、その御情を讃め稱へ、熱く／＼聖母を愛し、以て一年中、聖母に戴いた御恵を感謝するに云ふ習慣が、信者間に起つたのも實に之が爲ではありますまいか。

(3) 次に五月中は、深く頼むの心を以て聖母に祈ることにいたしませう—母たるものは何時でも我子を愛し、之が世話を焼き、之に情を掛けたいと思つて居ます。然し特別の情、特別の親切になると、自分の誕生日だとか、病氣の全快祝だとか云ふ様に、何か特別の機會を待つて之を與へようとするものであります。

所て五月は聖母の月であります。全世界の子女が競つて御膝元に集つて来る聖母の喜ばしい大祝祭であります。殊に今は慶い御復活節でありまして、聖母は絶えず「天の元后喜び給へ」の歌はれ、御子の御復活を非常に喜んで居られます。折も折も我々が御前に集つて、心からその御光榮を歌ひ、その御喜びをお祝ひ申上げるのですから、聖母も必ず御満足に思召されて、如何なる願ひでも易々お聴容れ下さるに相違ありません。で今月ばかりは是非とも熱心に祈りませう。聖母の御情を御力とを思つて、疑はず懼れず熱心に祈りませう。心を改めなければならぬならば、必ず今月中に綺麗さつぱりと改め得る様、罪の機會に囚はれて居るならば、必ず今月中にその危い綱を切り棄てる様、誘惑を打破しなければならぬ、艱難を闘はなければならぬ、憂苦や悲哀や心配やを快く堪忍しなければならぬ、我親を、我子を、我夫を、我妻を、我親戚朋友を罪の中から救出して、善の道へ引戻さねばならぬならば、必ず今月中に其等の御恵を忝うし得る様に祈りませう。熱心に祈りませう。五月蠅と思はれるほど繰返し／＼祈ることに致しませう。聖母は五月蠅く願はれるのを何よりもお喜びになります。決してそれを御迷惑に思召し給ふ様なことはありません。

(一) 終に五月中は務めて聖母に則ることにいたしませう。聖母は美しい「正義の鑑」で、あらゆる徳に秀で給ふのですから、如何なる身分、境遇の人でも、之に則るこゝが出来ます。幼児も、青年も、處女も、夫婦も、鰥寡も、聖母の御鑑の前に立つて、夫れ／＼に心の顔が見える、何を削り、何を加へ、何處を改め、何處を飾つて然るべきか、瞭然と分つて来る。聖母は平生から「私に倣ひなさい。私を手本としなさい」と絶えずお勧めになります。然し五月中は、一層聲を勵まし、力を籠めて強く烈しく熱心にお叫びになるのであります。されば我々も殊更ら注意深い目を擧げて、聖母を仰視熱心な耳を欽て、そのお勧めを聴き奉ることに致したいものではありませんか。

聖母の祭壇に飾り付けてある色々々の花は、聖母の無罪の清さを、その御徳の美しさを語り、聖母の御前に點されてある燈明は、その御胸に燃立てる愛の焰を見せて居ます。で我々も聖母を愛したいならば、願ひの旨を聴届けて頂きたいならば、是非とも聖母に則らねばなりません。聖母の如く心を清くし、言葉を慎み、行爲を順良にし、進退動作、一つとして胸中に燃え立てる主の愛熱の反映たるざるなしと云ふ迄に至らなければなりません、さうならましたら、きつと聖母の御愛顧を忝うし、願ふ所は必ず聴かれ、望む所は必ず與へられるに相違ありません。

(二) 聖母の清淨に則りませう

(一) 聖母月となりました。めでたい聖母月となりました。百花は紅に、千草萬樹は緑に、ふうわり、白絹を引きはへた様な霞、お母さんの温かい手に撫でられる様な日の光、蝶々のひら／＼、雲雀のチチロ！すべてが聖母マリアの無罪の清さを、諸徳の光を、優しい御情を稱へて居るかの様では

ありませんか。で、皆さん、この楽しい五月を、この美しい聖母月をば心から祝し、口を極めて聖母の御名を稱へ、その美徳を仰ぎ、その御情を祈り、その御鑑に則りたいもむであります。我身までが花の春の如く、若葉の五月の如く、美しく照りはへ、若やかに甦りて、「斯母にして斯子あり」と云はれ得るに至りたいものではありませんか。

(2) 特に聖母マリアを清淨の典型と仰ぎ、その保護者と頼む様に致したいものであります……。當世の人々は得て淫蕩に流れ、放縱醜猥に奔りたがる傾きがあります。この惡弊を矯正し、神聖にして潔い、清淨無垢な美風を作るには、どうしても聖母を典型と仰ぎ、その御保護に頼るより外はありません。

聖母は實に清淨の典型であります。聖人等は口を極めてその心の清さを、その無原罪の御やどりを讚美して、「聖母は汚れなきもの、何處から見ても汚れなきもの、無罪なもの、極めて無罪なもの、瑾なきもの、何から云つても瑾一つなきもの、聖なるもの、あらゆる罪に至つて遠かれるもの、全く清い、全く汚されない、清淨と無罪の姿その物、美その物よりも更に美なるもの、艶その物よりも更に艶なるもの、聖その物よりも更に聖なるもの、たゞ獨り聖にして、魂も體も至つて美しく、すべての無瑾、すべての童貞美を遙に超越し、たゞ獨り聖靈のすべての聖寵の住居たり、神を除けば、たゞ獨り萬物の上に高く拔出で、ケルビンにもセラフィンにも超越し、諸天軍よりも美しく、華かに、神

聖にして、天上の聲も地上の辭も十分に之を讚美するに足りないのである」等言つて居られます。

(3) 兎に角、聖母は清淨の典型であります。天上天下の萬物が悉く舌になつても、その清淨の美を稱讚するには足りません。然し聖母は清淨の典型たると共に、またその保護者であります。至清至潔の聖母にたいする信心は、人を清淨ならしめるに與つて大に力あるものであります。然り、聖母は無原罪の聖母にたいする崇敬を以て男子を教育し、以て女性を相當に尊重せしめ、女子には己が品位を認めしめ、決して男子の玩弄物を以て甘んずべからざる所以を悟らしめました。

殊に青年處女を激勵して、身も心も清淨無垢に保たしめるのに、聖母崇敬は如何に効果著しきものでありませうか。青年時代は男女何れも意馬心猿の暴れ出す時であります。情慾の盛に燃え狂ふ時であります。愛情が目醒めて來る時であります。動もすると人を盲目になし、氣狂ひになし、亂痴氣になし、前後の考へもなく、左右に顧慮する所もなく、父母教師の諫言も、忠告も、世間の物笑ひも一切耳に入れないで、不潔な泥の中へ跳り込まさうとする時なのであります。

この恐るべき大暴風の中に、よく己を制し、固く志を操守つて失はしめず、身も心も清淨無垢に保たせ得るものは、たゞ清淨の鑑たる聖母マリアではありませんか。その聖母マリアに對する熱い信心、誠意からの信心ではありませんか。聖母を平素の理想と仰ぎ、日夜その美しい理想に近きた

き青年處女せいねんじょなるこゝ出来るのは、疑うたがひを容れない所ところであります。

(1) — この慶めでたい聖母月せいぼげつに當つて、我々われらの希望する所ところ、眞正ほんじょうなキリスト教徒きりすときょうとのあこがれとする所ところは、實じつにそれであらねばなりません。

要するに、我々われらはこの慶めでたい五月ごがつに當つて、毎晩まいばん多數相率たすあひひらひて聖母月せいぼげつのお務つとめに與り、聖母せいぼの御像ごさうの前に跪ひざまづき、その御光榮みさかきを歌うたひ、御惠みあはれを感謝かんしやし、子たるの情じやうを盡つくしませう。然しかしたゞ聖母月せいぼげつの御務ごつとめに與り、その御光榮みさかきを歌うたふだけでは足りない。出来るだけ聖母せいぼの御德ごとくに則り、別わかけてその清淨しょうじやう無垢むくを鑑かんとして、身みを花はなとなし、心こころを芳香かうかうとなし、我々われらの態度たいどが直ただに聖母せいぼの御光榮みさかきとなり、御惠みあはれの感謝かんしやなる様よう、務つとめたいものであります。

(三) 聖母月の心得

(1) — 五月ごがつは聖母せいぼマリアに捧たもげられた月つきであります — 全世界ぜんせかいの信者しんじやは、何れも本月中ほんげつちゆう、平生へいせいに倍ばいして、聖マリアを尊敬愛慕そんけいあいぼするのであります。聖母せいぼの最潔さいせつき聖心せいしんに奉獻ほうけんせられてゐる日本にほんの信者しんじやは、一層いちじやうの熱心ねつしんを表し孝子かうしの眞情しんじやうを披瀝ひれきせねばなりません。實じつに聖せいベルナルドも曰たまへる如く、聖母せいぼは「天主てんしゆの至聖しせいなる傑作けつさく」で、如何いかに鑑賞かんさうしても鑑賞かんさうし盡つくせぬ品位ひんみと徳性とくせいとを具そなへさせ給たまふのであります。天國てんごくの比類なひひなき善美ぜんびを觀みて居られる大天使だいてんしガブリエルでさへ「慶めでたし聖籠せいろうに満みてる者ものよ」讃め奉つたので

ありますから、我々われらも及およぶ限り、特とくに今月中こんげつちゆう、聖母せいぼの品位ひんみ、特權とくけん、御德ごとくを默想もくさうし、心こころを傾かたけて聖母せいぼを敬うやみ愛あいし、之これに信賴しんらいしたいものであります。

(2) — さて聖會せいけいは何故なにゆゑ五月ごがつを聖母せいぼに捧たもげたのですか — それは先づ全世界ぜんせかいに亘わたり — 少くも北半球きたはんきゆうでは — この月つきほど自然界ぜんぜんかいが最も美しく装まはれる月つきはないからであります。

園そのには、薔薇ばらや、芍薬しやくやくが豊艶ほうえんを競きひ、野のには千草せんそうの花はなが色いろとりくくに咲さきほころび、遠近ちんちんの山々やまは麗うつくかな陽光ひのひかりに新鮮しんせんな緑衣りよくを輝かがやかして居ゐます。聖會せいけいはこの自然界ぜんぜんかいの美うつくしさを聖母せいぼの御眼ごがんの前に展開てんかいして、その聖せいい微笑みせうを得えたいとするのであります — アベルが見事みごとに育そだつた羔かひを奉獻ほうけんして、天主てんしゆ様に嘉納かのうせられた如ごとくに — 加之た、天然てんぜんの美うつくしは自ら人の心こころをあげて天國てんごくを慕したはせ、浮世うきよの花はなは永遠えいゑんの太陽たいやう、その太陽たいやうの光ひかりに花はなが咲さき匂におふ諸聖人しよせいじん、特とくに諸聖人しよせいじんの元后げんこうたる聖母せいぼマリアを仰あががせるものであります。なほ「薔薇ばらの花はなは聖母せいぼの愛あいを、百合はくげの花はなはその潔白けつぱくを、橄欖かんらんの花はなはその柔和にわわを象かたぞ。聖せいアンブロジウスが云いつて居ゐられる如く、聖母せいぼの御繪ごゑ、御像ごさうの前に献さげる千紫萬紅せんじばんこうは、その御靈魂ごれいこんに咲さき溢こぼれて居ゐる聖德せいとくを偲しのばせるのであります。

次に五月ごがつは誘惑ゆうわくの多い月つきだからであります。然しかり、五月ごがつは生命せいめいの最も盛さかんに躍動やくどうする月つきで、樹液じゆえきが流動りゆうどうして花はなとなり、實みとなり、枝葉しやうの伸長しんちやうとなるが如く、人體じんたいに於おいても血液けつえきは脈々みやくやくとして流ながれ、特とくに青少年せいしやうねんの心身しんしんに異常いじやうの變化へんかわを來きたし、種々しゆくしゆく邪慾じやくよくの發動はつどうを促うながし始めるのであります。斯時このときに當あつて、露つゆは

かりも世の汚濁に觸れ給うたことのない聖母を仰ぎ、その慈母たるの情に倚り頼むならば、傲慢、憤怒、肉慾等の挑発が如何に激しくとも、これをよく斥けて、謙遜、柔和、清淨を操守り、身を高潔に保つてこが出来るのであります。

(3) 聖母月の起原——この勤行は十九世紀の初葉、ローマはイエズス會の學校に始まつたのであります。同會のラロミア師は校内に青年會を組織し、之を無原罪の聖母の御保護の下に置きました。五月の中その御保護を一層豊かに蒙れる様、毎日放後課、會員を集めて説教をなし、聖歌を歌ひ、祈禱、就中コンタスを誦へさせました。それは一八一二年のことでしたが、其後この勤行は迅速にイタリヤ、フランス、スペインに弘まり、一八一五年には教皇ピオ第七世の認可があつた。同時に毎日の信心を勤める者に三百日の分贖宥と、月一回の全贖宥が與へられたのであります。それから次第に全世界に普及し、今日は何れの國でも、香床しき白百合は、聖母の祭壇に手向けられ、信者等は先を争つて聖母の頌榮を歌ふことになつて居るのであります。

(4) 本月中の心得——「天主の至聖なる傑作」にて在す聖母はまた、忝くも我々の靈的御母でもあります。イエズス様は十字架の上から御母マリアと愛弟子ヨハネとを御覽になり、御母に向ひ、「婦人よ、是れ汝の子なり」と曰ひ、次に聖ヨハネに向ひ「是れ汝の母なり」と仰せられて、親子の縁を結ばせなかつたのであります。此時ヨハネが全人類の代表者であつたことは、聖會の教へる所であります。

我々は衷心よりこの聖なる縁を天主様に感謝すると共に、聖ヨハネが其時より「イエズスの母を我家に引取つた」如く、聖母マリアを我々の家庭にも、心の裡にも迎へて、之に尊敬と愛と信頼とを表し奉る様、務めなければなりません。

(5) 謙敬——善良なる天性を禀け、種々の長所、美點を備へ、偉業を成就し、大功を立てた崇高なる人格者に接すれば、人は誰しも肅然として、襟を正し、これを尊敬するものである。今聖母の聖心は無原罪の御やさりによつて、玲瓏一抹の陰翳なき玉の如く、其身は聖寵に充滿し、救世の大事業はその御協力を以て完うせられたのであります。あ、如何に高く、清く、聖く、偉大なる人格者に在すよ。加之、聖母は天使の元后、天主の御母に在す。愛らしく咲きほころびた花も、聽ては萎れて散り失せる、我々の運命もこの小さな花のやうであります。然し慈愛深き御母マリアの御前に頂を垂れて、幽かな祈の香を献ぐる可憐な花となるならば、祝福の御手が我々の上に翳されるのは疑を容れざる所であります。

聖母を特に崇敬せし聖ベルナルドは、その御像や御繪の前を通る毎に、「慶たしマリア」と讃め奉るのを常とするのであります。或年ベルギー國アフリゲム修道院を訪ひ、聖母の御肖像の前で不斷の如く「慶たしマリア」と唱へ奉ると、聖母は突然「慶たしベルナルド」と對へて、これを賞し給うた。聖母は同じ様に我々の貧弱な崇敬に對しても天より對へ給ふに相違ないのであります。

(一) 愛—肉身の母が我々に自然の生命を與へ、我々を愛護、養育してくれるやうに、聖母マリアは「天主の聖寵の御母」に在して、我々に超自然の生命を與へ、我々の上に御眼を注ぎ、愛し、慈み給ふのであります。この貴き母性愛に報い奉るが爲、我々も聖母を仰ぎ、子たるの愛を表はし、聖マリアの連禱を誦へて「天主の聖母、基督の御母、天主の聖寵の御母……」と申上る時、一層愛情を起したものであります。又本月中は夕の祈禱の中ばかりでなく、日中も屢々これを誦へたい。幼き子供の些細な善意にも頗る敏感なのは母であります。聖母の御心も矢張りその通りで、次の聖ヴィアンネー傳中の逸話はよくこれを證明して下さいます。フランスのナンシー市の一婦人は無信仰な夫の改心を祈り、折々は言葉を以ても信仰心を喚起すやう努めるのでありましたが、年も半の六月、その夫は急病の爲め、秘蹟も何も受けないで、そのまゝ死んで了ひました。彼女は痛心、哀愁の餘り、寢食も常ならず、遂に自らも病氣になり、家族に轉地療養を命ぜられ、南地中海沿岸へ旅立ちをし、リオン市を通る序に、切ない心を抱きつゝ、聖ヴィアンネーを訪問しました。聖人は未亡人を見るや否や、「貴方は悲みに沈んで居ますね。貴方は早やあの花束、あの聖母月中、毎日曜日献げた花束のこころをお忘れになりましたか。天主様は貴方の祈を聞き、聖母を尊んだ御主人を憐み下さいました。御主人は死去の瞬間に痛悔せられ、御靈魂は今煉獄に居られるのです。我々の祈禱と善業を以て救ひ出させよう」と申されました。夫人はこれ聞いて深く驚き入りました。なるほど夫は死去の前月、即ち五月中、

毎日曜日、郊外散策の折、自ら花を摘んで持ち帰り、之を花束にして彼女に與へ、聖母の小さな祭壇に捧げされたのであります。

本月中、我々もなるべく聖堂内に行はれる聖母月の勤に與り、又自宅にも聖母の御像や御繪を飾り、美しい花を献げ、家族打揃つて、御母を讃美したいものであります。

(7) 信頼—我々の聖母に對する尊敬と愛とは、信頼を伴はなければなりません。聖母は子たる我々の安和と幸福とを御心にかけて、愛育の御手を休め給はぬのであります。で我々の聖母にたいする態度は、世の人が英雄を尊崇するが如く、藝術家が名畫を愛賞するが如くでありたいものであります。彼等の尊崇する英雄は、暗い冷たい墓穴の囚人であり、名論は我心を知らぬ巨匠の餘喘にすぎない。聖母は生きて在し、我等を見、我等に聞き、保護と慰安とを與へ給ふのであります。

マリア會の創立者シヤミナード師は「この世の荒海を渡る我々の靈魂の水先案内者はイエズス様であり、その船長はマリア様である」と申されて居ます。人生は胸く、危難の波は高い。誠に「板子一枚、下は地獄」の感なきを得ない。けれどもイエズス様は御自分の神聖な言行を以て、天國を指示し、水路を定め、秘蹟を以て力を與へ給ふ。聖母は聖寵の分配者、キリスト信者の扶助に在して、天國を見失はず、水路を誤らないやう配慮し給ひ、不幸にして罪の深みに沈み、誘惑の暗礁に乗り上げることがあると、救ひの板となり、助の綱となり給ふのであります。

聖母は靈妙しくも、御在世中、人生のあらゆる喜憂禍福を體驗し給うたのでありますから、如何なる境遇の人も、己が心中を聖母に訴へて、理解と同情とを求めることが出来ます。少年少女は聖ヨハキムと聖アンナの膝の上なる聖母を、青年處女は最も潔き處女たる聖母を、多忙になやむ中年者は、家政にいそしみ給ふ聖母を、頼りなき老人は寡婦たる聖母を思ふがよい。其他、聖マリアの連禱を味讀すれば、各種各様の境涯に保護者と頼み奉るべき聖母を見出すであります。

先づ人の父たり母たる者は、「キリストの御母」たる聖マリアを有して居ります。聖母は立派に養育の重任を果し給った。聖ルカ福音史にはイエズス様の御發育を述べて、「斯くて、イエズスは智慧も齡も、神と人とに於ける寵愛も、彌増し居給へり」と記してあります。この一句は、よく教育の理想を悉して居ると云ふものではありませんか。

さて聖會は洗禮の時、嬰兒の靈魂に信仰、即ち超自然的生命の原動力を與へて、父母にかへし、その信仰を擁護し、之を助成するの重任を父母に負はせるのであります。故に父母たる者は、己が責任の重大なるを心に刻み、教育の理想を片時も忘れてはなりません。

現教皇陛下は特に教育に御關心あそばされ、屢々全世界の人々、就中信者の注意を喚起して居られます。我々は特にキリスト教的教育者としての自覺を新にしなければなりません。別けても誘惑の多い、所謂人生の動搖期にある子女を有する両親は、誘惑を未然に防ぐやう配慮すると共に、之が指導

誘掖を怠りてはなりません。

次に誘惑にかゝつて居る者は、「良き訓誨の御母」、「上智の座」なる保護者を有します。最近、聖人に列せられ、聖會博士を諡られた聖人アルベルトは、十六才の時、修道者を志願して、ドミニコ會に入られたが、學問の出來が悪く、遂に落膽して、一夜、窓から梯子を卸し、逃去さうとしました。すると突然聖母が梯子の上に出現になり、「アルベルト、汝は何になる心算であるか」お訊ねになりました。アルベルトは、卒直に事の次第を申述べると、聖母は「汝の學問さういふのは、神學であるか、或は自然哲學であるか」と問はれるので、アルベルトは自然哲學なる由を答へました。すると聖母は「汝の望を叶へて上げよう。汝は名高い學者になるであらう。然しこれは全く我が汝に授ける資たる證據として、汝は晩年に至つて突然その學識を失ふであらう」云々仰せられました。果してアルベルトは、當世にその名を高く謳はれる程の大學者となりましたが、逝去前三年、ケルンにて説教中、急に智慧が朦朧、云ふ所を知らず、漸く聖母出現の次第を述べて、其場を去られた。と云ふことであります。

勿論、聖母は誘惑の時、我々に出現し給ふことはあつまいが、それにしても愛護を垂れ給ふことは間違のない所で、聖母は各人各様の誘惑に對して、光となり、力となり、勇氣、忍耐とを賜ふのであります。

又不幸にして、罪に陥り、良心の苛責に悶へ、イエズス様の御怒を恐れるならば、「罪人の依託」なる聖母に依り頼るがよい。聖母はその優しい御執成を以て、御子の義憤を宥め、靈魂の亂を鎮め、救済を得せしめ給ふのであります。

尙又、我々は心の悩みの外に、肉身上の病苦、患難に泣くこころがあります。誠に人生は喜びの中の涙であり、涙の中の喜びであります。然し聖母は「憂人の慰藉」であり、「病人の恢復」であります。ルルドの出来事を以ても、聖母の慈悲深き御心情を伺ふことが出来ます、聖母はこゝに於て憂愁を消し、艱苦を救ひ、病患を癒し給うて居られます。

更に聖母は我々の生命の終焉を保護し給ふ。聖ヨゼフの臨終の床に付添ひ、御子イエズス様と共に一切の事に心を配られました聖母は、「今も臨終の時も祈り給へ」熱心に祈る我々を扶助け給はぬはずでありますか。これに就ての聖母の御約束は、信者のよく知る所で、聖母の下僕は亡びないのであります。斯くて「天の門」たる聖母は、天國の扉をその下僕の爲に開き、永遠にその光榮となり給ふであります。

幼きイエズスの聖女テレジアは、病床にあつて度々聖母の御像をながめ、清い慰めを覚えるのであります。一夜彼女が叫んで申しました。「あ、私は如何にも烈しく聖母マリアを愛します……。聖母は時として、その美德に倣ふ事が出来ないほど優れて在すかの如く人々に見做され給ふのです。然し却

つて之に倣ふ事が出来るやう見做さねばなりません。聖母は女王よりもむしろ慈母であります。彼の太陽が出るこゝ、凡ての星の光を覆ふが如く、聖母の御光榮は諸聖人の光榮を覆ふといふ事を聞きました。是はさうも合點のゆかぬ言葉であります。慈母にして、小兒の光榮を覆ふとは、如何にも變であります。私は之に反對に、聖母は諸聖人の光榮を大に輝かし給ふといふ事を信じます。味ふべき言葉ではありませんか、兎に角、我々は五月中、熱心に子供心の誠を盡して聖母を尊び、愛し、之に依り頼みたいものであります。

吾主の御昇天

(一) 主は何の爲め昇天し給うたか

(1) イエズス様は御復活後、暫く現世に留りて、弟子等を慰め、教へ、導き給ふのであります。が、四十日目になると、彼等を伴つて橄欖山に登り、最後の暇を告げ、祝福を與へて、徐々天にお昇りになりました。弟子等は嬉しいやら慕はしいやらで、一心に天を仰視して居ると、やがて一叢の雲に包まれて、御姿は見えなくなりました。見えなくなりましたが、猶慕はしさの餘りに天を打眺めて居たもので、折しも白衣を纏へる二位の天使が顯はれて、「ガリレア人よ、何ぞ天を仰ぎつゝ、立てるや、

主は何の爲め昇天し給うたか

汝等を離れて天に上げられ給ひし此イエズスは、汝等がその天に往き給ふを見たるが如く、復斯の如くにして來り給ふべし」と言ひましたので、弟子等は漸く山を下つてエルザレムへ還りました。

(2) —さてイエズス様は何の爲に天にお昇りになつたのでせうか。それは第一我身に光榮を享けるが爲でした。イエズス様は天の高きを降つてベトレヘムの馬屋に生れ、ナザレトに賤しい職業を營み、終にカルワリオは十字架の上に御命を果されたのですが、其間に嘗めさせ給うた艱難、苦勞、侮辱、いつたら、心も言もなかくに及ぶ所ではないのであります。さすれば今日その報を受けさせ給ふのも當然なことではないでせうか。現世で賤められ給うただけ、光榮を享け給ひ、今まで下へくお降りになりましただけ、今は上へ上へと擧げられ給ふのであります。今日我々は心を傾けて主の御昇天をお祝ひ申上げねばならぬ、諸の天使聖人等と心を合せてその御光榮を歌ひ奉らねばなりません。が、又それと共に、我々もイエズス様の如く天に昇つて、光榮を忝うしたい、福樂を擅にしたいと思はゞ、亦イエズス様の如く、現世で艱難苦勞を堪へ忍ぶ覺悟であらねばなりません。「キリストは此等の苦を受けて、而して己が光榮に入るべき者ならざりしか」(ルカ二六)と自らも曰うて居る。兩手に花は握られぬ、現世でも愉快にしよう、後の世でも樂まう云ふは、餘りにも虫の善い話であります。

(3) —イエズス様の天に昇らせ給うたのは、我々の爲に處を備へて下さる爲でもありました。「我、汝等の爲に處を備へん」と明かにお約束になりました。イエズス様がこの塵の世に降つて、あらゆる

苦を耐へ忍び、十字架の上に御死去なさいましたのは、我々を天に昇せる爲でしたから、今天にお昇りになりましても、決して我々のことをお忘れになりません。御自分の蒙られた御傷を御父に示して、我々の爲に傳達いで下さいます。「私は此人の爲に是れほどまで苦みました、是れこの通りに傷を蒙りました、此苦に對しても此人を憐んで下さい、此傷に對しても此人にお赦し下さい」と祈り給ふのであります。夫れのみならず、イエズス様は御約束の如く、我々の爲に處を用意して下さる、我々の上に始終御眼を注ぎ、我々の行ひます善業や、忍びます艱難苦勞やを一々拾ひ上げて、我々の座を飾る眞珠もダイヤモンドもして下さる、随つて我々が一つの善を行ふと、一つの眞珠が増し、一たび艱難、苦勞を堪へ忍ぶと、一つのダイヤモンドが殖える、善業が多ければ多いほど、眞珠の飾も多くなり、艱難苦勞を堪へ忍ぶと、この數重なれば數重なるほど、ダイヤモンドも加はる譯であります。だから我々は何時も眼を上げて天を眺め、罪人は「自分の爲にかゝる傳達者が天に在す」とこを思つて、頼母しい心を起し、善人は一寸した善を行ひ、一滴の汗を流すにしても「是れは天國の座を飾るべき眞珠だ、ダイヤモンドだ」と思ひ、喜んで之を耐へ忍ぶやうにせねばなりません。

(4) —イエズス様の天に昇らせ給うたのは、我々の心を現世より引離す爲でもありました。もしイエズス様が何時迄も現世にお留りになりましたら、人は天國を忘れて現世のこまばかりを思ふやうになつたでういませう。現に弟子等の中にさへ、御昇天の其日迄も、イエズス様が現世の王となり給ふも

主は何の爲め昇天し給うたか

の如くに考へて居るものがありました位……兎に角、イエズス様は我々の心を高く引上げ、天上を望ませる爲に、天にお昇りになつたのですから、我々は今より絶えず天を眺めることにせねばなりません。我々の爲に現世は旅の空で、眞の故郷は天國である、天には父のイエズス様も、母のマリア様も、兄弟たる天使聖人等も在す、天には云ふに云はれぬ幸福が漲り、快樂が流れて居るのですから、一日でも忘れてならないのは天國であります。

(i) 遠い外國に旅をして居るものは、風の朝にも雨の夕にも、始終自分の國を思ひ、自分の家を慕ひ、旅の空で幾ら珍らしい、楽しいものを見聞きしても、夫れで自分の國や自分の家を忘れるものでない。その外國の語や風俗や習慣やは、自分の爲には何もなく變挺で、何うしても自國のそののやうにはない、と感ずるものである。然らば我々も幾ら現世で幸福が得られようと、快樂が味はれようも、夫れに心を奪はれて天國を忘れてはならぬ。幾ら此世に親しい友が出来ても、夫れに曳かされて、天の父母兄弟を懐しがらぬやうになつてはならぬ、此世の人の言ふことは、此世を愛する人のすることは、何うもそれは外國の語、外國の風俗、習慣で、自分には全く陳ブン漢だ、何が何やら、さつぱり分らない位にしなければならぬのであります。

唯だ一通りの旅人ではない、金働きの爲に外國へ往つて居る人ならば、出来るだけ早くその金を働き出して歸國したいと思ふものである。父母なり、兄弟なりも、亦屢々書面を送るか、傳言をするかでありませぬ。

して、「早く成功して歸れ」と勸めてくれる。旅人の身に取つて、其書面を読み、其傳言を聴くのは何よりの樂で、少しでも長らく書面を受けない、傳言も耳にしないと、云ひ知れぬ寂寞さを覺えるものであります。

我々も同じく然うで、此世に來たのは救靈を働き出す爲であります。そして我々の爲に説教は天主様の御傳言で、宗教書はその御書面ですから、我々は説教を聴いたり、宗教書を讀んだりするのを何よりの樂とし、暫くでも讀みもせず、聴きもしないで居ると、何だか言ひ知れぬ寂寞さを感ずる位にならなければなりません。

(c) 若しそれ外國に苦勞をし居る中に、懐しい父母の寫眞か、何かの記念品かでも手に入るならば、心は何時の間にか我親の膝下に馳せ行き、之と親しい談を交へるかのやうな思ひがして、身は遠い外國に在ることすら忘れるやうになるでういませう。イエズス様が我々にお遣し下さいました聖體の秘蹟は、たゞ懐しいイエズス様の寫眞たり、記念品たるに止らずして、實にイエズス様御自身であるから、我々は成るべく屢々この聖體を拜領し、思も望も愛情も残らずイエズス様に獻げて、口にはイエズス様の聖名を誦へ、心にはイエズス様の愛を思ひ、之によつて浮世の財や樂やを輕じ、之によつて身に降りかゝる艱難苦勞をも耐へ忍び、之によつて益々罪に遠かり、いよく善に親み、一度は天の御國に昇るの幸福が得られるやう、努めなければなりません。

主は何の爲め昇天し給うたか

(二) 心の昇天

御主は御昇天になりました。我々も一度は必ず昇天しなければならぬ。ですが死後天に昇るに堪ふべきものとなるには、今の中に心の昇天をする必要がある。然り、基督信者の生活は不慮の昇天であらねばならぬのであります。

(1) 基督信者の生活は精神の昇天であらねばならぬ—精神の昇天とは、つまり思を馳せて天に昇ることで、基督様も「汝等先づ神の國とその義とを求めよ」(マテ五)とお命じになりました。何はさて措き、先づ天國と、その天國の門を開く爲の鍵も謂ふべき徳を思へ、云ふ意味ではありませんか。それは亦當然のことで、我々がもしこの世の爲に造られたものとするならば、専らこの世のことを思ひ、この世の爲に働くこそ然るべきであります。然し我々の精神や感情や内心のあこがれは、絶えず我々を高く世物の上に引き擧げ、この世の何物たりとも決して我々を満足させ得るものでない。警告して居るのであります。實際、不滅な靈魂、神がその俤を刻み付けて置かれた不滅な靈魂に取つては、財寶や、名譽や、快樂や、そんな物が果して何でよいませう……。

(2) 基督信者の生活は情の昇天であらねばならぬ—聖アウグスチヌスの曰はれた如く、主は天にお昇りになつたのですから、我々の心も共に天に昇らなければならぬはずでせう。我々の實の在る處に

心もまた在る。我々の心 即ち我々の感情も、願望も、愛もまた其處に在るのが當然でせう。

今我々の實は何處に在りますか。この世—この世の實や、樂みが如何に大きいにしても、我々の心からすると、限りもなく小さいのじやありませんか。何うして之を實とするに足りませうでせう？。

だから我々は斷然この世より心を解脱させねばならぬ。御昇天は全く解脱の祝祭であります……然らうです、我々の實、眞の實、鏽も蝨も喰ひ壞らす、盗人も穿たず、盜まざる眞の實は天國に在り、天主様であります。言ふべからざる榮福を備へて、選を受けし人々をお侯ちになつて居る天主様それ自身であります……ですから、我々はこの唯一、眞實の實を愛し、心より之を望み、之を冀ひ、之に憧憬される様に致しませう。

(3) 基督信者の生活は善業の昇天であらねばならぬ—なるほご我々は思を以ても、情を以ても、天に昇らねばならぬが、特に善業を以て、善業を梯子として天主様にまで辿り着く様、務める必要があるのであります……兎に角、救靈を得たい、天に昇りたいと欲せば、徳の業を行ひませう。我々の師にして且つ君にて在すイエズス、キリスト様の御鑑に則りませう。イエズス、キリスト様の謙遜、その柔和、その忍耐、その苦行の精神、その博愛、御父の御光榮を揚げ奉るべくお務めになつたその奮發心、是等はすべて光榮の座に就きたいと欲する人に必要缺くべからざる裝飾であります。鷲が自ら籠を示してその雛を飛ばせ、高く、天上に舞ひ擧らせるが如く、御主もその御鑑を以て我々の心を

引立て、地上の物を離れて、天上に翔け上らせなされるのであります。
 結論—要するに基督信者としての崇高なる自己の使命に相應しい、我々の頭と仰ぐキリスト様に相應しい生活を営まねばならぬ。我々は神の子である。天に昇りませう。我々の思ひの翼に乗りて天に昇りませう。情の炎々たる焔に煽られて、天に舞ひ上りませう。善業を梯子とし、絶えず神の御國を指して昇りませう……。

聖 靈 降 臨

(一) 聖靈を受け奉る爲の準備に就て

イエズス様は御昇天の際、弟子等に聖靈を約束して、「我は父の約し給へるものを汝等に遣はさん」と。汝等天よりの能力を着せらるゝ迄、市中に留れ」之曰つて置かれました。父の約束し給ひし聖靈を汝等に遣はすから、其聖靈を戴き、天よりの能力、即ち聖靈の力を蒙る迄は靜に市中に留りて、その準備をして居るやうと命じ給うたのであります。使徒等はこの御命令に従ひまして、九日間と云ふものは、靜な一室に籠つて、熱心に祈り、聖靈の降臨を俟ちました。我々もこの數日間、使徒等に倣ひ、聖靈を受け奉る準備を急がなければなりません、それには

(1) 聖靈の御氣に召さないものを遠ける必要がある—聖靈は聖なる神様で、何よりも罪をお嫌ひになるのですから、聖靈に降臨して戴きたいと思はば、罪を避けなければならぬ。罪のある靈魂は、天主様の御眼には如何にも厭らしく、憎々しく映るのであります。天主様は苦に沈んで居る人や、誘惑に悩まされて居る人や、悲み嘆いて居る人やを愛し憐み給ふのですが、然し御自分に背き、冒瀆を加へる様な人を愛するを得給はぬ。我々の身は聖靈の住み給ふ神殿である。極めて清く美はしくなければならぬのに、もしや大罪でも犯した日には、この聖所に不淨な惡魔を引込んで住はせるのであります。幸ひ大罪ではない、小罪のみに止るにせよ、猶それによつて、心の家は汚れ、取亂され、聖の聖なる天主様の御住ひになるのは何うも適しからぬ様になる。そこで何人しも胸に手を當て、篤と之を調べ、大罪を犯して居ても、小罪に汚れて居ても、早く之を痛悔、告白し、立派にその心を掃除して、清淨無垢みなさなければなりません。

(2) 一次に聖靈は餘りに浮世の事務に耽溺む心をお嫌ひになる。浮世の財や、譽や、樂やと云ふものは、たゞへそれが直に罪云ふ譯でないにしても、其等に心を奪はれて了ふと、聖靈は喜んでお這入り下さらぬ。そんなに色々の事物が盛に空騒ぎをやつて居る心には、喜んでお住ひにならない。だから聖靈を受け奉るには、使徒等のやうに、なるべく心を靜にしなければならぬ。固より我々とても此世に住んで居る以上、浮世の事を思はぬ譯には行かないが、せめて朝晩になりとも、靜に天主様のこ

聖靈を受け奉る爲の準備に就て

を思ふやうにし、仕事をしながらも、騒がしい中に出て居る際にも、時としては天主様のことを思ひ出すやうに致しませう。無駄遊びだとか、役にも立たぬ饒舌だとかを避けて、ちつと天主様の御恩恵やら、自分の罪やらを考へるならば、心を飾り立て、聖霊のお住居に相應しき家となすことは、さして六ヶしいものではありませんまい。

(3) さうした上で、聖霊を引寄せ奉るだけの工夫をせねばなりません。使徒等は常に心を静かにし給うたばかりではない。熱心に祈られました。國王が臣下の家に行幸になります時は、必ず色々の恩賜を下さる。聖霊は王の王にて在し、我々に御降臨になりました上は、如何なる恩寵でも、豊に惜氣なくお與へ下さるに相違りませんが、然し我々の方で、熱く望み、速りに願ひ出るのを俟つて然る後、お與へ下さるのであります。「汝の口を擴げよ、我之を満さん」と云つて居られる。我々が口を開き、心を擴げて熱心に祈りますと、聖霊も夫れに釣合はせて聖寵を賜ふと云ふ意味ではありません。考へて見ますと、我々には聖霊の賜が大に必要であります。我々は屢心の眼が眩んで、眞の幸福を偽の幸福と見誤り、偽の財を眞の財と思ひ誤る、天國と此世と、終りなき樂と一時の儂い樂とを取違へるやうなことが往々ありますから、是非とも鋭智や、明達や、知識の賜を戴いて、自分の目的は何んであるか、何の道から進んだら、安穩に目的の彼岸に到達すること出来るかと云ふことを悟らなければなりません。猶又目的は分つて居る、道も辨へて居ながら、力が弱い爲に、誘惑

の激しい爲に、その分つて居る目的に向つて、その辨へて居る道を進み得ないと云ふ場合も少くはありませんので、是非とも剛毅とか、孝愛とか、敬畏とかの賜によつて、力を附けられ、天主様を愛し、罪を恐れるの念を深くして戴く必要があるであります。されば我々も使徒等に倣ひ、この幾日間はなるべく熱心に祈りませう。朝の祈を熱心に誦へ、ミサを熱心に拜聴して、「心の眼を開けて下さい」と祈り、夕の祈を怠らず申上げまして、「力を附けて下さい、主を畏れ敬ふの念を深くして下さい」と嘆願いたしませう。

(4) 使徒等は聖母マリアと共に祈られました。我々も聖母の心を合せて祈りませう。殊に今は聖母月であります、なるべくそのお勤に與りまして、聖霊を受け奉る準備をさせて下さい、と聖母に嘆願いたしませう。

終に聖霊は愛の神様であります。彼の柔和な鳩に擬らへなざるほかに、平和を好み給ふのですから、聖霊を受け奉るには、何うしても心を一致和合させねばならぬ。お互の間が離れんとなり、相怒り、相憎み、誹り合ひ、恨み合ふ、と云ふやうになつて居ては、到底愛の神たる聖霊を忝うすること出来る筈がありません……

(一) 聖靈降臨

(1) 聖靈降臨は主の御教が始めて世界に宣傳され、聖會の創設された記念日、實に聖會の紀元節なのである。我々は心をこめてこの記念日を祝し、併せて聖靈の賜を豊に蒙るこゝが出来る様、努めなければなりません。

抑も聖靈は天主の第三位に在して、御父も御子も等しく天主様である。天主様であるから、色もなければ形もあるべき筈はない。然しながら人間の目に顯はれたまふ時は、色々の形をお借りになつて居ます。其形をよく調べて見ますと、聖靈の賜を戴くが爲に、何を爲すべきかと云ふことが瞭然と分るのであります。

(2) 先づイエズス様が洗禮をお受けになりました時、聖靈は鳩の形を以てお降りになりました。鳩は云ふ鳥は清潔を好む鳥で、清潔な處に住み、清潔な食物を食べ、一切不潔なものを嫌ふものである。ノエの大洪水の時、水が減つたか否かを知るが爲め、ノエは鳥を方船から出して見ました。然し鳥は歸らない、次に鳩を出しましたが、鳩は足を駐むべき所を見出さないので、そのまま歸つて來ました。鳥には止るべき所があつたのに、鳩だけは其れを見出し得なかつた云ふは、不思議の様であるが、考へて見ると、何にも不思議とするに足りません。鳥は不潔な鳥で、不潔な物が大好きです。死骸な

きを見出したら、喜んで夫れに止り、それを啄き廻るのである。其時はまだ人や獸の死骸が其處にも此處にも浮んで居たはずだから、鳥は是れ幸ひに喰ひはまつて歸らなかつたのであります。之に反して鳩はそんな不潔なものには止りもしない鳥であるから、そのまゝ、方船にかへつて來たのでした。

今鳥は惡魔の象である。惡魔は「不淨の靈」と呼ばれ、その一番好きなのは汚い罪である。却て鳩は聖靈の象で、罪の汚を洗ひ落した、清い、真綺麗な心を愛し、好んでそれに宿り給ふのであります。で、いますから、心を不潔にさへなせば、何時でも惡魔は這入つて來る、喜んで飛び込むのですが、然し聖靈を受け奉るには、極めて心を潔白に、真綺麗に、少しの罪にも汚れない様になければならぬ。我々の身は聖靈の住み給ふ神殿ではありませんか。神殿が清潔であるべきは當然のことです。ませう。

(3) 次に鳩は素直であり、跪計と云ふことを知らない、だからキリスト様も弟子等に「汝等蛇の如く敏く、鳩の如く素直なれ」と仰せられました。聖靈が同じく然うで、御主も聖靈を「眞理の靈」とお呼びになりました。「眞理の靈」ですから、虚飾とか、跪計とか、二枚舌とか、そんなことを何よりもお嫌ひになります。隨つて聖靈に満され、その賜を豊に蒙り奉るには、誰にたいしても誠實であり、素直であり、淡泊であつて、萬事信仰の精神に動かされ、すべてを信仰の眼で見ると、決して誤魔化したり、嘘を吐いたり、二枚舌を

使つたりしてはならぬのであります。

(5) 終に鳩は至極優しく、平和を愛する鳥であります。聖靈も其通で、平和を愛し、相親み、相愛し、相和いで行く人の心に好んで御住ひ下さいます。それもそのはずで、聖靈は聖父と聖子との愛である、愛の天主と呼ばれ給ふのであります。この愛の天主様に満されたら、誰しも愛の火に燃え立たざるを得ないはずでせう。使徒時代の信者等が心は全く一つになり、苦は共に苦み、樂は共に樂み、財産までも賣拂つて一つに集めて暮すと云ふ位になつて居たのは、實に聖靈の賜を溢れんばかりに蒙つた結果に外ならぬのであります。皆さん、今各自の胸に手を當て、考へて御覽なさい。皆さんの心の中に不和や怒や、怨やが潜んでは居ませんか。人々相親み、相和ぐに云ふことに缺ける所がありませんか。萬一然うでもありましたら、一刻も早くそんなものを取棄てまして、此後は昔の信者等の如く魂も一つ、心も一つになり、親子兄弟の如く相親んで往くやうに努めなければなりません。さもなくば決して聖靈を戴くことも出来ねば、戴いても直ぐ失つて了ふでございませう。

(5) 聖靈降臨の日には火の形の下にお顯れになりました。即ち火の如き舌が顯れて、使徒等の上に止りますと、彼等はそれによつて聖靈に滿され、全く一變して見違へる程の人物になりました。今迄は臆病で、悟が鈍くて、三年間もイエズ様に親しく教へられながら、一向御教の眞意に通ずることが出来ない、幾ら謙遜の道を教へられても、誰が上でゐるの、下でゐるのと、醜い争をなし、イエズ

ス様が捕へられなさるや、見棄て、一散に逃げ失せた位、その御復活を見ながらも、なほユデア人を怖れて、室内深く閉ぢ籠つて居るのであります。

然るに一たび聖靈を蒙るや、はつきり御教の奥義に通じ、それと共に前の臆病は何處へやら、直にユデア人の前に跳り出で、大膽に、勇敢に、御主を殺した彼等の罪を責めて痛悔を勧めました。主の御名の爲に責められ、鞭たれると、それを何よりの幸福と喜ぶに至りました。火と云ふものは物を變化させる不思議な力を持つて居る、火の中に物を入れると、全く火になつて了ふもので、聖靈が火の形の下にお顯れになつたのも、御自分のこの特性を示す爲であつて、使徒等の身にその實例を見る、とが出来るのであります。

だから心を全く改める、舊き人を脱ぎ棄て、新しき人を着るべく努めますと、聖靈は喜んで、その心に住み給ふのであります。さすれば皆さん、この聖靈降臨を機として心の改善を謀りませう。今まで短氣だつたならば、是からは忍耐強くなるやう、今まで冷淡であつたならば、是からはより熱心になりますやう、今まで人を愛するに缺けて居たならば、以後はより多く、より熱く人を愛する様、今まで靈魂上の務に怠り勝ちであつたならば、是からはその爲に十二分の奮發心を持つ様……さう務めましたならば、聖靈は必ず喜んで我々の心にお住ひ下さるに相違ありません。

(6) 然しまだ其丈では足りません。折角聖靈を蒙りまして、それが唯二三日の間に止つては何

の役に立ちませう。聖靈は火の形を以てお現はれになりましたから、火と同じく用心しないと消えて了はれます。火はどうして消えますか、薪や油が盡きるに消えますでせう。だから聖靈を消し奉らない爲には、熱心に信仰上の勤を果して薪を加へ、油をさなければなりません。火は風が吹いて來ても消えます。我々も罪の危き機會に近き、世間や悪魔の悪い風に吹かれると、何時しか聖靈を消されるに極つて居ます。

たゞ聖靈を消さないのみならず、却つて益々熾に燃え立たさなければなりません。よく祈り、よく宗教書を読み、屢悔悛や聖体を授つて、心の中にその聖靈の火を熾に燃やした上で、使徒等の如く、之を以て他人までも燃やさなければなりません。自分の家庭に、自分の父母や妻子や兄弟姉妹やを燃やさない。友達を燃やさない。隣近所を燃やさない。口で教へること出來ない時でも、模範を以てしなさい。皆さんは堅振を授かつて聖香油を額に塗られて居ますでせう。聖香油、それこそ神の前にも人の前にも美德を香はせねばならぬ云ふ意味ではありませんでしたか。殊に今まで仙の蹟とでもなつて居た人は、尙更ら熱心に善を修め、徳を磨いて、前に悪かつた所を償ふやうに務めなければなりません。さうしてこそ始めて聖靈降臨の慶い記念日を祝した甲斐があると云ふものではないませんか。

(三) 聖靈降臨

(1)「汝等往いて萬民に教へよ」元を洗へば貧しい漁夫で、何等遠大の抱負とてあるのではなく、財力にせよ、智力にせよ、學識も地位もない弟子等が、往いて萬民に教へるなんて出來さうな話でムいませうか。

四十日前にはおめくとその師を見捨て、逃げ失せた彼等、今でもユデア人を恐れて室内深く閉ぢ籠つて居る彼等ではありませんか。その彼等が律法に詳しくユデアの教師等を前に据ゑて、博識なギリシアの哲學者、深奥なローマの法律家、現身神と祭られて居る帝王を相手にして教を説き、道を授け、その惡を戒め、善を勧めること出來よう筈がありませんか。

人間の目から見ると實際さうでした。然し彼等は主の御昇天後、エルザレムの高間―主が聖體をお定めになつた二階の一室―に閉ぢ籠り、世の騒ぎに遠つて熱心に祈り、以て約束の聖靈を俟つことが十日に及びました。

斯くて十日目の朝の九時頃、忽ち天から烈しい風の來る様な響がいたしまして、彼等の坐せる家に充ち渡つたかと思ふ中に、火の如き舌が顯はれ、分れて各々の上に止りました。すると彼等は皆聖靈に滿され、是までよく悟れなかつた御教の奥義をはつきりと分つて來ました、それと共に今が今ま

で、膽玉の小さい、勇氣の乏しい、臆病な彼等も、俄に大膽不敵となり、勇氣は全身にはりちぎれんばかりとなり、忽ち室内を飛出て、屋外に群れる大衆に向つて、怖れず、怯まず、思ひ切つて主の福音を宣べ傳へ、立ちに三千の改宗者を得て、教會の基礎を据ゑました。夫れから數日を経まして、聖ペトロと聖ヨハネは、神殿の入口で生れつきの跛者を癒し、その奇蹟に驚いて馳せ集れる人々に説教して、五千人を歸正せしめました。ユデアの教師等はこの目醒しい活動を見て捨て置き難しと思ひ、彼等を引捕へて嚴しく沈黙を命じました。でも彼等が頑として應じないものだから、終に之を獄に繋ぎ、笞刑に處しました。然し彼等は屈しません。自分で見たり、聞いたたりしたことを語らずに居られません」と答へて、相變らず自由に大膽に主の御教を説き弘めました。

夫から彼等は主の仰せのまに／＼萬國へ分れ行き、如何なる艱難苦勞をも物ともせず、平氣で萬死の途に入出して、福音の宣布に當り、終には主の爲に、その二となき生命をも喜んで投棄したのであります。

(2) 主は弟子等に聖靈を約束なさつた上で、「我は平安を汝等に遺し、我が平安を汝等と與ふ。我が與ふるは世の與ふるが如くにあらず、汝等の心騒ぐべからず、又怖るべからず」と宣うたが、今や文字通りにそれが實現いたしました。彼等は聖靈を蒙り、その眼が聖靈の光に照されたばかりでなく、またその心も聖靈の熱に煖まり、ありとあらゆる艱難、苦勞、迫害、輕侮、凌辱が前後左右が

ら激しく襲ひ蒐つても、泰然自若、怖れもせねば騒ぎもしません。主のお遺し下さつた平安を何時になつても失ひません。むしろ主の爲に苦むのを幸福とするに至つたのであります。

(3) この驚天動地の大變動を使徒等の心に起さしめ給うた聖靈は、今も我カトリック教會内に、使徒等の後繼者たる教皇、司教等と共に止り、何時になつても離れ給はぬのであります。随つて早や二千餘年の歴史を有する我が教會は、たゞ世の終までその命脈を保つのみならず、また誤ることなく、減びることなく、分裂も見ず、衰頹も知らず、日に月に向上發展する一方であります。で我々は何事が起つても、教會の運命を疑ふには及びません、安心してこの指導に一身を托せ、進んではこの教會の發展進歩に應分の力を盡し、退ては我身も聖靈の光に照され、その熱に温まり、以てよく徳を修め、行を研ぎ、心の平安を樂む様に務めたいのであります。

(4) 一あゝ心の平安！何と云ふ有難い寶なんで御座いませうか。我々はこの有難い平安を持たないで、何かに付け始終氣遣つて居ます。災難を氣遣ひ、疾病を氣遣ひ、貧苦を氣遣ひ、失敗を、侮辱を、人の不信用を、生別死別の悲みを氣遣つて居ます。是は果して何の爲でせうか。徒らに「世の與ふる平安」、空しい榮華、儂い歡樂、恃み難い財寶、そんなものに憧憬れて、主のお遺しになつた平安を求めないからではありませんでせうか。主を愛せず、その御言を守らず、小罪を數重ね、時には惡魔に誘はれ、肉慾に曳かされて、大罪までも犯して居るからではありませんでせうか、今日ばかりは斷然心

を改めたいものであります、是からは熱く主を愛し、その御教を忠實に守るべく決心し、併せて聖靈の光と熱とを一心に願ひませう。平安は聖靈の賜であると共に、また我々の努力の酬でもあります。我々は平安を得る方法を實行する一方から、また熱く之を聖靈に祈り奉らねばなりません。

(四) 聖靈降臨 (聖靈に對する我等の務)

(1) 聖靈は神にて在すから、謹んで之を禮拜せねばならぬ。我等は御父を知つて之を禮拜します。天の廣き、地の大なる、海洋の茫々として際涯なき、風の呻り、雷の轟き、禽獸草木の珍奇さを打眺めると、御父の全能を悟り、平伏して禮拜せずには居られません。

御子もよく知つて禮拜します。その御降誕、御死去のこゝを知らない人はありますまい。馬屋に参詣し、十字架を仰ぎ、聖繪、御像を眺め、ミサ聖祭に與り、聖體を拜領する毎に、御子を禮拜しない人とはありますまい。

然るに聖靈に至つては、格別之を知らない。聖靈の記憶を呼び起すものが割合に少く、一向考へ出しもしない。十字架の印をなす時、榮誦を誦へ、「聖靈來り給へ」を誦へる時、聖靈の聖名を申し上げながらも、聖靈を禮拜するのだ、尊び崇めるのだ、之に深く信頼むのだと云ふ氣分が一向起らない。是はさうも宜しくないこゝ、思ひます。聖靈も御父と御子と同等の神にて在すのだから、同等に之を

禮拜すべきは當然ではありませんでせうか。

禮拜するならば、また尊敬の念を失はないやうにせねばなりません。聖パウロは申されました。「汝等は其身が神の聖殿なる事、神の靈、汝等の中に住み給ふことを知らざるか」(コリント前)と。

然らば聖靈は我等の中に住み給ふ。所謂、靈魂の甘露なる珍客であります。小罪など勝手に犯して、この珍客を悲ましてはなりません。況んや大罪を犯して、畏多くも之を心より放逐したり、人の惡しき鑑となつて、之を他人の心より逐出し奉つたりするやうなことがあつてはなりません。「人もし神殿を毀たば、神之を亡ぼし給ふべし」(コリント前)

(2) 聖靈に深く信頼し、艱難に出遭し、途方に暮れると云ふやうな場合には、聖靈の御指圖を求めらる爲、「聖靈の降臨を望む祈」を熱心に誦へることを忘れてはなりません。

ラモリシエルと云ふフランスの有名な將軍は教皇領の防衛に務めて居る頃、カドルバル伯にアソコナ市の守備を命じ、終に言ひ添へました。「さらば伯よ、もし途方に暮れるやうな場合があつたら聖靈に祈りなさい、私は何時でも此處に力を求めます。貴方をも必ずお助け下さるでせう」と。果して伯は非常に危険な境遇に陥つたので、將軍の勸を思ひ起し、一時間以上も繰り返しく、「聖靈の降臨を望む祈」を誦へて、意外の援助を得、急場を遁れることが出来たと云ふことであります。

(3) 聖靈の勸告に従はなければなりません。聖靈が我々の内に住み給ふのは、我々を教へ導く爲で

ありますから、何時も之に従はなければなりません。聖霊は何時我々に語り給ふか、胸に善き思ひが起る時、心が悪を避け善を行ふべく動かされる時、痛悔の念が起る時、浮世の事物に遠かつて益々天主様に近きたい、天主様と一致したいと云ふ氣になつた時は、それこそ聖霊の御聲が耳に響くのであります。「何事かを己より思ひ得るにあらず、我等の得るは神によれり」(コリント後)と聖パウロも曰つて居られます。

我々は位の高い、徳の勝れた、學の深い人の言ふことならば、喜んで耳を欽てます。天主様ももし天使でも遣はして、何かを命じたり、勧めたりして下さるならば、何うしても聴かずに居られません。況んや聖霊は天主様であります。その御勧めに従はないのは、天主様を侮辱する所以で、もう此上は勧めも戒めもして戴けなくなつて了ふに相違ありません……。

この聖霊降臨に當りて、自分が平生聖霊にたいして、禮拜や信頼や服従やを盡して居るか、缺ける所はないか、篤と糺明して見たいものです。そして改むべき所は改め、斷行すべき所は進んで斷行すべく決心いたしませう。

(五) 聖霊降臨 (使徒等の勇氣)

キリスト信者の生活は不斷の戦闘状態で、キリスト教精神は勇壯剛健の精神である。使徒等を御覽

なさい、彼等は聖霊の降臨を忝うして以來、キリスト教軍の將帥として、その言は勇壯、その行は大膽不敵、その迫害に打突つては、動かざるこゝ山の如しでありました。

(1) —その言は勇壯でした—使徒等は是まで小膽臆病で、主を見棄て、逃失せたり、否んで知らぬ顔を極め込んだりしたものでした。御復活後になりましたも、恐怖心は依然として消え失せず、ユデア人をこはがつて、室内深く閉ぢ籠つて居たものであります。

然るに一たび聖霊に満されるや、勇氣は全身に溢れ、忽ち室内を飛出して公に主の御教を説きました。ユデア人に向つて、堂々と主を十字架に針けた罪を責め、之に痛悔を勧めました。捕へられ、鞭たれ、以後は決してイエズスの御教を説いては可けない、と禁じられても、「我々は見たり聞いたりしたことを語らずに居られません」と答へて、相變らず傳道を續けました。使徒等ばかりでない、殉教者等、博士等は何れも官吏なり、民衆なり、反對者なりの前に立つて、怖れず、怯まず、自若として同じ答を繰返したものであります。

我々にもこの勇氣、この言葉の上の勇氣が必要ではありませんか。自分の信仰を公表する、自分の教を辯護する、自分の教の勝れて有難い點を世に説き弘めるが爲に、この勇氣が大に必要ではありませんか。異教者の中に圍まれて居る我々には、信仰を公表せねばならぬ機會は多いものである。工場で、學校で、軍隊で、日常の交際に於て、機會はむしろ多きに苦しむ程である。どうぞ皆さん、聖霊

の賜を祈りませう。力を求めませう。指を仰へず、顔を赧めず、勇壯に、思ひ切つて信仰を公表し、人にまで之を勧めるだけの勇氣を求めませう。

(2) — その行は大膽不敵でした — 彼等は才もなく、名もなく、金もなく、多くは無學な漁師に過ぎないのでした。その彼等が十字架のキリストを宣傳して、世界を之に歸服せしめようなんて、如何にも大膽無謀、到底本氣の沙汰は思はれない位ではありませんでしたか。然し彼等は聖靈の力に強められて、少しも躊躇せず、その征服事業に着手して、大々的成功を収めました。

我々も先づ我身の征服を始めませう。聖靈の力を祈つて、勇ましく大膽に我身と戦ひませう。我身の怒と戦ひ、悪習と戦ひ、世間の蹟、悪魔の誘とも戦つて之に打勝ち、それから周囲の人々をも征服すべく務めませう。聖靈が火の形を以てお降りになりましたのは、力を示したものではありませんでしたか。世に火ほど猛烈なものがありますか。山の如き軍艦でも、一たび之に火力を加へる間に二十節も、三十節も馳るでいませう。手足の凍えて仕事が出来なくなつた時も、之を火に温めたら、容易に何んな仕事でも遣れる様になりませんか。我々が信者の義務を果たすに當つて、何ぜ寒いか、暑いとか、道が遠いだの、體が何うの、暮向が何んの云ふのですか。熱が足りないからじやありませんか。聖靈に祈りませう、その熱に温めて戴きませう。

(3) — 迫害に打突つても動かさざること山の如くしてした — 使徒等は迫害に出遭しました、鞭たれました、投獄

されました、嘲けられもし、辱められもしましたが、然し彼等はキリスト様の爲に侮辱されたのが嬉しい喜びました。流石の迫害者もそれには手の出し様がありません。此者等に何をしたら可いだらうか? と呆れ返る位でした……終に彼等は皆主の爲め、眞理の爲に殉教しました。聖アンドレアの如きは十字架を見るや「あ、善い十字架よ、長らく切望し、注意して愛し、熱心に捜して居た十字架よ」と躍り喜んで居ました。

皆さん、何ぞ申しましても、この世は戦の場です。信仰を全うしよう、華も實もある信者を以て始終しようと思はば、何うせ迫害は免れ難い。總てイエズス、キリストに於ける敬虔を以て世を渡らんと決める人は迫害を受くべし(三ノ二二)と聖パウロも申されて居ます。迫害が免れ難いとすれば、その迫害を切り抜けるが爲に、否、主の爲に迫害されるのを喜ぶと云ふに至るが爲には、大に聖靈の御力が必要ではありませんか。祈りませう、熱心に祈りませう。使徒等に彼れ程の力を與へ給うた聖靈は、亦我々にも同じ力を惠み給はぬはずがありますでせうか。

聖三位の祝日

(一) 聖三位の玄義

我々は「聖父と聖子と聖霊の御名によりてアメン」と誦へる時、聖三位の玄義にたいする信仰宣言をなす譯であります。この玄義は舊約時代にも、幽に仄かしてありましたが、新約に入ると、明かに説かれ、はつきりと教へられました。今之を(1)信仰の光に照らし、(2)理性に訴へて観察することに致しませう。

(1) 信仰の光に照らし—先づ玄義その物に就き、次に三位各の特有な点について、調べて見ることに致します。

- (イ) —玄義その物に就て言ふと、聖三位の玄義は之を四の命題に摘要するここが出来ます。
- (一) —神は唯一に在すが、然しその唯一の神には三位がある。第一位を聖父、第二位を聖子、第三位を聖霊と申します。
- (二) —この三位は何れも眞の神にて在す、聖父も神、聖子も神、聖霊も同じく神であります。
- (三) —然しこの三位は決して三の神ではない、三位とも同じ性、同じ本質を有し給ふので、唯一の

神であります。

- (四) —この三位は互に全く平等である。同じ神性を有し給ふので、また同じ徳を有し、一様に全能であり、全智であり、全善であり、至聖、至義、至愛に在し、決して後先、上下の別がありません。
 - (ロ) —三位各の特有な点から申しますと、三位は同じ性、同じ徳を有し給ふにせよ、また各には特有な点があり、特有な働きを割り當てられる所よりして、それ々に區別され給ふのであります。
 - (一) —各位の特有な点—聖父は聖子を生み、聖子は聖父より生れ、聖父と聖子は聖霊を發し、聖霊は聖父と聖子より發せられ給ふので、お互ひに區別があります。右は三位の内部に於ける働きで、嚴密に申しますと、三位が互に相異り給ふ點はたゞ是だけであります。
 - (二) —外部にたいする三位の働きは、全能によるのであつて、全能は神性に存するのですから、三位が別々に之を爲し給ふと云ふ譯ではありません。然しその働きの中には各位の特有な点にそれと似合つたのがありますから、常にその働きを以て、そのペルソナが爲し給ふもの、如く申します。然し實を言へば、決してそのペルソナ固有の働きではないのであります。
- 例へば聖父は三位の根原に在すので、全能の業を聖父に歸し、聖父を以て「天地の創造主」と呼び奉るのが常であります。聖子は聖父の智慧より生れ給うたので、智慧の業を聖子に歸します。人類の贖ひの如きは、人祖の罪の爲に破壊された秩序を故に復するに云ふ點から見ると、全く

智慧の業ですから、之を聖子の働きの業とすのであります。無論御托身になつたのは聖子のみですが、然しその御托身や御贖ひに、聖父と聖霊とが無関係であらせられたと云ふのでは決してございませぬ。

(三)―終に聖霊は聖父と聖子の愛より發し給うたので、すべて愛の業を聖霊に當てます。そして人に聖寵を施して之と一致し、之を神の愛兒となす様な成聖の恵は、最も優れたる愛の業ですから、之を聖霊の御働きの業とします。聖子が聖霊によりて聖母の御胎にやどり、人となり給うたと云ふのも、つまり愛の業ですから、使徒信經には之を聖霊に歸してありますが、實は決して聖霊のみの御業である、と云ふ譯ではないのであります。

(ハ)―理性に訴へて見る―我々の貧弱な理性は、こんなに崇高な玄義を理解すること出来ない、天主様もそれを御要求にならない。たゞその玄義を知り、之を信ぜよと命じ給ふのであります。で我々は謙遜の頭を傾けて、之を信じませう。然し之を信すると共に、道理に合はない、矛盾したことは一つもこの玄義の中に含まれてない、却つて宇宙間には、この玄義の影とも、痕跡とも謂つた様なものが少からぬのを見出すのであります。

(一)―先づ道理に合はない、矛盾したことは一つもこの玄義の中に含まれてない、成るほど三の神が一つの神であるとか、一つのペルソナが三つのペルソナをなすとか云ふのならば、それは道理に合はない、矛盾して居るでせうが、實は決して然うではない、たゞ一個の神性に三つのペルソナがあること云ふだけのことで、それが如何な摺合に組合されてあるか、なるほど人間の淺薄な智慧には悟れないと云へば其迄のことで、決して非道理でもなければ、矛盾でもないものであります。

(二)―宇宙間には三位一體の玄義の影とも痕跡とも謂つた様なものが少くありません。被造物は皆三位一體の痕跡を持つて居る―と聖アウグスティヌスは曰はれて居ます。實に靈魂は智、情、意の三能力を有して、而も一の靈魂である、被造物全體を見ると、靈なる天使、靈と物質との混合たる人間、單なる物質の三つより成つて居る。

太陽には、太陽の實體に光と熱とが見られる……物體は固體、液體、瓦斯體の三態をなして居る。生命には植物生と、動物生と、靈生と三様式がある。花には形と色と香とがある。

時には過去、現在、未來がある。物體は長さ、幅、厚みの三の擴りを有する。三角は、角が三つで一つの三角形をなして居る。

斯んな様に自然界には三位一體に似たものが澤山あります。然しそれは似て居ること云ふ迄のことです、三位一體一位をつくりだと思つてはなりません。玄義は何處までも玄義で、幾ら考へても、巧

な譬を借りて來ても、現世では到底之を理解することも、説明することも出来るものではない。ただ謙遜して之を信する、偽りも誤りも得給はぬ神様のお諭し下さつた玄義であるから、自分で理解し説明し得る眞理よりも、一層確かな眞理たることを、挺でも動かぬ信仰を以て信じなければなりません。信するばかりでは足りない、之を心より尊び敬ひ、十字架の印をなし、榮誦や、使徒信經を誦へる時は、特に、恭しさを表し、信仰を燃え立たすべく努めなければならぬのであります。

(二) 聖三位と我々との關係

我々基督信者たるものは、聖父と聖子と聖靈の御名を以て洗禮を施され、靈魂には辱くもその佛を印象されて居ますので、それだけ聖三位と密接な關係を有する譯であります。是は我々に取つて多大の光榮であり、又聖なる歡喜の基因でもあるのであります。

(1) 我々は聖父の子供である——天主様が父にて在すことは、本性の上より、又創造によりて、養育上にも出るのであります。

(イ) 本性上よりの子はたゞ第二の位、御自分と完全に等しく、すべてに平等なる御言のみであります。

(ロ) 創造によつては、すべての人の父にて在す。人は被造物中の傑作、萬物の王である。その靈魂

に與へられた智、情、意の三能力から云ふと、聖三位に肖つて造られて居るのであります。

(ハ) 養育の上から申しますと、天主様は我々を己が養子とも、世嗣ともして、我々に聖寵の寶をお恵みになり、もし我々がそれを忠實に利用するならば、御自分の壇にし給へる天國の榮福に與らしめ給ふのであります。

天主様を父とする！何と云ふ大きな名譽でせう。然し我々は今までこの慈悲深き父にたいして、如何なる子供でありましたでせうか……

(2) 我々は御子の肢である——キリスト様には、自然體と妙體と二様の身體を區別されます。

自然體は、人となり給ふ際に、聖母の御胎よりお受けになつた我々に等しい御身體、我々の爲に鞭たれ、茨を冠らされ、十字架に釘けられて、御死去なさいましたその御身體であります。

妙體とは、全教會を指すのであります。キリスト様はその頭首で、我々は各その肢であります……肢は頭首に鈞合はねばなりません、我々は果して恰好のよい、鈞合ひの取れた肢でせうか、罪を犯してこの肢を汚し、不義を働く爲の道具となす様なことはありませんか……

(3) 我々は聖靈の神殿である——洗禮や堅振を以て祝聖され、聖靈の神殿とされ、聖靈はその豊かな賜を携へ來つて、我々にお住ひ下さつたのであります……もし聖靈が共に在さないでは、我々だけでは、何等の超自然的業をもなし得ない、聖靈はすべて義せられ、聖とせられることの本源にて在するので

あります。さすれば靈魂も肉身も、その之に住み給ふ聖靈の神殿に相應しからしめねばならぬ。我々の心は神殿の如く、祈禱の家、祭典の場、聖靈が靜に私語き、すべての眞理を教へ給ふ密室でありたいものがあります……

(三) 聖三位の祝日

三位一體の玄義は最も悟り難い、しかし最も基本的な玄義で、他のすべての教理を支配し、之を含み有して居る。なほ被造物からも造物主からも、最も盛に祝賀される玄義なのであります。

(1) 天國に於ける永久の祝典——天國とは何ですか？聖三位が御自らを、永遠に、絶えず言ひ知れぬ喜びを以て、限りなく讚美し給ふ所、お互に比類なき尊重と愛とを表し給ふ處ではありませんか。天國とは何ですか？諸の天使聖人が間斷なく至聖三位を稱讚して、「聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉」と歌つて居る處ではありませんか。彼等は自分等を造り給うた聖父、贖ひ給うた聖子、聖ならしめ給うた聖靈を打眺め、感謝して飽くことを知らぬ、止る所を知らぬのであります。つまり天國は聖三位の神殿で、其處に住んで居る天使聖人等は、聖三位の祝典を舉行ふのをその唯一の仕事として居るのであります。

(2) 地上に於ける永久の祝典——基督信者たるものは、その日常生活に於て、絶えず聖三位を尊敬して居ます。基督信者であると云ふ事それ自體を以ても尊敬して居る。祭誦や使徒信經や十字架の印をくりかへして、己が偽なき尊敬の誠意をも表して居るのであります。

聖會はまたその典禮中に、その公式の聖務中に、聖三位を稱讚するのを己が任務として居る。毎週、日曜日には特に之を聖三位に献げて居る。その他、説教や、祝福や、秘蹟や、祝祭や、聖務日禱、ミサ聖祭を以て、毎日、毎時、天國にも劣らず聖三位を讚美して居るのであります。

(3) 聖三位の特別祝典——終に聖會は、聖三位にたいして盡すべき義務を我々に思ひ起さしめるが爲め、聖靈降臨の次の日曜日を、特に聖三位の祝日と定めました。

(イ)——この祝日によつて、聖會が我々に説いて居るのは信徳であります。救靈に必要缺くべからざる信徳、神の御言の上に基礎づけられて居る堅い磐の如き信徳、誰の前に出ても、恐れず、怯まず、勇壯、大膽な信徳であります。

(ロ)——この祝日によつて聖會が我等に勧めて居るのは望徳であります。如何なる嵐に襲はれても、微動だもしない望徳、特に熱烈な祈禱となつて顯れる望徳であります。

(ハ)——終にこの祝日によつて聖會が我々に宣傳して居るのは愛徳であります。聖三位はお互に密接な愛を以て結ばれ、三位でありながら、一體をなし給ふと云ふくらゐですから、随つて聖三位の最も

大なる尊榮となるのは、この愛徳であります。で我々は愛その物にて在す聖父ミ、聖子ミ聖靈を愛しませう。心を盡し、力を盡して大に愛しませう。

愛しませう、即ち聖三位のこころを思ひ、しかも信頼と満足ミを以てしばしば思ひませう。

愛しませう、即ち心の言葉、讚美や感謝の言葉を之に申上げませう。

愛しませう、即ち聖三位に則つて、己を尊重し、身を聖ならしめ、特に兄弟を愛して、我々の愛の偽なきを證しませう。

兎に角、聖三位を愛し、我々のすべての義務を忠實に果しませう。さすれば臨終の際に、我々の忠實さは、大なる慰安となり、淺からぬ希望ミなるのは、疑を容れない所であります。

聖體の祝日

(一) 聖體の祝日の目的

(1) 御存じの通り、本日は聖體の祝日であります。毎年この祝祭を舉行ふ毎に、イエズス様の我々を愛し給ふその愛の忝さが、ヒシ／＼と身に沁みるやうに覺えない方はありません。

一寸考へて見ますと、イエズス様が聖體の秘蹟をお定めになつたのは、それこそ無益の様に思はれ

ませんか。何の爲めイエズス様は何時迄も我々をお止り下さるのでせうか。人類はもう立派に贖はれて居る、御父の義怒は宥められ、天國の門は開かれ、聖寵の露は潤澤に雨らされることになつて居るではありませんか。何の必要あれば、我々と共に世の終迄もお止り下さるのでせう。その御力を藏し、その御光を晦まし、御自分ではちつとの身動きすらなし給はず、全く人托せにして、之を聖體顯示臺に收めて祭壇の上に擧げ奉らうと、之を聖體器に籠ち込めて聖櫃の中に置き申さうと、爲れる儘になつて居られる。何う云ふ騒がしい町中でも、そんなに汚ろしい病家にも携へ行かれ、聖體拜領の折には善人の口にも、悪人の胸にも均しくお遣入り下さると云ふは、如何にもその限りなき御稜威に不似合のやうに思はれてならぬじやありませんか……なるほど夫は不似合であるかも知れませんが。然し愛は方なしであります。誰かを心から愛するならば、似合ふとか、似合はぬとか云ふことは、決して考へるものではない。たゞその愛する人と一緒に居りたい、何時迄も一緒に居りたい、何時になつても離れたくないと云ふが人情であります。だが幾ら離れたくない、何時迄も一緒に居りたいと思つて見た所で、何人しも一度は死なねばなりませんので、己を得ずも離れて行く、死別れるのですが、さて其場合、愈々その愛する人に永の暇乞をすると云ふ場合になると、今更の如く愛情が濃になり、せめてもの記念として、平生自分が大切に居た衣服や、書籍や、指環や云ふやうなものを遺して、「是を見る時は私を見るやうな心持になつて下さい」と言ふものであります。

今イエズス様も我々を無二の親友と愛み、平素より淺からぬ愛をお示し下さつたのでありますが、愈々臨終の間際になりますと、最も著しい愛の證據を示し、我々に衣物でもない、書籍でもない、指環でもない、金銀財寶でもない、實に己が貴い御肉體をば記念として遺し、我々と何時迄も離れたいで、一緒に止れる工夫を廻らして下さいました。斯うしてイエズス様は、我々の爲にその御體御血、御靈魂、天主性迄もお遺し下さつたのであります。斯うしてイエズス様は既に御死去なごつても、なほ我々の中に生き給ふのであります。斯うしてイエズス様は天にお昇りになつても、相變らず斯土にお止り下さるのであります。嗚呼イエズス様の我々に對し給ふ愛の熱烈さと來ては、誠に限りも涯しもないと云ふものではありませんか。

(2) —人々の爲に聖體の中に閉ぢ籠つても、多くの人は自分を拜まうとも、愛しようともせず、自分が此處に居ることさへ認めてくれないであらう、時には勿體なくもその聖體を踏みにじり、之を地に打付け、水に投じ、火になげ込む者すら無いでもないと云ふことは、始から御存じの所でありました。自分を信する、聖教を守るに云ふ人々でさへ、自分の前に進み、信心を温め、尊敬を盡し、愛の火を燃やして、斯る恐るべき瀆聖の罪を償はうとはせずして、恣に禮儀を亂し、側見し、心を散らして無禮を加へるばかりであらう、一日も二日も一週間も自分を獨り聖櫃の中に打棄て置き、絶えて訪問しようとしなないであらうと云ふことも、飽まで承認しながら、たゞ我々が可愛い、何時ま

でも共に住み、共に暮らしたいばかりに、この聖體の秘蹟を定め、夜となく晝となく我々と共にお留り下さるのであります。あ、實にイエズス様の愛の深さと云つたら、筆にも言にも盡されたものでないませうか。

(3) —愛に報ゆるには愛を以てせねばならぬ。

(イ) —イエズス様は我々を愛して、我々に離れるに忍び給はなかつた、我々と共に居るのを何よりの樂と思召しになつたのですから、我々もイエズス様と共に居るのを何よりの樂とし、なるべく聖體降福式に參與つたり、聖體訪問をしたりして、イエズス様を拜み、感謝を述べ、必要な聖寵をお願ひ申す様にせねばなりません。

(ロ) —何人かを愛するならば、たゞ其人と共に居たいのみならず、亦なるべく其人の上に福あれかし、禍なけれかしと希ふものであります。イエズス様もたゞ我々と共に居るのを以て満足し給はず、我々の爲に毎日く身を犠牲に供へて、我々の罪の赦を願ひ、憐れを求め、恵を乞受けて下さる。カルワリオにて、十字架に磔けられた御身を父の天主様に獻げて「彼等は爲す所を知らざるものなれば、之を赦し給へ」と叫ばれたイエズス様は、今もミサ聖祭に於て、祭壇の上より御父に向つて、我々の罪の赦を願つて止み給はぬのであります。舊約時代には、天主様が僅の罪の爲に嚴しい罰をお降しになつた例は多いものである。契約の櫃を覗いたと云ふ丈けで、何十人と云ふベツサメ人が天罰で

死んだこともある。ダウイドが傲慢心に駆られて戸籍調査をさせた爲に、天罰が降り、全國に疫病が流行して、僅か三日の間に七萬人と云ふ大勢が死にました。昔は僅の罪でも斯れほど厳しく罰し給うた天主様が、何うして今日では甚い罪をちつと黙忍して、容易に罰を降し給はぬのでせうか。他ではありません。たゞイエズス様が毎日く身を犠牲に供へて、御父の怒を宥め給ふからであります。御自分の貴い御血を献げて、我々の爲に御憐れを求め給ふからであります。彼を思ひ此を思ひましたならば、心は如何なる感謝の情に燃え、毎日、而かも熱心にミサ聖祭に參與り、主の恩の忝さを思ひ、一心に感謝すると共に、また御父の御憐れを求めなければならぬ筈では無いませうか。

(ハ) 終に愛の極は一つになることとあります。即ち愛しては近きたい、近いては密着したい、愛がいよく篤くなれば、密着の度もいよく緊く、終には何うしても離れられぬ、一つにもなつて了ひたいと云ふが人情でせう。イエズス様が聖體の秘蹟をお定めになる時、故らパンの形色を用ひたまうたのは其爲である。世の中に食物ほご我々に近くなるものはありません。食物は即ち我々の肉である、血である、骨である。故に仰しやつたでせう「我肉を食し、我血を飲む人は我に止り、我も亦彼に止る」ミ、即ち全く一つの身になつて了ふ云ふ意味なのであります。

(4) 一よく考へて御覽なさい。もし慈悲深い國王があつて、人民の中にも一番貧しい乞食を大變に愛し、御膳部の幾分かを割いて之にお贈りになると云ふならば、その人は如何に之を身に餘る光榮よみ感謝するで無いませうか。もし幾分ではない、全部を残らずその賤しい乞食にお下げ下さると云ふならば、愈々その愛の深きに驚かざるものはありますまい。もし夫れ御自分の貴い御體を削つてその賤しい乞食の饑をお救ひになるミ云ふ様なことでもありましたら、聞く人は餘りの事に喫驚仰天して、何とも言ふ所を知らない程で無いませう。然るにイエズス様は如何なさいましたか。天地萬物の大君の身を以て、たゞに御膳部を残らずお與へ下さるのみならず、たゞ御體の一部分を削りてお與へ下さるのみならず、己を残らず與へ、我々と全く一致して下さるのであります。是よりも優れて有難い愛の證據が又とあるで無いませうか。

(5) 一兎に角イエズス様は我々を愛して、我々と離れたくない、緊く一致したいと思召になつて、この聖體の秘蹟をお定め下さつた以上は、なるべく我々より拜領されたいとお望みになられて居ることとは申す迄もない所であります。「汝等受けて之を食せよ、之れ我體なり」と云つて勸めて見たり、「我肉を食し、我血を飲む人は永遠の生命を有す」ミ大層立派な御褒美を約束したり、「我肉を食せず、我血を飲まざれば汝等に生命なし」と、罰を威嚇したりし給ふのは、つまり何とかして、我々より拜領されたいと熱望し給ふからの事でありませう。さればこの一週間、殊にこの日曜日には誰れも彼れも聖體を拜領して、主の御望に副ひ奉る様、務めなければなりません。

(二) 聖體の御恵

今日より一週間は聖體の祝日で、我々は力の限りを盡して、主の聖體を尊び崇め、その御恵を感謝し、併せてその御恵にたいする我々が平素の忘恩を謝し奉らねばなりません。それに就て特に注目すべきは、祭壇と聖櫃と聖體拜領臺とであります。

(1) 祭壇—にはミサ聖祭が献げられる。毎日、世界到る處、苟くもカトリック司祭の留る所には、必ずミサ聖祭が執行されます。しての所謂ミサ聖祭は十字架の祭と同じ祭である。カルワリオは十字架の上にて、人々の罪を贖はん爲め、御血をしたため盡し給うた救主は、今もミサの祭壇上にて御血こそ流し給はぬが、その十字架の祭を再現し、我々の爲に其身を犠牲として御父に献げ給ふのであります。我々が毎日、犯す罪は、絶えず聞き苦しい聲を放つて居ります。その聲を耳にし給うては、流石の御父もそのまゝに捨置かれたいはずだけれども、幸ひ主がミサの祭壇上にその貴い御血を献げて、罪の赦を願ひ給ふので、御父も夫れに宥められて、罰の代りに、かへつて有難い祝福を下し給ふのであります。世に恐ろしい罪惡が日にまし蔓り昌へて居るにも拘らず、容易に罰の沙汰が出ないの云ふものは、固より御父の限りなき御憐に由るは云ふもの、また一つはミサ聖祭の御蔭ではあります。主がミサの祭壇上から御父に向つて、「彼等はその爲す所を知らざらぬものなれ

ば、之を赦し給へ」と叫び給ふその御祈禱の結果ではありませんでせうか。

是ほどの御恵！我々は果して是ほどの御恵を心から感謝して居ますでせうか。感謝のしるしに屢々信心を以てミサ聖祭に與つて居ますでせうか。この祭壇の上に、主が御身を犠牲として自分の罪を贖ひ下さるのだ、自分の爲に溢れんばかりの聖寵を請ひ求めて下さるのだ、と云ふことすら考へたことも無いのじやありませんか。

(2) 聖櫃—主はたゞミサ聖祭の時、祭壇上に天降つて御身を犠牲に供へ給ふのみならず、「人の子と共にあるは我が樂なり」と宣うて、夜も晝も聖櫃内に留り、世の終までも我等の間を立ち去り給はぬのであります。然しそれは亦何の爲でせうか。

既に人間の救ひは全うされました、天國の門は開かれました、御父の御怒も和げられました、今更ら何の必要があれば、そんなに何時までもこの世にお留り下さるのでせう。全能、全智の神の貴きを以て、粗末なパンの形色の下に隠れ、その御力を包み、その御威光を晦まし、棄てられようと、侮り辱められようと、土足にかけて踏みにじられようと、一言の抗辯も、一寸の手向ひも出来ない、たゞ爲されるがまゝになつて居なければならぬ云ふは、その限りなき御稜威に不似合ではないでせうか。しかも夫れが一年の間でない、百年の間でない、世の終までもさうしてお留りになるのは果して何の爲でせうか。

他ではありません、たゞ我々を愛し給へばこそであります。我々お互ひの間にも、愛すれば離れなくありません。何時までも共に居たい、如何なる艱難辛苦も、愛する友の爲だと思つたら、少しも辛くありません、むしろ苦しむの喜びます。惱ましいのを愉快とするに至るものであります。今イエズス様も我々を熱く愛し給ふが故に、何時になつても、我々を離るゝに忍び給はぬ、この世に明し暮し給うた三十三年の長い歲月も、愛情限りなき主の爲には餘りに短く思はれたので、ここに聖體の秘蹟を定め、物淋しき聖櫃内に閉ぢ籠つて、何時迄も、何時迄も、我々と共に住み、我々の慰めとなり、力となり、喜びとなり、樂みなりたいたいのと思召させ給うたのであります。

然るに我々はこの言ふべからざる御恵にたいして如何なる感謝を献げて居ますでせうか。世の富あり位ある人の邸には、御機嫌伺ひに上るもの、感謝を述べるもの、助力を願ひ、愛顧を祈るものが毎日引きもきらずあるのに、この天地の大王、萬物の御主の在す聖堂は、何時往つて見ても森と静まりかへつて、人の影すら見えません。聖堂の門前を通りながら、入つて御挨拶申さうとする人さへありません。日曜日の聖體降福式―わざわざ聖體の御恵を感謝し、疎遠を詫び、祝福を求めらる爲に行はれる聖體降福式にさへ、動もすれば與るまいとする位、誠に嘆はしい次第ではありませんでせうか。

(3)―聖體拜領臺―聖體の秘蹟の最も有難い所以は特に聖體拜領臺に於て之を見るのです。主は忝くも我々の食物となり、「我肉を食し我血を飲む人は我に在り、我も亦彼に在り」と宣うて、御身を残ら

す我々に與へ、我々と全く一致して下さる。

御威光限りまさぬ神様が、この賤しい拙い我々を御自分に一致させ、我々の思、我々の望、我々の行爲、我々の立振舞までも、御自分の夫れの如くなさうと思召し下さるのであります。

兎に角、主は御自分の御體、御血を残らずお與へ下さる。しかもさつして我々の食物となり、飲物となるのを何よりもお望みになり、我々を奨め勵まして之を拜領させんが爲に「我肉を食し、我血を飲む人は終なき生命を有す」と云つて測り知られぬ御恵を約束し、それでもなほ進んで拜領しようとならないものには、厳しい罰を威嚇して「我肉を食せず、我血を飲まざれば、汝等に生命なからん」とまで曰うて下さるのでせう。

主は斯くまで我々に拜領されるのを熱望して止み給はぬのに、我々は果して主の御望を満足させ奉つて居ますでせうか、やつと一年に一回、或は大祝日に限つて兩三回も拜領すれば、夫れで澤山だ位に考へて居ませんか。

要するに、聖會がこの祝日を定めたのは、祭壇、聖櫃、聖體拜領臺に於て我々の忝うせる海山管ならぬ御恵を感謝させ、我々が平生その御恵に報い奉るのに、言語道斷な忘恩の沙汰を以てして居るのをお詫び申させるが爲であります。で我々はその聖會の旨を奉體し、この一週間はなるべく屢々ミサを拜聴し、聖體降福式に與り、殊に熱い信心を以て聖體を拜領し、以て聊か主の限りなき御恵を

感謝し、平素の冷淡、疎遠、輕侮、凌辱を償ひたいものであります。

(三) 聖體拜領の利益

公教要理には聖體拜領の効果を説いて「聖體を拜領するとイエズス、キリストと一致し、聖體が増し、私慾が弱り、終りなき生命に至るなどの効果がある」と言つてあります。

(1) 一致する—聖體を拜領すると、イエズス、キリストと一致する、一致するとは、一つになることで、食物が之を食する人の血となり、肉となり、骨となるが如く、我々も聖體を拜領すれば、イエズス、キリスト様と全く一つになつて了ふと云ふ意味であります。イエズス様も仰しやつたでせう、「我肉を食し、我血を飲む人は我に止り、我も亦彼に止る」と。これより親密な一致がありますでせうか。鐵を火の中に焼くと、鐵はやはり鐵でありますが、然し終には全く火になつて了ひませう。それと同じく我々も聖體を拜領いたしますと、我々の個性を失つて了ふ譯ではないが、然し鐵が熱して火になるが如く、我々もイエズス様の火に焼けて、イエズス様の如くなつて了ふのであります。何と云ふ有り難いお恵でせうか。罪深い人間の身を持ちながら、御威光限りなき天主様と合體して全く一つになること出来る云ふのは……斯うしてイエズス様と全く一致いたしますと、我々の感情はもう我々の感情ではなく、我々の望はもう我々の望ではない、我々の喜悅はもう我々の喜悅ではないや

うになつて来る。今まで我々の心にあつた傾向も、感情も、思望も次第に消え失せて、イエズス様の生命は直に我々の生命となり、イエズス様の感情は直に我々の感情となり、イエズス様の傾向は直に我々の傾向となり、イエズス様の愛は、思望は、喜悅は直に我々の愛となり、我々の思望となり、我々の喜悅ともなるのであります。イエズス様が惡を嫌ひ、浮世を厭がり、浮世の有ゆる虚榮を憎み給ふその美しい感情は深く我々の心に浸み渡り、我々の肝に刻まれるのであります。

天主様の光榮を揚げたい、人類を救ひたい云ふ一念にイエズス様の聖心が燃え立ち給ふが如く、我々も同じ念に燃え立つことが出来るのであります。

斯うなつて参りますと、今まで苦かつたものは甘くなり、不味かつたものは美味しくなり、六ヶしかつた事が容易くなり、萬事イエズス様と同感になつて、イエズス様の望み給ふ所は我々も之を望み、イエズス様の嫌ひ給ふ所は我々も之を嫌ひ、イエズス様の生き給ふが如く我々も生きる、否、我々も云ふものはもう全くなつて了つて、たゞイエズス様のみが我々の中に生き給ひ、聖パウロの如く「我は活くと雖も、既に我に非ず、キリストこそ我に於て生き給ふなれ」と叫ぶことが出来るに至るのであります。

(2) 聖體が増す—身體は食物によつて養はれて、其生命を保つことが出来る。してその食物が上等で、滋養分に富んで居れば、富んで居るだけ、身體は強壯に、元氣は旺盛となつて来るものであります。

す。靈魂にもやはり食物が必要であります。説教だとか、聖書だとか、祈禱だとかは、靈魂の爲に結構な食物であるに相違ないが、聖體の秘蹟は最も勝れた、最も滋養分に富んだ食物であつて、我々は之によつて靈魂を養ひ強め、充分に元氣を養ひ、険しい徳の山坂も、遠い天の御國にまでも、難なく登つて行けるやうになるのであります。

聖會の初め頃、迫害の嵐が吹き捲つて居た時代には、信者は聖體を授つて自宅へ持ち帰り、愈々官吏に捕へられるに云ふ時に之を授り、その聖體に力づけられて、火の海にでも劍の山にでも、何の恐れもなく飛び込むことが出来たと云ふことでもあります。

なほ食物と云ふものは、管に滋養なるのみならず、之を食するに、何をも知れぬ美味を覺えるものであります。それと同じく聖體を拜領すると、天主様の味を覺える、味を覺えるから、ますます天主様を愛し、六ヶしい、窮屈な掟も喜んで之を守るやうになります。夫れと共に現世の事物が味を失つて来る。砂糖や蜜を嘗めてからは、他に少々甘いものを口にしても、水つぽくなつて了ふが如く、聖體によつて天主様の愛の味を覺えましたら、もう現世の財産だとか、名譽だとか、快樂だとかは水つぽくなつて来る、それだけ愈々勇み進んで、天主様に事へ奉るやうになるのであります。

然し是は適當の準備を以て拜領する人に與へられる効果であつて、もしや聖體を拜領しても、心を散して、イエズス様が自分の胸に在すことも考へないで、餘り浮世の快樂や財寶や等に心を奪はれ

て居るとか、或は身體の工合が何うも面白くないとか云ふ時には、そんな味を覺えません。時として準備は適當にして居ても、何等の感情も起らないことがあります。そんな時は決して心配するには及びません。感情は起らなくとも、ますます天主様を愛し、いよく熱心に天主様に仕へ奉りたいと云ふ氣にさへなりますれば、夫れで澤山であります。

(3) 私慾が弱ります—今申上げました通り、聖體を拜領して、靈魂に聖寵が増し、元氣が加はつて参りますと、私慾はそれだけ弱つて来るのであります。立派な、滋養分に富んだ食物を攝り、體が昌々て来ると、少々寒い目にあつても、風邪を引かない、少々暑い日に照らされても、熱なご痛ひません。靈魂も其と同じで、聖體を以て養はれ、元氣旺盛となつて参りますから、惡魔に誘はれても、情慾に曳かれても、難なく之を撃退することが出来ます。なほ詳しく申します、罪の原因にも、靈魂の敵にも云ふべきは、情慾と惡魔と世間と三つで、三つとも聖體によつて大に弱められらるのであります。

(イ) 情慾は聖體によつて弱められます。我々は聖體を拜領する時、イエズス様と一致して、愛の火に燃え立つて来る。所でイエズス様の清い愛が熾になれば、夫れだけ汚らわしい愛、即ち情慾は弱つて来るのであります。

其上、我々の肉體はイエズス様の御肉體と一致して、イエズス様と一つの體となるのですから、イエズス様も我々の肉體をば、御自分の御肉體も同様に見做し給うて、之を清め、之を聖ならしめ、肉

怒に反抗ふだけの力をお恵み下さるのであります。

(ロ)―悪魔には何うして勝てるか云ふに、聖體はイエズス様の御死去の記念である。悪魔はイエズス様の御死去によつて打倒されたのですから、其御死去の記念迄も恐れざるを得ない。其上、青蠅を御覽なさい、どんな味しいものにも、其れがクラクラと沸つて居る間は、集るこゝ出来ない、冷へて微温くなつてから始めし之に群り集つて来るものでせう。悪魔は正しく青蠅です、我々の心が愛の熱に燃えて居る間は容易に近き得るものではない。所で聖體を拜領すると、イエズス様と一致して、心には愛の火が燃え立つことになるのですから、悪魔が恐れて近き得ない、随つて惡に誇ふこと出来ないのも怪むに足りませう。

(ハ)―世間にも躓かされぬやうになる。イエズス様が我々の心に入らして、我々を照らし、心の眼を開けて下さいますから、たゞ世間が如何に金の光を輝かし、名譽や快樂を見せびらかして、心を迷はせようとしても、決して其んなものに迷はされて、天主様に背き、罪を犯す氣になりません。なほ心の弱い、勇氣の足りない人は、信心をしよう、善の道に踏み入らうと思つて居ながら、世間から何さか云はれてはならぬ、冷やかされてはならぬと恐れて、折角の思立を實行し得ないものですが、然しイエズス様は「強きもの、パン」と稱され給ふほどあつて、我々の心を強め、力を添へて下さいます。人が何と云はうも、冷笑さうも、人は人、我は我だと思つて、少しもそんなこゝには頓着せず、ド

ンク思ひ立つたまゝをやつて退けるやうになるのであります。

斯う云ふ次第で、情慾にも悪魔にも世間にも立派に打勝つことが出来ますから、罪なき犯す氣遣がない様になります。さればこそトリエントの公會議も、聖體を呼んで、「大罪を豫防する藥だ」云つたのであります。

固より聖體は大罪を赦すこと出来ない、たゞ豫防するだけですが、然し小罪ならば之を赦すことが出来ます。寒さや暑さの爲に、多少體の工合が面白くない時にでも、自分の好きな、味しいものを食べるに、俄に元氣づいて来て、少し位の不工合は癒つて了ひます。聖體も夫れと同じで、靈魂の極めて味しい食物ですから、一寸の不足や過失は之を赦すことが出来ます。然しながら其赦を蒙るが爲には、小罪への愛着心があつてならないのみならず、せめては一般的になり、痛悔を起さなければなりません。聖體拜領前に必ず告白の祈を誦へることになつて居るのは、之が爲であります。

(4)―終りなき生命に至る―是はイエズス様が明にお約束になつた所で「我肉を食し、我血を飲む人は永遠の生命を有す、而して我終りの日に之を復活せしむべし」云うて居る。何うして然うなるかと云ふに、聖體を拜領いたしますと、たゞ靈魂がイエズス様と一致するのみならず、肉體も亦イエズス様の御肉體と一つになります。そしてイエズス様の御肉體は腐敗せずして、魅りましたが如く、我々の肉體も、たとへ一應は腐ることがあるにせよ、せめて世の終に魅つて、主の御肉體の如く、光り

輝くこと出来るのは理の當然ではありませんか。昔アダムが置かれて居た樂園には、生命の樹と云ふのがあつて、其實を食して居ると、死ぬ憂はないのであります。今イエズス様は、其生命の樹の代りに、聖體の秘蹟を聖會の園に植をつけて下さつたのですから、之をよく授かりますと、靈魂は罪に陥つて死ぬやうな氣遣がない、罪に陥つて死ぬ氣遣がないならば、必ず永遠の生命に到ることが出来るはずでういませう。

斯の如く、立派に準備して聖體を拜領するに、數々の有難い効果を得られるのですから、何人しも熱心に又なるべく屢之を拜領するやうに務めなければなりません。

(四) ミサ聖祭の四大目的

(1) 御存じの通り、我々人類は天主様にたいして、四つの大なる義務を背負つて居ます。

(イ) 禮拜と感謝—天主様は無始無終の神、天上天下唯一獨尊の君にて在す。其性や善、其徳や美、其道や愛、嘗て無限の權能と無量の仁愛とを傾けて、無より我々を造り出し、我々に賦へるに聖寵を以てし、我々を萬物の王に立て、その全能の神腕を伸ばして我々の生存を支へ、其仁愛の御掌を開いて、我々に數々の恩恵を下し給ふのであります。然らば我々人類は仰いでその無上の稜威を禮拜し、俯してその鴻大なる慈恩を感謝しなければならぬ。是れこそ我々人類が天主様にたいして背負つて居

る禮拜と感謝の重大なる義務なのであります。

(ロ) 贖罪—然るに我々は屢この重大なる義務を能く果さず、反つて數知れぬ大罪小罪を重ねて、天主様の無上の稜威を辱めて居るのであります。抑も天主様の最もお嫌ひ遊ばすものは罪である、我々は之を十分辨へて居る、辨へて居ながら、その最もお嫌ひあそばす罪を重ねて、絶えず天主様の聖顔を辱めて居る、天主様は無量の仁愛を垂れて、日夜數限りなき恩恵を下し給ふのに、我々は日夜數限りなき大罪小罪を重ねて、天主様の恩恵に報いるに仇を以てすると云ふは餘りにも甚しいことではありませんか。天主様は正義の神、一善一惡と雖も、必ず之に報い給ふ、是れ實に正義の然らしむる所、各自がその罪を贖はざるに於ては、其應報は決して免れること出来ない。贖罪の我々に必要なる所以は、茲に在るのであります。

(ハ) 祈願—贖罪は必要である。然し祈願もまた必要缺くべからざるものである。我々は弱く淺ましい、罪に傾き易く、主の御助に頼らなくては、一つの善をも行ひ得ず、一つの惡をも避け能はぬ、「我を離れては汝等何事をも爲す能はず」(コリント)と主も曰うて居る。然らば弱く淺ましいこと我々の如く、罪を多く重ね重ねて居ること我々の如く、肉慾の猛火を踏み、罪惡の洪水に溺る、こと我々の如く、過失の重荷に壓倒せられて、自ら起つ能はざること我々の如きものが、若し聖寵の助なきに於ては、一步救靈の門に向つて進むことすら出来ませうか。是れ祈願の我々に必要なる所以である。

要するに我々の天主様に盡すべき義務は、禮拜、感謝、贖罪、祈願の四つであります。

(2) — ミサ聖祭の目的も四つ — 我々の肩の上に四個の重大なる義務が負はされてあることは、今云つた通りであります。然し微力なる我々に、さうしてこの重大なる義務を果し得ようはずが、いませう。然らば如何したら可いでせう……心配するには及びません。ミサ聖祭があります。我々はこのミサ聖祭に頼りて、右の四大義務を、容易に、又完全に果すことが出来るのであります。

實にミサ聖祭は十字架の祭の再現である。カルワリオの犠牲が再びミサの祭壇上にお降りになり、我々億兆の爲めに御身を天の御父に献げ給ふ新約唯一の大祭である。嘗てカルワリオは十字架壇上に、御身を全人類の爲めに献げ給うたキリスト様が、今もミサの祭壇上に在りて、天下億兆に代りて御身を犠牲となし、以て禮拜、感謝、贖罪、祈願の四大義務を果し給ふのであります。

然らばミサは禮拜の聖祭である、感謝の聖祭である、贖罪の聖祭である、祈願の聖祭である。しかもこの聖祭の効果は無量無邊である、最高無比である。神自らが己を犠牲に供へ、神自らが親しく執行し給ふ所の至聖、至尊、至高、至大の聖祭なのであります。

(イ) — ミサは禮拜の聖祭である — 何となればミサ聖祭に於て、天主の第二位なるキリスト様は、全人類に代り、その至尊の御身を謙つて、被造物が造物主に拂ふべき禮拜をば御父に献げ給ふのである。然らばミサ聖祭は是れ天主の第二位が第一位に對して執行し給ふ至聖至高なる大祭である、其價値の

比びなきことは言ふを俟たざる所で、金口聖ヨハネも曰はれました。「一度ミサ聖祭を執行する時は、キリストがカルワリオで御死去になつたのと、その價値は同等である」と。然らばキリスト様がミサの祭壇上に犠牲を爲らせ給ふや、我々人類の天主様に負ふ所の禮拜の義務は、悉く又完全に果され得て、猶餘ありと謂はなければなりません。

(ロ) — 次にミサは感謝の聖祭である — 何となればキリスト様は身を以てミサの祭壇上に犠牲となり、我々人類に代りて、御父天主様の無限の御恵に釣合ふだけの感謝を献げ給ふのであります。

(ハ) — ミサは贖罪の聖祭である — 蓋し世の罪を除き給ふ神の羔は、我々人類の罪の爲に、ミサの祭壇上に犠牲となつて献げられ給ふのである。我々の罪は固より多く且つ重い。然しキリスト様は天主の第二位で、我々の罪の爲に犠牲となり給ふのである。「是ぞ我意に適ふ我が愛子なる」とヨルダン河の空より御聲を放ち給うた御父は、今や其愛子がミサの祭壇上より「彼等はその爲す所を知らざるものなれば赦し給へ」と絶叫し給ふ聲をば、何うして輕じ給ふで、いませう。して見ると、ミサ聖祭は我々の爲に又なき慰藉である、多大の希望である、有難い復活である。たとへ如何ほど罪惡の淵底ふかく沈んで居るにせよ、失望落膽する譯は決してありません。

(ニ) — ミサは祈願の聖祭である — キリスト様は我々が罪惡の淵に溺れて、何を何うすることも出来ないのを憐んで、自らミサの祭壇上に犠牲となり、聖寵のマンナの大に我々の頭上に雨らされん事を祈つ

て止み給はぬのである。然らば天恩に浴したいと欲する人、聖寵の救助を求めたいと思ふ人は、何うぞ来つてミサ聖祭に與つて下さい。ミサ聖祭の中に祈るのは、罪深い我々が祈るのではない、神の御意に適ひ給ふキリスト様が、我々に代つてお祈り下さるのである。之を思つたばかりでも、如何なる希望に胸の躍り立つのを覚えるで無いませうか。

兎に角、ミサを拜聴する時は、心を専らにして、右の四大義務を考へ、祭壇に實在し給ふキリスト様と精神的に一致し、以て禮拜、感謝、贖罪、祈願の四大行爲を果す様に務めたいものであります。(故道田師の作)

(五) 聖體行列の意義

(1) 本月何日には聖體の祝日の公式を兼ねて、聖體行列をなすことになつて居ます。折も聖體行列の目的は聖體內に籠り在すイエズス様を大に尊敬禮拜し、その御恵を感謝すると共に、亦己が信仰を公表する爲であります。是こそ主の實在を信ぜざる異端者、主の聖體に暴言を浴せ、侮辱を加へ奉る不信仰者に向つて、實行上から抗議を申し立て、我々の偽りなき信仰を表白する所以でありまして、悪魔は特に之を恐れ、各國政府を動かして、種々の口實の下に、極力この行列を阻止しようとする。幸ひ我國の當局者は全く教會の爲すまゝに放任して、何等干渉がましき舉

に出でないので、我々は成るべく盛に之を舉行したいものであります。

従來我國のカトリックは、信仰的生活の表現を家庭内か聖堂内かに止めて、之を公に發表するのを憚る氣味がないではありませんでした。然るに最近社會の進歩につれて、教界も著しく目醒めてまゐりました。進んで公衆の前に乗り出し、純真なカトリック信仰を表白しようと試みる様になりまして、各地に聖體行列の如き盛事が行はれることとなりましたのは、誠に以て大慶の至りと云はなければなりません。

(2) 願はくは異教徒の祝祭見たやうに之を一個のお祭り騒ぎに流れさせないで、胸中に滾る熱烈な敬虔、火の如き信仰をば自ら外に迸出せしめ、一は以て異端者、異教徒の悪言、暴語、侮蔑を償ひ、一は以てカトリック信仰の美觀を門外の人々にまで仰がせたいものであります。

なほ我々信徒が平素聖體に加へ奉る冷淡、無關心、不敬、凌辱を償ひ奉るのも、聖體行列の目的の一であります。主が夜ごなく晝ごなく聖體の中に籠り在し、我々の同伴となり、食物ごなり、犠牲ともなつて下さるのは、それこそ何時まで感謝しても足りないほどの勝れた御恵、驚くべき愛であります。然るに我々はこの愛を相當に理解して居ますでせうか。この御恵の忝さを十分に辨へて居ますでせうか。

折角主が聖體の中に籠り在して、訪ひ來る人もやと俟ち伫び給ふにも拘らず、絶えて近き奉らう

ともいたしません。折角、魂の食物となつて、我々を養ひ強めたいと欲し給ふのに、務めて敬遠主義を執らうとして居ます。ミサの祭壇上に犠牲となり、我々の爲に禮拜、感謝、贖罪、祈願して下さいますのに、その祭典に與り、之が功德を蒙り奉らうと云ふものは至つて少い、嘆はしきの至りではありませんでせうか。

されば聖體の祝日には主を奉じて盛な行列を作り、家を飾り、道路を飾り、聲を限りに讚美歌を歌ひ、花を撒き、香の煙を浴せ奉つて、平素の無關心を、平素の敬遠主義を、平素の輕侮凌辱を償ひ、以て聊か主の聖心を慰め奉るべく務めるのであります。

(3)―そればかりか、聖體行列は吾主の凱旋的行進であります。蠟燭の祝日や、枝の主日や、昇天(多くの教會でミサ前に行はる)の行列の如く、たゞ歴史上の出来事を記念する爲ではありません。聖マルコの祝日や、祈願の日の夫れの如く、公に主の御恵を嘆願する爲でもありません。實に天地の大王の凱旋を行ふのであります。主を金光燦爛たる顯示臺に收め、釣鐘の勇しく鳴り響き、聖歌や奏樂の音の洋々と流れ行く中に、多くの聖職者、數知れぬ信徒が前後左右を圍繞んで、街衢を練り行き、その勝利を示し、その勢威を仰がしめるのであります。

無論、吾國での行列はまして莊大、威嚴、善を盡し、美を盡せるものではありません。だが責めては生々たる信仰、熱烈なる敬虔を濫らせ、以て外觀の足りない所を埋合せたいものであります。

(4)―終に聖體行列は凱旋的行進たると共に、亦慈愛の神が親しくその民を訪問し、その子等の祈にお耳を傾け、之が上に豊かな祝福を雨降さうと云ふ思召から行はせ給ふ公式の御巡行なのであります。

主が御在世中、ユデアの町なり、村なりを御通行になるや、人々は争つて之を出迎へ、小兒等は眞先に飛んで行つて祝福を願ひ、病人は路傍に待ち設けて平快を求めたのであります。今主はパンの形色の下に隠れながら、教區間の一部を通過して祝福の雨露を澆ぎ給ふのであります。出来ただけその行列を盛にし、その凱旋の光榮を發揚し、外は以て異教徒にまで我宗教の美觀を示し、彼等の心を引いて主の御許に近け、内は以て我等一同の上に豊なる祝福を呼降したいものであります。

(六) 聖體行列

本月何日には例によりて某教區に於て、聖體行列を執行されるはすになつて居ます。梅雨中のこととて特に氣遣はれるのは天氣であります。然し我々の熱心が主に通じたら、好天氣を恵まれることは疑を容れない所であります。

(1)―抑も聖體行列は聖體の中に實在し給ふ御主に對する一種の信仰宣言であります。

主は人々を愛するの餘り、之を離れるに忍び給はず、わざと聖體の秘蹟を定め、夜となく晝となくこゝに閉ぢ籠り、人々の禮拜を受け、嘆きを聴き、罪を赦し、恵を與へ給ふのであります。

然るに人々はこの有難いとも有難い御恵を思はず。その教を信ぜず。その誠を守らず。國家の法律、學校、社會の制度習慣の中にも主を容れ奉るのを望まないのであります。甚だしきに至りましては、家庭からまで、己が心からまで、主を追放し奉り、「我等は彼が我等の王なることを否む」(一コリント二)と大膽にも叫んで居る位、社會の紛亂、人心の動搖、腐敗、顛倒は主として此に原因するのではありませんか。

我々公教信者たるものは、この險惡な世相に對して、冷淡、無關心を極め込んで居るべき筈ではありません。社會が主に遠かり、その鞭をかなぐり棄てようとする務めれば務めるだけ、我々はいよく信仰を熱烈にして、主に密接し奉り、「我等は彼が我等の王たることを否む」と惡魔の如き叫びを擧げる人々の向ふを張つて、「彼は王ならざるべからず」(一コリント五)と叫ばなければなりません。兎に角聖體行列の第一の目的は、主の至聖聖體にたいして我々の信仰を宣言し、人々の主に加へ奉る輕侮凌辱を償ひ、その數々の罪のお詫をするに云ふに於てあります。

だから今日は平生に倍して我々の熱情を披瀝し、聖體の内、在す主を尊崇、讚嘆、愛慕して、一は以て己が偽りなき信仰を表白し、一は以て世の人々の冷淡、輕侮、凌辱の謝罪をなさなければなりません。

(2) 主が聖體の中に籠り給ふのは、我々と世の終まで留り給はんが爲であります。嘗て御在世當時、

人々を憐み、助け、慰め給うたが如く、今も我々を憐み、助け、慰め給はんが爲であります。嘗て十字架上に御身を犠牲として、御父の怒を宥め、人類の上に御憐みを祈り給うたが如く、今も聖體の中にその犠牲をつゞけ、御父の御怒を宥め、我々の上に御憐みを祈り求めんが爲であります。要するに主はユデアに於ける二千年前の御生活、その傳道、その奇蹟、その祈禱をば、今も聖體の中に續けさせ給ふのであります。

(3) さすれば今日祭壇上に主の御聖體を安置し奉つたり、之を奉持して行列をしたりするのは、二千年前の御生活を近く我々の眼前に實現させ奉る譯ではありませんでせうか。その聖體の御前に跪いて居る間に、主は何等かの御教を聽かして下さいませんか。何等かの奇蹟を心靈上に行ひ下さいませんか。少くも我々は十字架上に御身を犠牲に供へさせ給へる場面に立合つて居る様なものではありませんでせうか。今日ほど我々の願は聽かれ、望は遂げられ、恵も與へられる日はないのであります。

だから今日は殊更ら熱心に御恵を願ひませう……。我々の望を打開け、志を申上げ、自分の爲、人の爲、すべて欲しいと思ふ所を願ひ出ることにはいたしません。

惡魔の誘惑、肉慾の跳梁、我身の不甲斐なさに困つて居るならば、厚い信頼心を以て我等を訴へたら、主は必ず御耳を傾け、情を動かし、力を貸して下さいます。少しも疑ふには及びません。

喜ばしい事があるならば、主に打開けて、共に喜んでいただきませう。何か計畫して居る所があるならば、主に申出で、祝福を求め、之を實行する爲の力を恵み給へと祈りませう。

其他、肉身上によらず、靈魂上に限らず何事も主に訴へ、友が友に、子が父に物語る様に有りのまに親しく物語つて、御助を願ひ、御憐みを祈つたら、主は喜んで御耳を傾け、快くその願をお許し下さるに相違ないのであります。

(4) 猶、この序に我同胞の改心をも祈らなければなりません。我國の人口は七千萬の多き上つて居るのに、カトリックの数は朝鮮のそれを合せても僅かに十四五萬、何と云ふ情ない話で無いませうか。彼等とても日本帝國に生れた我々の同胞ではありませんか。彼等とても同じ神に造られ、同じ救主の御血を以て贖はれ、同じ天國の福樂を辱うすべく定められたものではありませんか。彼等が相率ゐて救靈の道を踏み外し、あらねぬ方向へ迷ひ込みつ、あるのを見ながら、カインのやうに「兄弟の番人ではなし」と涼しい顔をして居られる筈がありませんか。

主は嘗てユチアの村々を巡回して教を説き、病を癒し給ふのでありましたが、群衆を見て彼等が牧者なき羊の如く、疲れきつて居るのを憐み、弟子等に向つて、

「牧種は多いが、働く者は少い、働く者その牧獲へ遣し給ふ様、牧種の主に願へ」と
仰せになりました。今日も主は聖體の中から廣く吾國の民衆を見廻し、彼等が暗き死の蔭に坐し、罪

惡に疲れきつて居るのを憐み給はぬでせうか。「働く者を遣し給ふ様、御父に願へ」と我々にも命じ給はぬでせうか。

「主よ、私の娘が惡魔に憑かれて居ます。私の子が死に瀕してゐます。私の兄弟が死にました。憐んで下さい。癒して下さい。蘇生して下さい」と

願ふ者がある毎に、主は喜んでその願に應じ給ふのであります。然らば今我々が主を奉じて行列をなすつ、日本國民のために祈りましたら、我々の父母たり、兄弟姉妹たる日本國民の心から、惡魔を逐げ下さる様、その心の病を癒し、之を冷い死の墓より蘇生して下さい。熱心こめて祈りましたら、主は飛び立つて應じ給はぬはずがありませんか。

イエズスの聖心

(一) 聖心にたいする信心

聖心とは何んであるか、何を要求し給ふか、何を與へ給ふか、この三つを考へて見ます。

(1) 聖心とは何であるか——我々に禮拜崇敬せよ、と云はれるのは、申すまでもなく、神の御子の御心臓である。我々の心臓の如く肉より成つた御心臓、主の御胸に高鳴りした御心臓、その地上生活の重

要機關、御死去後、ローマ兵に刺し通され給うたその御心臓であります。

然しこの御心臓を特に禮拜するのは、それが神なるベルソナに合體され、神人の一部をなして居るからではない。主としてその我々にたいし給ふ熱愛、その熱愛の明るい、燃ゆるが如き表徴だからであります。

人は心が第一で、心即ち人であります。その人物の如何を正しく判断するには、さうしてもその心を知らなければなりません。

イエズス様に就ても同じく然うで、その如何なる御方なるかを判断するには、聖心を知らなければならぬ。イエズス様が己が聖心を我々に示して、「この心を御覧なさい、人を如何に愛したものですか」さ仰有つたのは之が爲であります。然うです、一目イエズス様の聖心を眺めると、我々を如何に愛し給ふか、「神は愛にて在す」と曰つた聖ヨハネの言が如何に眞實なるかを、容易に悟ることが出来るであります。

(2) 聖心は何を要求し給ふか—愛の要求する所はたゞ一つ、愛されること、心の爲に心、愛の代りに愛、たゞそればかりであります。

イエズス様は嘗て曰うたことがある、「我は地上に火を放たんきて來れり、その燃ゆる外には何をか望まん」(マルコ九)と……。

聖女マルガリタ、マリアには、一層明に「私は渴く、愛されたい望に燃えて居る、私は人々を私の愛に改心せしめたい」と仰せられました。

イエズス様がその聖心を示して、御要求になる所、それを我々は是非とも叶へて上げなければならぬ。聖心が我々を愛する、と仰有つて下さるのを聴く時、我々の心は甚く動きます、その驚くべき御情に感じ、その代りに我々もこの心を主に献げなければならぬ云ふことを、しみんく覺つて來るのであります。

聖パウロは感動の餘りに、「彼は我を愛して我爲に己を付し給へり」(コリント)と繰りかへして居る……斯くまで愛し給うた聖心を、何うして愛せず居られませう。「人もし我主イエズス、キリストを愛せずば排斥せられよ」(コリント前)「聖パウロは叫ばれたが、二千年以來、すべての偉大なる聖人等は何れも、「主は私を愛し給うた……私も主を愛します」と答へて居るのであります。

(3) 何を與へ給ふか—我々の愛の代りに、その愛に酬いるが爲め、如何ほ立派なお約束をして下さりましたか。お聴きなさい、「我はその家庭を平和ならしめん、艱難に際して之を慰めん、その爲す所に豊なる祝福を濺がん、一生涯、殊に臨終の際、安全なる避難所たるべし」……

我々は義理上から言つても、大に主の聖心を愛し奉らねばならぬのに、是ほ立派なお約束まで賜つた以上は、いよく聖心にたいする敬虔を盛にし、この敬虔を以て我々が全生涯の中軸となさな

ければならぬ……イエズス様の御要求になる所を残らず献げましたら、イエズス様もまたその約束し給うた所を残らずお與へ下さるに相違ありません……

(一) 聖心にたいする敬虔

聖心にたいする敬虔は、感謝、謝罪、模倣の三つに約めることが出来ます。

(1) 感謝—イエズス様は聖女マルガリタ、マリアにその聖心を指示して「この心を御覽なさい。人を如何に愛したのですか……然るに大多数の人々からは輕侮し忘恩しか受けないのです」とお嘆きになりました……

世に忘恩ほき憎むべきものはない……だがイエズス様にだけは、その憎むべき忘恩を加へても差支ないかの如く大概の人は考へて居るのじやありませんでせうか……今日までイエズス様に忝ろした御恵を數へ、その中でも、特に御托身、御受難、聖體の三大恩を思つて見なさい。

御托身—全能の神様が我々の爲に賤しい人間となつて、ペトレヘムの馬屋に生れ、エジプトに走り、ナザレトに歸つて三十年の間も見窄らしい大工小舎に、難儀な生活をして下さつたまは、實に何ご云ふ大きな御恵でせうか。

然し御受難は更に驚くべき御恵で、全能の神様が、我々の爲に、我々の罪を御身に引受け、我々に

代つて、鞭たれ、茨を冠られ、ありまあらゆる辱めを浴せられ、終には十字架に釘けられて御死去なさいましたことを思ひましたら、誰かその愛の限りも涯しもないのに感泣鳴謝せずに居られませう。主の愛はいよく出て、いよく感すべく、茲に聖體の秘蹟までもお定め下さいました。至高の神様が本の形色の下に隠れて、世の終までもこの涙の谷に留り、毎日／＼己を祭壇上に犠となし、且つは我々の食物とまでなつて、我々を養ひ、強め、護りて止み給はぬのであります……是ほどの愛を忝ろして居ながら、我々は果して夫れを認め、それを感謝して居ますでせうか、かへつて聖心に「侮辱し忘恩とを浴せかけ奉つて居る大多数の人々」の一人とはなつてゐないでせうか。

(2) 謝罪—主の聖心が絶えず人々に加へられ給ふ輕侮、凌辱、忘恩の沙汰を數へて御覽なさい……主を認めず、禮拜せず、敬愛せず、主の聖體を拜領し奉らうともしない人が如何に多いかを思ひなさい……聖心は聖女マルガリタに何ご云つてお嘆きになりましたか……

せめて我々は、聖心を認め奉つて居る我々は、聖心の愛を有難がり、聊かなりとも愛に報いるに愛を以てしたい心掛けて居る我々は、何ごかして是等の侮辱の代りに、心からなる謝罪を獻げて、聖心を慰め奉り、屢聖體を訪問し、熱心に之を拜領し、主の御光榮を揚げ、御國を弘め、なるべく大多数の人々に聖心を知らしめ、尊ばせ、愛させ奉る様、力の限りを盡すべきではないでせうか。

(3) 模倣—聖心に我々の偽りなき愛を證するには、出来るだけ之に則り奉るに限る。聖心の弟子に相應しき生活をなし、聖心の實行し給うた謙遜、柔和、愛、忍耐、神の思召への服従などの徳を實行すべく務めるに限るのであります……「我は活くも雖も、既に我に非ず、キリストこそ我に於て活き給うなれ」—聖パウロと共に言ひ得るに至りますならば、それこそ眞實に聖心を敬愛し奉つて居る證據ではないでせうか。

我々は是非とも、この喜び、この慰藉を聖心に献げ奉りませう。さすれば聖心の方でも、この世では豊に聖寵を賜ひ、後世では言ひ知れぬ光榮に酔はして下さるべきは、疑を容れない所であります。

(三) 聖心を愛しませう

(1) 聖心は限りなき愛もて我々をお愛し下さいました。我々は幾ら聖心を愛しましても、愛しましても、十分その愛に報い奉ることは出来ないであります。

たとへ濱の砂や、海の水滴や、地上の草の葉、木の葉、天に輝く日、月、星や、是等が残らず心になつて了ひ、そのすべての心がイエズスを愛するの外に思ふ所なく、望む所なく、目的とする所なきに至りましても、聖心の愛され給はねばならぬだけ愛し奉ることは到底出来ないであります。聖心を愛し奉るには、天使等の愛、聖人等の愛、聖母マリアの愛も十分ではない。神の限りなき愛らし

さを相應に愛し得るものは、無限の神の外にはないのであります。

だから我々は、到底何時になつても拂ひ了し得ない債務者である。たゞ出来るだけ力を傾けて支拂ひませう。少くも支拂ひたいと云ふ善意だけは持つて居る、忘れては居ないこゝを表しませう……

(2) 「神を愛するの程度は、程度なく愛するに在り」と、聖ベルナルドは曰はれました。この愛こそが我々の主要なる思、否、唯一の思、唯一の努力でありたい。是で澤山である云ふだけ盡し得ないから、せめては、より善く盡したいものであります。

我々の行爲の功德は、たゞ意向の如何に由るのであります。然らば何を爲すにも、まず「意向を純潔になしませう。我身の満足を求める代りに、主の聖心を喜ばせ奉るべく務めませう。出来るだけ自己愛を遠けて、その意向をより純潔ならしめませう。すべてをイエズス様の爲に果し、人の報を求めようと、人々に感謝されようとか、よく思はれようとか、よく言はれようとか、そんなことは問題にしてはならぬ。人が不義を働いても、我々に何の關係がありますか。我々は人の爲に生きて居るのでない、聖心の爲に生きて居るのです。聖心が御満足に思召し下さらば、それで澤山ではありませんか。

(3) 聖心をますます愛すべく務めるのは、如何に必要でせうか、「徳の途に於て進まざるは退くなり」と靈生教師等は曰つて居ます。神の愛については特に然うで、より熱く愛すると云ふ努力を緩めるな

聖心を愛しませう

らば、必ず自己愛に取つて代られる、微温は機会を伺つて居る、動もすると最初の熱心を冷し、イエズス様から吐き出されて了ふに至らんにも限りません。

(4) 聖心を益々愛するに、以て失つた時日を回復することが出来る。今まで如何に我一生を使ひ果しましたか、忝うした聖寵！それこそ神の御血の價であります。その聖寵を如何に利用して居ますか。忠實に天主様に仕へましたか。随分長く、随分屢天主様への奉仕を怠らなかつたでせうか。それは何の爲めですか？愛が足りなかつたからではありませんか……今それを悔しく思つては居ませんか……然し失つた所を是非とも回復したいものと固く決心しないならば、その悔しさも果して眞實と思はれますでせうか。

多く等閑にしただけ、一層注意を深くし、多く懶けただけ、一層勇氣を奮ひ、多く冷淡であつただけ、一層熱心となるべきではありませんか。是から先き何時まで生き存へるでせうか、また幾何の命が残りますでせうか。もう後は格別ないのではないでせうか。さすれば二分間でも無駄に費してはならぬじやありませんか。

(5) 終に聖心を愛し奉らねばならぬ理由が今一つあります。それは毎日の御恵で、我々は一日として聖寵を蒙らざるなしである。身體の方から申します、食べて居る御飯、吸つて居る空氣、住んで居る家、身を暖める服、天から照す太陽、下から載せてくれる地球、美しい花、馥郁たる芳香、是

等はすべて主の慈愛の御手より賜はる御恵ではありませんか。

心には如何かと云ふに、家族の情、朋友の親み、愉快で、氣を慰め、心を引起てる交際、困難に陥り、途方に暮れた時の激励、助言等、是等もつまり聖心より賜はる御恵ではありませんか。

靈魂には、良き思、美しき望、善の勵み、立派な手本、善き言、善きすゝめ、聖人等の保護、守護の天使の護衛、聖母マリアの慈愛、贖宥、赦罪、聖體拜領、何れもく言語に餘るほどの御恵ではありませんか。

斯の如く、聖心は、恵を施し、罪を赦し、己を與へて止る所を知り給はぬ。それも毎日、毎時のことである……我々は果してさうして戴くだけの権利があつたのですか……それなのに、我々ばかりが聖心を愛し奉るに疲れを感じるには何うしたこゝでせう。

聖心の御恵はいよ／＼増加する一方なのに、我々の方では、「もう澤山！更に愛する必要はない」位に考へて居るのじやありませんか。

アシジオの聖フランシスコは小鳥を招いて、共に天主様を讚美させました。我々の小な心は、充分に聖心を愛し奉るに足りませんから、他の援助を求めませう。聖心の爲に小な友を作り、彼等を教へ、勧め、勵まして、主を愛させ、讚美させ、以て我々の心の足りない所を補ふべく務めませう。さう致しますと、聖心には光榮を、兄弟と我身には救靈を得せしめる譯で、實に一舉兩得と云ふもので

はありませんでせうか。

(四) 聖心に我々の愛を證明する

(1) — イエズ様は或時聖ペトロに向ひ、「この人々に超えて汝我を愛するか」とお尋ねになりました。其時聖ペトロは「私が主を愛することは御存じの所でありませう」と謹んで答へました。今聖心は我々に向つても、同じ問を發して、「汝我を愛するか」とお尋ねにならないでせうか。

信心の務を果す時、朝夕の祈を誦へる時、ロザリオを爪繰る時、告白をなし、聖體を拜領する時、「汝我を愛するか、もし愛するならば、他の思を一切遠けよ、我前に身を慎み、思を静めよ、一心になれ」と仰有らないでせうか。

(2) — 我々が職務を果す時——主人であらうと、下僕であらうと、資本家であらうと、労働者であらうと、教師であり、生徒であり、親であり、子であり、夫であり、妻であるにせよ、皆夫れれに果すべき務があり、盡すべき責任があるのですが——その時聖心は我々に向つて、「汝我を愛するか」とお尋ねになるのぢやありませんか。

(3) — 終に試験に採まれる時も、同じ問を發し給ふのです。試験——それは辛い、堪へ難いものですが、然しまた随分頻繁に我々を訪れて來るのです……實にこの世は涙の谷……敵はその惡意を以て我々を

苦しめる、友人はその無作法、その忘恩を以て我々の心を傷ける、たゞへその友愛には渝る所がないにせよ、然し不完全である、たとへ不完全でないにせよ、早かれ晩かれ離別の悲を見ねばならぬ。その他疾病に見舞はれる、失業に出遭する、貧困に悩まされると云ふ様に、試験は到底免れ難い。してその試験も、之を我々に送り給ふのは聖心だ、之を送りながら、「汝我を愛するか」と問はせ給ふのだと云ふことを忘れるならば、いよく以て堪へ難く覺えられるのであります。

(4) — 我々は右の問にたいして如何に答へねばなりませんでせうか。先づ聖ペトロの如く謙遜して答へませう。彼は前の苦い失敗に懲りて、謙遜しました。決して人の上に身を置かないで、「私が主を愛することは御存知の所でありませう」と謹んで答へました、我々も人より善いもの、我々ほどの天恩を忝うしなかつた人々よりも勝れて居ると思つてはならぬ。そしてペトロは三たび問はれて、三たび同じ様に答へました。我々も問はれる毎に答へませう、聖心を愛し申して居る、祈禱にも、仕事にも、試験の中にも、聖心を愛して渝る所がないと答へませう、死ぬまでも、同じ様に答へませう。

(5) — なほ我々は聖ペトロの如く痛悔の人でありたいものです。聖ペトロは主を三たび否んだことを一生涯忘れません、身を終るまで、その罪を泣き、兩眼より絶えず流れ下る涙は、顔に二條の涙の溝を穿つに至つたと云ふ傳説さへ残つて居る位に悲み嘆いて、その罪滅しをしたものであります。我々の人となり如何でありませうと、聖心にたいする現在の愛が如何に誠實でありませうと、また随分

罪を犯し、過失を重ねて居ませんか。幾ら悔い悲しんでも足りない程ではありませんか。そして痛悔は愛の證據ですから、何時になりましても、この痛悔を忘れない、すべての祈禱の中に、盛に熱心の情が湧き立ちかへる敬虔の中にすら、罪を嘆くことだけは忘れない様にせねばなりません。

(6) 我々の答が完全であるには、言だけでは足りない、行を以てせねばなりません。

聖心は我々が祈を始める時、「汝、我を愛するか」と問ひ給ふのですから、必ず忠實に祈り、忠實に告白や聖體を拜領して、答へませう、時としては是等敬虔の務に何の趣味も感じない時があります。もし自然の欲する所に従ふならば、何か一寸した口實でもあると、忽ち之を抛げ出して了はうとするものです。決して然らしてはなりません。むしろ其時こそ我々の偽りなき愛を證明する好機會であります。心が散り亂るれば散り亂れるほど、いよく之を集中せしむべく務め、飽までその祈禱を、その敬虔の務を續けなければなりません。

我々が其身の義務を果す時、主は「汝、我を愛するか」とお尋ねになりますから、忠實にそれを全うし、心から主を愛して居るの實をお目に懸けることに致ませう。その義務が自分の趣味に合ふのでしたら、愉快を感じるからではなく、たゞ主の思召に適ふが爲に之を果す様にし、好きでも好きでもない時は、聖心の愛を以て之を聖ならしめる。もしや、苦しい、困難な義務でしたら、其時こそ腐榮の爲、自分一個の利益の爲でなく、たゞ聖心を喜ばせ奉るが爲め、聖心が之を命じ給ふのだからと

思ひ、喜んで之を果す様に務めませう。

終に試験—その試験の中にこそ聖心は我々を俟たせ給ふのです、その試験の中に於てこそ、聖心は我々に向つて、「汝、我を愛するか」とお尋ねになります。試験—それは随分辛くて苦しいものであります。然し聖心より送られたもので、我々を主の御受難に組合させ、大なる功德を積ましてくれるのだ、一方よりは之によつて我々の愛を、心からなる偽りなき愛を證明せしめるのだと云ふ事を忘れてはならぬ。聖母マリアは常に御子を愛し給ふたのでしたが、その愛の熱烈さを最もよく證し給うたのは、十字架の下に於て了した。我々も勇しく十字架を擔ぎ、潔く苦みを引受けて以て、我々の愛を聖心に證するこゝが出来、あらゆる敬虔の務を以てよりも、熱心な聖體拜領を以てよりも、苦みを快く堪へ忍んでこそ、一層誠實に、一層確に「私は主を愛します」と申し上げることが出来る譯であります。

兎に角、我々は主の間に應じて、何時も同じ答を申し上げませう、口も心も行爲も、たゞこの一事だけを申し上げ、斯くて永遠の世界に参りました時、いよく喜びに堪へずして、之をくりかへすことが出来ます様、務めたいものであります。

聖母の最潔き聖心

(一) 日本公教會の擁護者

(1) 聖母の最潔き聖心を日本公教會の擁護者ご定めたのは、十九世紀に於ける最初の日本宣教師 フォルカド師であります。

師は一八四四年(我弘化)四月二十八日、フランスの軍艦に送られて琉球の那覇に入港されたのですが、越えて五月一日の朝のことでした。軍艦内でミサ聖祭を執行した上で、この琉球の新傳地を聖母の最潔き聖心に献げ、いよくこゝに布教を開始して、幾人かの島人を眞の信仰に引入れ、一軒の小聖堂でも建設することが出来たらば、直にローマに請願して、この國を残らず聖母の御保護に委ね奉るべし、と宣誓されました。

尤もフォルカド師はこの宣誓を實現し得られなかつたのですが、然し一八六二年(文久)始めて日本の土を踏まれたジラル宣教師は、フォルカド師の志を空しうせず、ローマに申請して聖母の最潔き聖心をば、日本公教會の擁護者と定められたのであります。

(2) 然しフォルカド師が特に聖母の最潔き聖心に日本公教會をお頼みになつたのは何の爲で、い

ましたでせうか。その理由は何も書き遺してありませんから、確と斷言は出来ませんが、多分その少し前に「勝利の聖母堂」に起つた出来事に、暗云を得られたものではあるまいかと思はれてなりません。勝利の聖母堂とは、佛國パリーの眞直中に在る有名な聖堂ですが、其處の信者は一時極度の不熱心に陥り、大祝日にでも聖堂は全くのがらんどつで、死ぬ時にすら、司祭のお世話にならうと云ふ者は餘り多くない位、主任司祭デジュネト師は、四年の間もあらん限りの力を絞りに働いて見たのですが、何の効果も現れません。然るに一八三六年十二月不圖感ずる所あつて、聖母の最潔き聖心を尊ぶが爲め「勝利の聖母會」を組織し、罪人の改心を求めることに致します。信者は急に深いく、睡から醒めたかの如く、邪を去り正に歸するものが引きもきらずあり、數年ならずして、其教會の面目は全く一新するに至りました。

フォルカド師は多分この事を見聞して居られたので、我國民を歸依せしめる、二百有餘年の久しきに亘つて、迫害の恐しさに慄み上つて居る我國民を基督教に歸依せしめることは容易からぬ難事業で、聖母マリアの力ある御保護に頼るより外はないと見て取られたからではなかつたでせうか。

(3) 然し罪人の改心、異教者の感化の爲、殊に聖母マリアの最潔き聖心を頼むのは如何した譯でせう? 他ではありません。マリア様が原罪の汚に染まず、自罪の傷をも被らず、玲瓏玉の如き潔さを保つの特典を忝うされたのは、救主の御母たるべく選まれ給うたからであります。そして救主が

この世に生れ給うたのは、憐れな罪人を救ひ上げて、之に救霊を得せしめん爲でしたから、随つて救主の御母にて在すマリア様も、救主の愛し給うた罪人や迷へる人を愛し、救主に手傳ひして、彼等に救霊を得せしめたいと一心に冀ひ給ふのは、當然の事ではありませんか。

その上、マリア様はカルワリオに於て救主より人類を御手に托けられ、何ごかして彼等に救主の御血の功徳を蒙らせたいと熱望して居られます。しかもマリア様は「憐みの御母」とさへ稱へられ給ふほどあつて、憐れな人、罪に溺れた人、異教の暗に彷徨へる人を憐み、彼等を正しき道に引上げたい、眞理の光を仰がせたいものと、熱く望み給ふのであります。

一體罪に汚れた人ですと、邪慾に煩はされますので、動もする心があらぬ方面へ走りますので、天主様を愛し、人を愛し、天主様の御光榮を擧げ、人の救霊を謀ると云ふ方に専らなり得ない憾があります。然しマリア様は罪もなく、邪慾も知り給はぬのでしたから、それだけ一心を傾けて天主様を愛し、その御光榮を揚げ奉り、人を憐み、彼等を助けて罪を離れ、迷ひを去り、眞理の途へ引返して、救霊の彼岸に到達せしめたいと念願し給ふのであります。

(4) 右様な理由により、我日本公教會は、聖母の最潔き聖心に依頼され、その御保護を忝うする事になつて居るのでありますから、我々は平生より聖母の最潔き聖心、一點の罪の汚もなく、たゞ清く潔く照り輝き給ふこの聖心感嘆もし、讚美もし、出来るだけこの聖心の如く罪の汚に遠かるべし。

く務めると共に、世の憐れなる罪人、暗と死の蔭とに坐せる人々を一人でも多く改心に導き給へと、祈らなければなりません。

(二) 聖母の最潔き聖心とは？

(1) 聖母の聖心をそれ自體に就て觀察いたします。是は全能なる天主様の傑作であります。天主様は聖母を御子の御母たるべく造り、之にあらゆる優れた聖寵、感すべき賜を與へ、神の御子の御住所に相應からしめんと欲し給うたのであります。

随つてこの汚なき聖心は、蒼天よりも清く、太陽よりも美しく、邪慾に傾く憂すらなく、我々の胸を騒がし、心を亂す悪念、そんなものは露ばかりも知り給はぬのであります。實にマリア様は原罪の汚なくやどされ、その魂の清さを曇らす過失、その美しさを汚すべき缺點とは一つもなかつたのであります。

超自然的光にその智を照されて、天主様の偉大さと、己が虚無とをよく辨へて居られましたから、聖母の聖心は完全に謙遜でした。天主様の御稜威の前に己を空しうし、我身に備れる長所美點、自分の爲し得る善業、其等は皆天主様に歸し奉り、少しでも之を私し給ふ様なことはなかつたのであります。

この同じ光によつて、聖母は世物の空しく、虚無に等しいことをよく悟つて居られました……その心は一切の世物を解脱し、すべての道ならぬ感情、その感情の絆を解かれて自由となり、たゞ仰ぐ所は天主様、たゞ求める所はその天主様の聖意で、「汝等は死したるものにして、その生命はキリストと共に神に於て隠れたるなり」(コロサイ)と云つた聖パウロの言を、そのまゝ實現されて居るのであります。

(2) 聖母の聖心をその天主様との關係に於て觀察いたしますと「この清い、聖籠に充滿てる聖心は、天主様にたいして感謝の念に躍り、愛熱に燃え、御光榮を一心に冀ひ、爲に骨を惜まず身を抛つて盡し給ふのであります。實際聖母はたゞイエズス様のこののみを思ひ、たゞイエズス様の爲のみに生き、その言もその行も、その心臓の鼓動も、一々完全なる愛の行爲であつたのであります。

何事に於ても天主様の思召に従ひ、之を以て己が進退舉動の唯一の法則とし給ひ、「我は主の婢なり、仰の如く我に成れかし」と始終くりかへして居られました。御子の御托身の際のみならず、エリザベトを訪問するにも、ベトレヘムへ行き、エジプトへ走り、ナザレトに住み、十字架の下に停むにも、「我は主の婢なり……」と云ひ、天主様の思召の法則に外れ給ふ様なことは決してなかつたのであります。天主様にたいする愛、その骨を惜まず、身を抛つて盡す云ふ精神よりして、何時でも、何事にも、己を清い、聖なる、神の聖意に適へる供物とし給ふのでした。その犠牲は早くより、しかも心から、少の

制限もなく、勇しく、間斷なく、イエズス様の犠牲に合せて献げ給ふのであります……

天主様が世に尊ばれ給ひ、イエズス様が人々に認められ、愛され給ふのを見たいと云ふ熱烈な望に、聖母の聖心は燃切ればかりでした……随つてこの愛の聖心はユデア國民が聖籠の勧めに背き、數知れぬ異教徒、惡にこびりついた罪人が何時になつても心を改めないのを見て、如何なる悲痛に沈み入り給うたでせうか……人類救贖の大事業の首尾よく全うせられん爲に、如何ほご嘆きもし、涙も溢し給うたでせうか、「マリアの心はイエズスの心だ」と申しますが、實によく穿つた語であると云はなければなりません。

(3) 聖母の聖心を我々との關係に於て觀察いたしますと「聖母の聖心は何の方面から觀ても、イエズスの聖心と一致し、その生寫も謂はれ給ふまでに一致して居られましたから、またイエズスの心の如く、柔和、哀憐、親切、博愛に漲つて居られたこは申す迄もない所であり……イエズス様は人類の爲に御托身なさいました。その御血も、その御生命も、彼等の爲に抛棄てなさいました……マリア様はまたマリア様で、彼等の爲に己が生命以上のものを、即ち最愛の御子をお與へになりました。さればこそ御子の代りに彼等を残らず與へられ、全人類の母となられたのであります。

だから聖母の聖心は絶えず我々の上に注意し、我々を護り助け、恵を施し給ふのである。十字架の下に於て言ひ知れぬ苦痛の中に我々を産み給うたゞけ、それだけ熱く我々を愛し給ふのである……そ

の心、その目は、夜も晝も我々の上に注がれ、我々の叫びに御耳を傾け、我々の願ひを聞き届けてやりたいと俟ち構へて居られるのであります。聖母の聖心は我々を聖ならしめ、我々を救ひ上げんとて、如何なる奮發心に燃えさせ給ふのでせうか。始終我々の爲に祈り、我々を招き、教へ、警め、奮ひ起たせ、以て惡を避け、善を行はして下さるのであります。子供は常に、自分を護つてくれる母の注意深い、親切な手を見て居る譯ではないが、然しその結果を蒙つて居ます。我々とても知らずくの中に、聖母の御蔭を蒙り、それによつて改心もし、善にも踏み止り、救靈をも全うし得るに至つて居るのじやありませんか。

で云いますから、厚き信頼を以て、この聖心に近き、身も心も残らずこの聖心に献げませう。我々の心をもイエズス様のお住ひに相應しき聖櫃となして下さる様、この聖心によりて一度は必ずイエズス様を面に仰視、之を永遠に愛し奉るの幸福を忝うすることが出来ます様、祈りませう。

(三) 聖母の最潔き聖心(我等の美鑑)

(1) 聖母マリアの祝日は、主として御主に忝うし給うた特典を慶賀する爲に設けられたものであります。然し今日の祝日に限つて、聖母の美しき御徳を尊び、その感すべき功績を譽めた、へるが爲に、特定されたもの、様に思はれてなりません。

すべて眞實な美しさ、紛なき功績は、心に在つて存する。心即ち人で、其人の一切は心に約まると謂つても可い位。随つて聖母の偉大さを十分に會得するには、何うしてもその聖心を研究して見なければなりません。その聖心の奥へ這入つて、如何なる天使、聖人にも見られない程の美しきその御徳を仰視なければなりません。

實に聖母の聖心は聖三位の傑作でありました。御父は之をいじしの姫君とし、御子は之を最愛の御母とし、聖靈は之を最も適はしき神殿として、成るべく完全に作り、なるべく見事に飾り立て、下さりました。

斯くて聖母は原罪の傷に惱されず、自罪の汚にも染まず、邪慾の騒ぎすら知り給はず、曇なき明鏡の如く、立派に主の御姿を寫し給ふと共に、また夜晝務め勵みて、ますく、善を修め、徳を研ぎ、終には、「萬の徳の淵なるイエズスの聖心」を生寫にでもしたかの如く、仰がれ給ふやうになつたのであります。

何と云つても人は心が第一であります。財産があらうと、身分が高からうと、容姿が優れて居ませうと、心が汚れ、品性が卑しくては全くお話になりません。で我々も主の聖心に適ひ、その御目を惹き奉るには、何はさて措き、聖母に倣つて心を修め、徳を研ぐやう務めなければなりません。

(2) 聖母の聖心は曇なき明鏡の如く、一點の汚にも染み給はぬのでありますから、天主様の御姿
聖母の最潔き聖心

がよく之に寫りました。聖母は絶えず之を眼前に打眺めて深く敬ひ、篤く愛し、一身を抛つて天主様の爲に盡し給ふのでありました。天主様の爲とあらば、如何なる犠牲をもお断りになりません。最愛の御獨子をさへ喜んで十字架壇上にお献げになりました。實に聖母は一生の間、たゞ天主様を思ひ、たゞ天主様を愛し、たゞ天主様の爲に生きて行かれました。その御言も、御行も、御胸の動悸までも、すべて天主様に對する愛情の發露であつたのであります。

誰にしても、聖母の如く心が潔くなると、また必ず天主様の愛熱に燃え立つて来る。心の潔い人は天主様の思に胸が一杯になつて居ます。全く單一であります。二つにも三つにも分れて居ません。随つて何時も天主様を思つて居ます。天主様に憧憬れて居ます。天主様の爲に喜んで苦痛を堪へ忍び、身を犠牲に供します。少しでも天主様の御光榮を揚げ、その聖心を喜ばせ奉ることが出来れば、我身は如何ならうと、全く頓着しないのであります。

我々が今日までそんな氣になり得ないのは、まだ身に罪の曇がある爲ではないでせうか。心が二つにも三つにも分れて居て、天主様の愛に専らなり能はぬからぢやありませんまいか。

(3) 聖母の聖心は劍に刺し貫かれ、白百合や赤薔薇を組合せて作つた冠を戴いたま、描かれてあります。是こそ聖母の聖心の感すべき御徳を示したもので、白百合は一點の汚なき潔さを見せ、赤薔薇はその燃ゆるが如き愛徳を象徴り、劍は人類の救贖の爲に死なばかりの悲痛に御胸を破られ給

欠

欠

昭和八年五月三十日印刷
昭和八年六月五日發行

編輯者 長崎市大浦天主堂
梅 木 兵 藏

印刷人 長崎市銅座町十番地
原 田 久 七 郎

印刷所 長崎市銅座町十番地
原 田 印 刷 所

發行所 長崎市南山手町乙一番地
長崎カトリック教報社

振替福岡一八二一九

廣告

- ◎基督信者寶鑑
- ◎聖體訪問
- ◎舊約史要 上卷
- ◎全 中卷
- ◎子供の舊約物語
- ◎心 靈修行 (3)
- ◎ミサ典禮
- ◎愛の王様

送壹圓四拾錢
 送六料拾四錢
 送六料拾六錢
 送六料拾八錢
 送拾料貳錢
 送壹圓貳拾錢
 送參料拾五錢
 送七料拾八錢

終